

神戸大学 文学部・大学院人文学研究科

2017年度（平成29年）度

# 年次報告書

神戸大学文学部・大学院人文学研究科 評価委員会編

2018年（平成30年）

# 目次

はじめに	1
------	---

## 第1部

I. 教育（文学部）	2
I-1. 文学部の教育目的と特徴	2
I-2. 教育の実施体制	4
I-3. 教育内容・方法	8
I-4. 教育方法	16
I-5. 学業の成果	21
I-6. 進路・就職の状況	27
II. 教育（人文学研究科）	29
II-1. 人文学研究科の教育目的と特徴	29
II-2. 教育の実施体制	32
II-3. 教育内容・方法	36
II-4. 教育方法	45
II-5. 学業の成果	51
II-6. 進路・就職の状況	58
III. 研究（文学部・人文学研究科）	61
III-1. 文学部・人文学研究科の研究目的と特徴	61
III-2. 研究活動の状況	63
III-3. 競争的外部資金の獲得状況	65

## 第2部

I. 外部資金による教育研究プログラム等の活動	72
I-1. 運営費交付金機能強化経費：実践型グローバル人材育成事業「日本語教育・ 日本研究を中心とした実践型グローバル人材育成事業」	72
I-2. 科学研究費補助金基盤研究（S）（研究代表者：奥村弘、課題番号：26220403） 「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて—」	76

II. 部局内センター等の活動	79
II-1. 海港都市研究センター	79
II-2. 地域連携センター	80
II-3. 倫理創成プロジェクト	85
II-4. 日本文化社会インスティテュート	90
II-5. ESD コース (持続可能な開発のための教育コース)	91
III. 社会貢献	97
III-1. 公開講座	97
III-2. 高大連携	99
第3部	
I. 外部評価	101
I-1. 外部評価委員会	101
I-2. 外部評価報告書	102

# はじめに

大学院人文学研究科長・文学部長  
増本 浩子

この報告書は3部構成になっています。第1部は人文学研究科および文学部の教育と研究、第2部は外部資金による教育研究プログラム等の活動と、部局内センターおよびインスティテュートの活動、第3部は外部評価委員による評価です。さらに加えて、各教員の教育・研究・社会貢献等に関わるプロフィールを附しています。

第3期中期目標・中期計画期間（平成28年度～33年度）中も基本的には第2期の6年間に毎年出してきた年次報告書の体裁を大きく変えることはせず、人文学研究科および文学部の教育研究活動に関する基礎資料を収集して自己評価を行っています。ただし、毎年実施している外部評価でのさまざまな指摘に基づいて昨年度からいくつかの点を改善しており、全体としては正確なデータを掲載することと、学外者にもわかりやすい記述にすることに努めました。

神戸大学では平成28年10月から教員組織と教育研究組織が分離され、29年4月からはポイント制が導入されて、人事のあり方が大きく変わりました。ポイント制が導入される際に、それまで保有していたポストをポイントに換算した数に一定の係数をかけて削減したものが部局に配分され、そこからさらに5%分のポイントを学長裁量枠ポイントとして供出しなければならず、合計で569ポイント減となりました。これは教授5名と講師1名分にあたり、実質的に6名の定員削減となったことを意味します。

また、周知のように文部科学省が第3期から運営費交付金配分を3類型化し、「卓越した成果を創出している海外大学と伍して、全学的に世界で卓越した教育研究、社会実装を推進する取組を第3期の機能強化の中核とする国立大」に分類された神戸大学は、運営費交付金に機能強化係数（▲1.6%）が適用されることになりました。それに合わせて各部局への配分が毎年一律10%カットとなっており、そうでなくても予算規模の小さい人文学研究科・文学部はますます苦しい立場に追い込まれています。その損失分を取り戻すべく概算要求を行った結果、29年度は機能強化経費（機能強化促進分）として1480万円配分され、一息つくことができました。取り組み事業名は「日本語教育・日本研究を中心とした実践型グローバル人材育成事業」で、本研究科のミッションにも即した内容となっています。

人的にも経済的にも余裕がないにもかかわらず、これまで以上に質の高い教育と研究の成果が求められる状況において、人文学研究科・文学部が1年間奮闘してきた軌跡を読み取っていただければと思います。

# 第1部

## 第1部

### I. 教育（文学部）

#### I-1. 文学部の教育目的と特徴

文学部は、人類の長い歴史の中で培われてきた豊かな知的遺産に学びつつ、現代世界で生起するさまざまな現象にも新鮮な関心を持ち、両者の相互参照を通じて新しい世界認識の基盤を構築することを目指す「場」である。以下に本学部の教育目的、組織構成、教育上の特徴について述べる。

##### I-1-1. 教育目的

- 1 文学部は、広い知識を授けると共に、言葉と文化、人間の行動、歴史や社会に関する教育研究を行い、人間文化および現代社会に対する深い教養、専門的知識、柔軟な思考能力、豊かな表現能力を有する人材の育成を目的とする。そして、こうした人材が、磨かれ鍛えられた能力を十分に生かして、積極的に社会に貢献することを目指している。
- 2 このような教育目的を達成するために、現行の中期目標では、「教育憲章」に掲げた、「人間性」、「創造性」、「国際性」及び「専門性」を身に付けた個性輝く人材を養成し、「豊富な研究成果を活かして、社会の変化を先導し、個人と国際社会が進むべき道を切り拓く高度な知識・能力を有する、次世代の研究者をはじめとした多様な人材の養成に努め、教育の更なる高みを目指す」ことを定めている。
- 3 神戸大学全学のディプロマ・ポリシー（DP）を踏まえ、人材育成の基本となる文学部 DP およびカリキュラム・ポリシー（CP）を平成27年度に作成し、公開した《資料1》。

##### 《資料1：神戸大学文学部ディプロマ・ポリシー（DP）》

###### 神戸大学文学部ディプロマ・ポリシー

神戸大学文学部は、人類の文化的営みの蓄積としての人文学を、古典をとおして深く理解するとともに、社会的対話によりそれを実践していくことのできる人材を育成することを教育上の目的としている。また、徹底した少人数教育により、個々の学生の好奇心に応え、自ら問題を設定し、解決するスキルを学生に伝授することを目指している。

この目標達成に向け、文学部では、以下に示した方針に従って学位を授与する。

###### ○ 学位授与に関する方針

文学部の学生は、所定の単位（卒業論文を含む）を修得しなければならない。卒業論文の単位修得のためには、指定の期日までに卒業論文を提出し、卒業論文試験に合格することを要する。

###### ○ 達成目標

- ・各自の好奇心を学問的に問題化し検証する訓練を積むことで、人文学の幅広い知識と深い洞察力を身につける。
- ・人文学共通の問題・課題を、人類の知的営みの蓄積である古典を通じて理解する。
- ・文化・言葉・学域の壁を越えた意思疎通および連携を可能にする社会的対話力を身につける。

##### I-1-2. 組織構成

上記の教育目的を実現するために、文学部は《資料2》のような組織構成をとっている。人文学の古典的な学問領域である哲学、文学、史学を学ぶ3講座と人間的知識と感性をシステムとして捉える知識システム講座、社会文化に関わる問題をフィールドワークを通して深めていくことを目指す社会文化講座を置き、徹底した少人数教育によって専門的能力を陶冶することに重点を置いた教

育課程を編成している。

《資料2：組織構成》

学 科	講 座	専 修
人文学科	哲学	哲学
	文学	国文学、中国文学、英米文学、ドイツ文学、フランス文学
	史学	日本史学、東洋史学、西洋史学
	知識システム	心理学、言語学、芸術学
	社会文化	社会学、美術史学、地理学

I-1-3. 教育上の特徴

- 1 文学部では、① 初年次に大学における人文学の基礎を学び、② それを踏まえて《資料2》の15専修から1つを選び、2年次からその専修において少人数教育により専門的能力を鍛え、③ 各専修内の複数の専門分野で自身の関心を絞り込み、卒業論文を書きあげる。文学部では特に、学部教育の集大成として卒業論文の作成を重視し、1～2年間の指導期間を設定している。
- 2 文学部は、少人数教育による課題探究能力の開発を重視している。具体的には、個別の主題を掘り下げる「特殊講義」などのほか、数人から十数人で行う「演習」が専修ごとに豊富に用意されている。「実験」や、フィールドワークを含む「実習」も同じく少人数で実施される。これらの授業において共通の文献や資料を精読し、さらに自分で選択したテーマについて研究報告を行い、互いに議論を戦わせ深め合うことで、学生は各専門の研究姿勢・基礎知識・研究方法および研究倫理等を習得する。それと同時に、自ら課題を発見し、解決する能力を磨く。
- 3 文学部は、平成23年3月にオックスフォード大学東洋学部と学術交流協定を締結し、「神戸オックスフォード日本学プログラム」(略称 KOJSP=Kobe-Oxford Japanese Studies Program)として、平成24年10月からオックスフォード大学東洋学部日文学科2年生全員を受入れている《資料3》(<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/graduate/kojsp.html>)。これはユニット受入れ型のプログラムであり、文学部とオックスフォード大学東洋学部との間の綿密な連絡・連携のもとに実施されており、派遣元および学内外から極めて高い評価を得ている《資料4》。オックスフォード大生は午前中に日本語の授業を受講し、午後は文学部の様々な授業を他の学生と受けている。全員が参加する「KOJSP 演習」では、各自が自由に課題を選び、指導教員や学生チューターとともに日本の諸相についての研究を進め、その成果をプログラム修了時の発表会で披露することになっている。「KOJSP 演習」で選んだ課題をオックスフォード大学での卒業論文とする学生も少なくない。彼らの学習・生活面でのサポートを文学部の学生チューターが担うなど、世界最高レベルの学生とともに勉学し、学生生活を送ることで、文学部の日本人学生に対しても大きな影響を与えており、勉学に対する意識を高め、国際的な視野を獲得することに貢献している《資料5》。平成25年度からはハートフォード・カレッジにて夏季英語講習が神戸大学文学部と共同で実施されており、毎回20名前後の神戸大学生がオックスフォード大学で学んでいる。また、平成24年度からはじまった文部科学省グローバル人材育成推進事業「問題発見型リーダーシップを発揮できるグローバル人材の育成」の一環として「グローバル人文学プログラム」を実施している(<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/global/index.html>)。これらの事業を中心に、文学部ではグローバル教育の一層の活性化を図っている。

《資料3：神戸オックスフォード日本学プログラム留学生数》

年 度	所属大学名	出身国	奨学金	期 間
	オックスフォード大学 (10名)	連合王国 (6名) 連合王国・タイ (1名) 日本・連合王国 (1名) タイ (1名) ハンガリー (1名)	JASSO 及び 神戸大学 基金	26年10月1日～27年7月31日

平成 25～29 年度	オックスフォード 大学 (10名)	連合王国 (6名) 連合王国・ギリシャ (1名) 連合王国・カナダ (1名) スペイン (1名) ベルギー・ロシア (1名)	JASSO	27年10月1日～28年7月31日
	オックスフォード 大学 (7名)	連合王国 (6名) 中国(1名)	JASSO( 連 合王国5名、 中国1名)	28年10月1日～29年7月31日
	オックスフォード 大学 (10名)	連合王国 (7名) 日本・アメリカ(1名) 中国(1名) スロバキア (1名)	JASSO	29年10月1日～30年7月31日

#### 《資料4：オックスフォード大学東洋学部からの極めて高い評価》

<p>神戸大学 HP に掲載されたニュースから抜粋：</p> <p>○「懇談の冒頭で、ハミルトン学長から「神戸オックスフォード日本学プログラム」は大変素晴らしく、神戸大学で学んだ学生から非常に有意義な時間を過ごしたとの報告を受けており、深く御礼を申し上げたい、との言葉がありました。また、是非とも今後も「神戸オックスフォード日本学プログラム」を継続して実施したい、との意向も示されました。」</p> <p>(参照： <a href="http://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/topics/t2013_10_17_01.html">http://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/topics/t2013_10_17_01.html</a>)</p> <p>○「フレズビック教授は、神戸オックスフォード日本学プログラムの実施状況がきわめて順調であり、現在このプログラムに参加しているオックスフォード大学日本学専攻学生10名の満足度も非常に高いことに対して感謝の意を表した後、オックスフォード大学と神戸大学の学術交流をますます盛んにするため、ヨーロッパ日本研究協会(European Association for Japanese Studies)の会長として2016年の国際大会を神戸大学で開催したい旨を述べ、武田学長もそれに協力することを約束しました。」</p> <p>(参照： <a href="http://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/info/2015_06_30_02.html">http://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/info/2015_06_30_02.html</a>)</p>
---

#### 《資料5：KOJSPに関するオックスフォード大学生及び本学部チューターの声》

<p>神戸大学文学部 HP から抜粋 (<a href="http://www.lit.kobe-u.ac.jp/let2016/report.html">http://www.lit.kobe-u.ac.jp/let2016/report.html</a>)：</p> <p>○オックスフォード大学生：「私が日本に来たのはこれが初めてだったので、留学生活がいったいどんなものになるのか、全くわかりませんでした。初めは緊張していましたが、神戸大学に来てから、いろいろと援助してもらったおかげで、本当に楽しく過ごせています。特にスーパーバイザー（同じ学部の先生）とチューター（同じ学部の方々）にはお世話になりました。」</p> <p>○ KOJSP チューター：「同世代で共通点も多いですが、やはり文化差は存在します。特に差別に対する感覚や考え方については日本とイギリスではかなり違うので、私たち日本人が意図せずに彼らを傷つけてしまうこともあります。そういう時は親身になって彼らの話を聞き、相互理解を深めるのがチューターの役目です。」</p>
--

## I-2. 教育の実施体制

### I-2-1. 基本的組織の編成

文学部では、学生1人1人の好奇心を、現代の人文科学の学問的状況に即して問題化し検証する訓練を積むことで、人間文化に対する幅広い知識と深い洞察力を身につけた社会人及び研究者を育成するという目的を達成するために、1学科（人文学科）を設け、その下に学問分野の観点から5大講座を置いている《資料2（2頁）》。教育組織の編成については、社会動向及び学問動向を勘案した上で専門性に応じた適切な教育を実施するために適宜見直しており、現行の1学科制は平成13年度に3学科（哲学科、史学科、文学科）から再編統合して新たに設置したものである。

教員の配置状況は、《資料6》及び《資料7》のとおりである。教育の単位となる15の専修には

それぞれ2名以上の専任教員が配属され、演習・特殊講義・概論・入門・人文学基礎といった主要な科目を担当している。非常勤講師に担当を依頼している授業は、各専修の専任教員でカバーしきれない分野と、学芸員・教員などの免許・資格に関するものに限定されている。100名（平成28年度以前の入学生は115名）の入学定員に対し専任教員は54名であり、大学設置基準が要求する専任教員数を十分に確保している。

《資料6：教員の配置状況：平成29年5月1日現在》

学科	収容定員	専任教員数（現員）											助手		非常勤教員数	
		教授		准教授		講師		助教		計						
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	総計	男	女	男	女
人文学科	430	24	1	19	9	0	2	0	0	43	12	55	0	0	19	11

《資料7：専修別教員数》

専修	教授	准教授	講師	専修	教授	准教授	講師	専修	教授	准教授	講師
哲学	2	3	0	フランス文学	1	1	0	言語学	2	1	0
国文学	4	2	0	日本史学	2	2	0	芸術学	1	1	0
中国文学	2	1	0	東洋史学	1	3	0	社会学	3	2	0
英米文学	2	2	1	西洋史学	0	3	0	美術史学	1	1	0
ドイツ文学	1	1	0	心理学	2	3	0	地理学	1	2	0

入学者の選抜については、全学的な理念を踏まえながら文学部として求める学生像（アドミッション・ポリシー）を定め《資料8》、大学入試センター試験利用による基礎学力判断の後、個別学力試験では「国語」「外国語」「数学」（前期）、「外国語」「小論文」（後期）を課すことにより、理解力、読解力、語学力、問題解決能力、論理的思考力、表現能力などを総合的に判定することとしている。

学生定員と現員の状況については《資料9》、専修別の学生数（平成26～29年度）は《資料10》の通りである。在籍学生数は毎年学生定員を若干超過しているが、その数は、標準卒業年限を超える学生を含めて学生定員の15%以下であり、適正範囲であると考えられる。

《資料8：求める学生像（アドミッション・ポリシー）》

神戸大学が求める学生像
<p>神戸大学は、世界に開かれた国際都市神戸に立地する大学として、国際的で先端的な研究・教育の拠点になることを目指しています。</p> <p>これまで人類が築いてきた学問を継承するとともに、不断の努力を傾注して新しい知を創造し、人類社会の発展に貢献しようとする次のような学生を求めています。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 進取の気性に富み、人間と自然を愛する学生</li> <li>2. 旺盛な学習意欲をもち、新しい課題に積極的に取り組もうとする学生</li> <li>3. 常に視野を広め、主体的に考える姿勢をもった学生</li> <li>4. コミュニケーション能力を高め、異なる考え方や文化を尊重する学生</li> </ol>

### 文学部が求める学生像

文学部では、人間がつくり上げてきた文化に対する好奇心を高め、多様な角度から人間存在の深みに光をあてる教育研究を行っています。各自の好奇心を学問的に問題化し検証する訓練を積むことで、人文学の幅広い知識と深い洞察力を身につけた人材を育成することを目標にしています。そのために、次のような学生を求めています。

### 文学部の求める学生像

1. みずみずしい感受性と想像力を持っている学生
2. 言葉や文化、人間の行動、歴史や社会に対する幅広い関心と好奇心を持っている学生
3. 基礎学力、とりわけ論理的思考力、日本語および外国語の読解力・表現力、情報リテラシーを備えている学生
4. 既成の価値観にとらわれることなく、自分で問題を発見し、探求していくことができる学生

以上のような学生を選抜するために、文学部では、大学入試センター試験により総合的な基礎学力を測り、個別学力検査では「国語」「外国語」「数学」（後期日程にあつては、「外国語」「小論文」）を課すことにより、理解力、読解力、語学力、課題解決能力、論理的思考力、表現能力等を測ります。

### 《資料9：学生定員（収容定員）と現員の現況：各年度12月1日現在》

学科	年度	収容定員	現員	定員充足率 (年)	定員充足率 (中期)
	平成26年度	460	514	112%	113%
	平成27年度	460	520	113%	
	平成28年度	460	518	113%	
	平成29年度	445	500	112%	

### 《資料10：専修別の学生数（平成29年度）》

専修	2年	3年	4年	専修	2年	3年	4年	専修	2年	3年	4年
哲学	7	6	7	フランス文学	3	5	6	言語学	8	8	8
国文学	23	15	20	日本史学	7	5	9	芸術学	8	8	9
中国文学	3	1	1	東洋史学	1	5	3	社会学	18	16	23
英米文学	13	16	10	西洋史学	3	11	12	美術史学	8	8	10
ドイツ文学	6	5	7	心理学	12	12	13	地理学	3	3	7

### I-2-2. 教育内容、教育方法の改善に向けた取組み

文学部では、1年次生を対象として、少人数ゼミ、オムニバス形式の講義、専門分野ごとの入門科目を開講しており、専門的知識の習得と共に、広い人文学的な視座の獲得が可能となっている。

教育の実施体制を点検し改善していくため、評価委員会を置き、授業評価アンケートの実施など、教育に関わる評価作業を行うだけでなく、教員の教育方法及び技術の向上を図るためにファカルティ・ディベロップメント（以下、「FD」と略称）を開催している。文学部のFDは、平成23年度からは評価委員会が中心となり、教務・学生の2委員会の協力を得て行っている。また、学生による授業評価アンケート、教員相互の授業参観・評価（ピアレビュー）を定期的に行い、その結果は、FDにおいて評価委員長から報告され、今後のカリキュラム編成や授業方法の改善のために活用するとともに、中期目標の実現に向けた教育課程の改善が図られている《資料11》《資料12》。さらに、毎年度、評価報告書を作成し、独自に外部評価を受け、達成点と改善点を的確に把握し、それを教員・職員間で共有することに努めている《資料13》。

こうした活動を通して、個々の科目の授業内容を改善することはもちろん、カリキュラム構成や授業方法等の改善も頻繁になされており、たとえば、グローバル化に対応した授業として「グローバル人文学プログラム」に加えて、神戸オックスフォード日本学プログラムで受け入れているオックスフォード大学の学生が受講する授業等も展開されている。

《資料11：平成28・29年度のFD実施状況》

開催日	テーマ	参加者数
平成28年1月13日	教員評価について	41
平成28年1月27日	グローバルFD講演会「This, That, or the Other? On Japanese Studies in Romania」	49
平成28年2月2日	グローバルFD講演会「ヤゲウォ大学における国際化戦略」	41
平成28年2月17日	障害者差別解消法と来年度からの神戸大学の体制について	46
平成28年3月7日	平成27年度ピアレビュー結果の検討及び授業評価アンケートの結果について	53
平成28年6月8日	入試改革について	55
平成29年1月25日	平成27年度ピアレビュー結果の検討及び授業評価アンケート結果について	53
平成29年2月15日	Horizon 2020 セミナー	51
平成29年3月19日	"The Globalizing Strategy in the Education of the University of Hawaii" (「ハワイ大学における教育のグローバル化戦略」)	46
平成29年5月24日	「中国における日本語教育と北京日本学研究中心・神戸大学間のダブルディグリープログラムについて」	50
平成29年6月14日	「アカデミック・ライティング指導の意義 —早稲田大学の取り組みから—」	51
平成29年7月12日	「中東欧と日本：国際交流基金ブダペスト日本文化センターの活動報告」	45
平成29年9月6日	文部科学省事業「地（知）の拠点大学による地方創成推進事業（COC+）」について	41
平成29年12月20日	平成29年度ピアレビュー結果の検討について	48

《資料12：平成29年度ピアレビュー実施結果 抜粋》

<p>(1) 実施期間 前期 平成29年6月26日(月)～7月7日(金)</p> <p>(2) 授業参観を行った教員数 33名 ※ 59%の参加率（休職中の教員を除く全教員数：56名）</p> <p>(3) 参観を受けた授業数 1名の参観者：14      2名の参観者：4      3名以上の参観者：3 ※ 講義科目のみを授業参観の対象科目としている。</p> <p>(4) 授業参観レポートの集計結果</p> <p>1. 授業改善上、参考になった項目（複数回答）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 説明のしかた・・・・・・・・・・・・・・・・ 23</li> <li>○ 配布資料・板書などの視覚資料・・・・ 21</li> <li>○ 学生とのインタラクション・・・・・・ 14</li> <li>○ TAの使い方・・・・・・・・・・・・・・・・ 1</li> </ul> <p>2. 自由な感想の主な内容（特に参考になった点）</p> <p>○授業の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・具体的な数字を出したり、例を多く出して学生に分かりやすく説明していた。</li> <li>・従来の説を紹介した上で、資料の読解によって自説を展開するやり方が説得的だった。</li> <li>・高度な内容を学生の視点に立って説明していた。</li> <li>・今期の授業全体の中でのその日の授業を位置づけから始まる丁寧な説明が参考になった。テンポの良</li> </ul>
--

い授業だったが、PPT の内容が予め配布されており、早い展開にも十分について行けた。アニメやテレビドラマなど、身近な話題を随所でとり上げて、学生の関心を引き込む手法にも手慣れたものを感じた。

- ・時事問題を題材にしながら、現状を歴史的背景のもとに考察させるのは効果的と思われる。
- ・実物投影のプロジェクターで教科書とプリントを提示した上で、説明に合わせてそのプリントに説明などを書き込んでいくというやり方が新鮮だった。また、随時学生に簡単な質問をして、その質問に答えることで理解を深めさせる進め方も分かりやすい。
- ・大教室にもかかわらず、学生との双方向のインタラクションがなされている。
- ・講義初めの導入で学生に作業を課したことで、受講生の集中力が高まったのがよく分かった。
- ・配布資料が1枚にコンパクトに内容が整理されていて分かりやすい。
- ・非常に細かくまとめられた配布資料が印象的だった。

#### 《資料13：平成26～29年の外部評価実施状況》

実施日	外部評価委員
平成26年6月28日	深澤克巳（東京大学教授）
平成27年6月27日	立花政夫（東京大学名誉教授、元東京大学人文社会系研究科長）
平成28年7月3日	中島道男（奈良女子大学教授・奈良女子大学大学院人間文化研究科長） BONAVENTURA RUPERTI（ヴェネツィア大学教授・国際日本文化研究センター外国人研究員）
平成29年6月26日	中畑正志（京都大学大学院文学研究科・教授）

### I-3. 教育内容・方法

#### I-3-1. 教育課程の編成

文学部では、ディプロマポリシーにおいて、学生が修了までに達成を目指す目標として、次の3点を挙げている。1) 各自の好奇心を学問的に問題化し検証する訓練を積むことで、人文学の幅広い知識と深い洞察力を身につける、2) 人文学共通の問題・課題を、人類の知的営みの蓄積である古典を通じて理解する、3) 文化・言葉・学域の壁を越えた意思疎通および連携を可能にする社会的対話力を身につける。これらを実現するために、以下のような教育課程を組んでいる。

教育課程は、「専門科目」及び「専門科目以外の科目」で構成されている。「専門科目以外の科目」は、「全学共通科目」である教養原論、外国語科目、情報科目、健康・スポーツ科目及び「資格免許のための科目」から成り、多様な授業科目を開講すると共に教育職員免許及び学芸員資格を取得するために必要な授業科目を提供している。「専門科目」は、演習と講義形式による概論、特殊講義を中心に構成され、多彩な研究領域に対応する多様な内容、形態の授業科目が置かれている。また、英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、中国語、韓国語、ラテン語、古典ギリシア語の外国語科目のほか、専門科目を学ぶにあたって必要となる語学力を涵養する授業も開講されている。以上の形で、幅広い知識と深い洞察力を身につけることができるようにしている。

文学部では、新入生全員を対象とした導入教育として、1年次前期に5つの講座がそれぞれ入門の講義を行うと共に、「人文学導入演習」を複数開講し、今後の教育に必要な基本的な視座や研究・学習方法の基礎を実践的に身につけさせている。また、平成28年度より「初年次セミナー」を実施し、神戸大学生・及び文学部生として身につけておくべき初歩的知識の修得をめざしている。さらに、1年次後期には15の専修がそれぞれ開講する「人文学基礎」においてより具体的かつ専門的な研究内容を学ぶ授業を提供している。文学部の学生は、このようにして人文学の基礎を学び、人文学共通の問題と課題を理解し、それを踏まえて15専修の中から1専修を自ら選び、その専修において、徹底した少人数教育をとおして専門的能力を陶冶し、さらに、各専修内に複数ある専門分野の中で自身の関心を絞り込んで卒業論文を作成することになっている。

「専門科目」の内容としては、例えば、「哲学演習」では、ドイツ語論文を精読することで文献

読解力の向上をはかると共に学生間の議論をとおして問題探求能力を高めることを目指した。このような授業は古典理解をとおして人文的課題を考える良い例である。

文学部の教育方針を明確化するため、平成18年度には履修モデルケースを専修毎に作成し提示した。また平成26年度から取り組んできた開講科目すべてに固有のナンバーを割当てる作業（ナンバリング）が完了し、それぞれの学年・専修において必要とされる科目が平成28年度から明確化されている。

### I-3-2. 学生や社会からの要請への対応

文学部では、グローバル化が進む現代社会における諸問題に対応し、また社会からの要請に応えるため、教育課程の編成やそれらに配慮した取組みを以下のとおり実践している。

#### 1. 他学部科目の履修

文学部では、他学部の専門科目を文学部開講専門科目の自由選択科目と同等に扱い、卒業要件単位として認めている。学生は、一定の要件のもとで、文学部の専門科目と他学部の専門科目から30単位を自由選択科目として修得し、卒業に必要な単位とすることができる。また、文学部、発達科学部、経済学部、農学部、国際文化学部、工学部及び医学部が共同で実施する「神戸大学 ESD コース」(Education for Sustainable Development : 持続可能な開発のための教育) が設定されており、関係学部の授業を体系的に履修することができるようになった。ESD コースを修了しようとする学生は修了要件《資料 14》の定めるところに従い、14 単位以上を修得しなければならない。修了が認定された者には修了認定書が授与される。「神戸大学 ESD コース」の授業科目として、文学部では「環境人文学」を開講し、広く環境問題に関わるアクションリサーチ型演習と講義を行っている。持続可能な社会のためには、特に市民・住民によるイニシアチブが重要であることを踏まえ、ボランティア活動やNPO 活動といった事例を積極的に講義で扱っている。(「ESD コース」については、「第2部 II-4. ESD コース」を参照。)

《資料 14 : ESD コース修了要件 授業科目名, 単位数, 開講時期及び開講学部等

授業科目区分等	授業科目名	単位数	必要修得単位数	配当年次	開講学部等	
基礎科目	実践農学入門	2	2	1年次	農学部	
	I ESD基礎 (持続可能な社会づくり1) A	1		1年次	国際教養教育院	
	E SD基礎 (持続可能な社会づくり1) B	1		2年次	国際教養教育院	
	E SDボランティア論	1		1年次	国際教養教育院	
	II 群	E SD論 (持続可能な社会づくり2) A	1	2	1年次	国際教養教育院
		E SD論 (持続可能な社会づくり2) B	1		1年次	国際教養教育院
		E SD生涯学習論A	1		1年次	国際教養教育院
		E SD生涯学習論B	1		1年次	国際教養教育院
関連科目	環境人文学講義 I (a)	1	6	2年次	文学部	
	環境人文学講義 I (b)	1		2年次	文学部	
	環境人文学講義 II (a)	1		2年次	文学部	
	環境人文学講義 II (b)	1		2年次	文学部	
	比較政治社会論A	1		2年次	国際人間科学部	
	比較政治社会論B	1		2年次	国際人間科学部	
	スポーツコミュニティ形成論1	1		3年次	国際人間科学部	
	スポーツコミュニティ形成論2	1		3年次	国際人間科学部	
	幼児心理学演習1	1		2年次	国際人間科学部	
	幼児心理学演習2	1		2年次	国際人間科学部	
	初等理科論1	1		2年次	国際人間科学部	
	初等理科論2	1		2年次	国際人間科学部	
	生活空間計画論	2		2年次	国際人間科学部	
	緑地環境論	2		2年次	国際人間科学部	

知覚と行為 1	1	2年次	国際人間科学部
知覚と行為 2	1	2年次	国際人間科学部
グローバル開発政策論	2	2年次	国際人間科学部
生物多様性科学	2	2年次	国際人間科学部
環境社会学	2	2年次	国際人間科学部
コミュニティとメディア 1	1	3年次	国際人間科学部
コミュニティとメディア 2	1	3年次	国際人間科学部
ライフコースの心理学 1	1	3年次	国際人間科学部
ライフコースの心理学 2	1	3年次	国際人間科学部
E S D実践論 1	1	3年次	国際人間科学部
E S D実践論 2	1	3年次	国際人間科学部
国際法 I	2	2年次	法学部
国際政治経済	2	2年次	法学部
環境法	2	3年次	法学部
社会保障法	2	3年次	法学部
国際法 II	2	2年次	法学部
国際法 III	2	3年次	法学部
環境NPO実践論	2	2年次	経済学部
社会コミュニケーション入門	2	2年次	経済学部
社会環境会計	2	2年次	経営学部
地域医療学	1	1~3年次	医学部医学科
地域医療システム学	2	2年次	医学部医学科
公衆衛生学	3	3年次	医学部医学科
国際保健	1	2年次	医学部保健学科
災害保健	1	3年次	医学部保健学科
緩和ケア論	1	4年次	医学部保健学科
リハビリテーション工学・福祉用具学	1	3年次	医学部保健学科
現代医療と生命倫理	1	1年次	医学部保健学科
I P W概論	1	1年次	医学部保健学科
公衆衛生学	1	2年次	医学部保健学科
環境・食品・産業衛生学	1	2年次	医学部保健学科
小児疾病論	1	2年次	医学部保健学科
地球環境論	1	1年次	工学部
水文学	2	3年次	工学部
国際関係論	1	3年次	工学部
都市地域計画	2	3年次	工学部
合意形成論	1	3年次	工学部
農と植物医科学入門 1	1	1年次	農学部
農と植物医科学入門 2	1	1年次	農学部
熱帯有用植物学 1	1	3年次	農学部
熱帯有用植物学 2	1	3年次	農学部
森林環境学入門 1	1	1年次	農学部
森林環境学入門 2	1	1年次	農学部
食料生産管理学	2	2年次	農学部
森林生態学	2	2年次	農学部
土壌と環境	2	3年次	農学部
森林保護学 1	1	3年次	農学部
森林保護学 2	1	3年次	農学部
海事社会学-1	1	1年次	海事科学部
海事社会学-2	1	1年次	海事科学部
阪神・淡路大震災 A	1	2年次	国際教養教育院

	阪神・淡路大震災B	1		1年次	国際教養教育院
	ボランティアと社会貢献活動A	1		1年次	国際教養教育院
	ボランティアと社会貢献活動B	1		1年次	国際教養教育院
フィールド 演習科目	E S D演習 I (環境人文学) (a)	1	4	2年次	文学部
	E S D演習 I (環境人文学) (b)	1		2年次	文学部
	E S D演習 II (環境人文学) (a)	1		2年次	文学部
	E S D演習 II (環境人文学) (b)	1		2年次	文学部
	E S D演習 I 1 (国際人間科学)	1		2年次	国際人間科学部
	E S D演習 I 2 (国際人間科学)	1		2年次	国際人間科学部
	E S D演習 II 1 (国際人間科学)	1		2年次	国際人間科学部
	E S D演習 II 2 (国際人間科学)	1		2年次	国際人間科学部
	環境法演習	2		3年次	法学部
	国際法演習	2		3年次	法学部
	国際関係論演習	2		3年次	法学部
	E S D演習 I (環境経済学 I)	2		2年次	経済学部
	E S D演習 II (環境経済学 II)	2		2年次	経済学部
	初期体験臨床実習	1		1年次	医学部医学科
	早期臨床実習 1	1		2年次	医学部医学科
	早期臨床実習 2	1		3年次	医学部医学科
	I P W	1		4年次	医学部医学科
	初期体験実習	1		1年次	医学部保健学科
	I P W統合演習	1		4年次	医学部保健学科
	研究ゼミナール	1		2年次	医学部保健学科
	看護研究方法論	1		3年次	医学部保健学科
	寄生虫検査学実習	1		3年次	医学部保健学科
	検査統合演習	1		3年次	医学部保健学科
	日常生活活動学実習	1		2年次	医学部保健学科
	理学療法地域医療実習	1		3年次	医学部保健学科
	基礎作業学実習 I	1		2年次	医学部保健学科
	基礎作業学実習 II	1		3年次	医学部保健学科
	兵庫県農業環境論 A	1		2年次	農学部
	兵庫県農業環境論 B	1		2年次	農学部
	実践農学	2		2年次	農学部
	必要修得単位数の合計			14単位 以上	

## 2. 海外協定校との単位互換

文学部は全学協定及び部局間協定に基づき海外の大学と単位互換協定を締結している《資料15》。この制度に基づく平成25～29年度の学生交換の実績は、受け入れ70名《資料16》、派遣34名である《資料17》。交換留学等によりこれら海外の協定校で取得した単位のうち60単位までを卒業に必要な単位として認定することで、より積極的な留学を支援している。

### 《資料15：単位互換協定を締結している海外の大学 平成30年3月現在》

協定校	国名	大学間協定	部局間協定
木浦大学校	大韓民国	○	
成均館大学校	大韓民国	○	
韓国海洋大学校	大韓民国	○	

ソウル国立大学校	大韓民国	○	
高麗大学校	大韓民国	○	
国立群山大学校	大韓民国	○	
木浦海洋大学校	大韓民国	○	
韓国外国語大学校	大韓民国		○
山東大学	中華人民共和国	○	
華東師範大学思勉人文高等研究院	中華人民共和国	○	
中山大学	中華人民共和国	○	
南京大学	中華人民共和国	○	
中国海洋大学	中華人民共和国	○	
復旦大学	中華人民共和国	○	
北京外国語大学	中華人民共和国	○	
武漢大学	中華人民共和国	○	
上海交通大学	中華人民共和国	○	
清華大学	中華人民共和国	○	
上海海事大学	中華人民共和国	○	
大連海事大学	中華人民共和国	○	
江南大学	中華人民共和国		○
鄭州大学	中華人民共和国		○
浙江大学	中華人民共和国		○
香港大学	中華人民共和国		○
東北大学	中華人民共和国		○
国立台湾大学	台湾	○	
国立政治大学	台湾	○	
国立台湾海洋大学	台湾	○	
スラバヤ工科大学	インドネシア	○	
南洋理工大學	シンガポール	○	
モンゴル国立大学	モンゴル	○	
イスタンブール工科大学	トルコ	○	
クイーンズランド大学	オーストラリア	○	
西オーストラリア大学	オーストラリア	○	
ウーロンゴン大学	オーストラリア	○	
オーストラリア商船大学	オーストラリア	○	
ピッツバーグ大学	アメリカ	○	
オタワ大学	カナダ	○	
グラーツ大学	オーストリア	○	
カレル大学	チェコ	○	
パリ第2大学	フランス	○	

パリ第10大学	フランス	○	
リヨン高等師範学校	フランス	○	
パリ第7大学	フランス	○	
バルセロナ大学	スペイン	○	
バーゼル大学	スイス	○	
バーミンガム大学	イギリス	○	
SOAS ロンドン大学東洋アフリカ研究学院	イギリス	○	
オックスフォード大学	イギリス	○	
エセックス大学	イギリス	○	
ライデン大学	オランダ	○	
ソフィア大学	ブルガリア	○	
ブリュッセル自由大学	ベルギー	○	
ヴェネツィア大学	イタリア	○	
ボローニャ大学	イタリア	○	
トリノ大学	イタリア	○	
ヤゲウォ大学	ポーランド		○
キール大学	ドイツ	○	
マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク	ドイツ	○	
トリーア大学	ドイツ	○	
ハンブルク大学	ドイツ	○	
ブカレスト大学	ルーマニア	○	
サンクトペテルブルグ大学	ロシア	○	

《資料16：交換留学（受入）実績》

年度	所属大学名	出身国	奨学金	期間
平成 25年度	上海交通大学	中華人民共和国		25年4月1日～26年3月31日
	成均館大学	大韓民国		25年4月1日～25年9月31日
	北京外国語大学	中華人民共和国		25年4月1日～26年3月31日
	パリ第7大学	フランス		25年10月1日～26年9月30日
平成 26年度	北京外国語大学	中華人民共和国	JASSO	26年4月1日～27年3月31日
	武漢大学	中華人民共和国	JASSO	26年4月1日～27年3月31日
	武漢大学	中華人民共和国	JASSO	26年10月1日～27年9月30日
	上海交通大学	中華人民共和国	JASSO	26年4月1日～27年3月31日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	26年10月1日～27年9月30日
	国立台湾大学	台湾	JASSO	26年10月1日～27年3月31日
	山東大学	中華人民共和国	JASSO	26年10月1日～27年9月30日
	ロンドン大学 SOAS	連合王国	JASSO	26年10月1日～27年9月30日
	成均館大学	大韓民国	HUMAP	26年10月1日～27年3月31日
	カレル大学	チェコ	JASSO	26年10月1日～27年9月30日

	木浦大学校	大韓民国	HUMAP	26年10月1日～27年9月30日
	ワシントン大学	アメリカ合衆国	JASSO	26年10月1日～27年9月30日
	清華大学	中華人民共和国		26年10月1日～27年3月31日
平成 27年度	武漢大学	中国	JASSO	27年4月1日～28年3月31日
	グラーツ大学	オーストリア		27年4月1日～27年9月30日
	中山大學	中国	HUMAP	27年10月1日～28年3月31日
	ピッツバーグ大学	アメリカ		27年10月1日～28年9月30日
	西オーストラリア大学	オーストラリア		27年10月1日～28年3月31日
	グラーツ大学	オーストラリア	JASSO	27年10月1日～28年9月30日
	ロンドン大学 SOAS	連合王国	JASSO	27年10月1日～28年9月30日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	27年10月1日～28年9月30日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	27年10月1日～28年9月30日
平成 28年度	西オーストラリア大学	オーストラリア		28年4月1日～28年9月30日
	西オーストラリア大学	オーストラリア		28年4月1日～28年9月30日
	北京外国語大学	中国	神戸大学基金	28年4月1日～29年3月31日
	武漢大学	中国		28年4月1日～28年9月30日
	ピッツバーグ大学	アメリカ		28年10月1日～29年9月30日
	トリーア大学	ルクセンブルク		28年10月1日～29年9月30日
	トリーア大学	ドイツ		28年10月1日～29年9月30日
	中山大學	中国	HUMAP	28年10月1日～29年9月30日
	木浦大学校	韓国	HUMAP	28年10月1日～29年9月30日
復旦大学	中国	神戸大学基金	28年10月1日～29年3月31日	
平成 29年度	ピッツバーグ大学	アメリカ		29年4月1日～29年9月30日
	ピッツバーグ大学	中国	JASSO	29年10月1日～30年3月31日
	ピッツバーグ大学	日本		29年10月1日～30年9月30日
	クイーンズランド大学	オーストラリア	JASSO	29年4月1日～30年3月31日
	北京外国語大学	中国	JASSO	29年4月1日～30年3月31日
	清華大学	インドネシア	JASSO	29年10月1日～30年3月31日
	清華大学	中国	JASSO	29年10月1日～30年3月31日
	清華大学	韓国	JASSO	29年10月1日～30年3月31日
	上海交通大学	中国	JASSO	29年10月1日～30年3月31日
	武漢大学	中国	JASSO	29年10月1日～30年9月30日
	中山大學	中国	HUMAP	29年10月1日～30年9月30日
	木浦大学	韓国	HUMAP	29年10月1日～30年9月30日
	木浦大学	韓国	HUMAP	29年10月1日～30年9月30日
	ロンドン大学 SOAS	イギリス	JASSO	29年10月1日～30年9月30日
	ロンドン大学 SOAS	イギリス	JASSO	29年10月1日～30年9月30日
グラーツ大学	オーストリア	JASSO	29年10月1日～30年9月30日	
ボローニャ大学	イタリア		29年10月1日～30年9月30日	

※HUMAP：兵庫・アジア太平洋大学間交流ネットワーク、JASSO：日本学生支援機構、JENESYS 日韓文化交流基金

《資料17：交換留学（派遣）実績》

年度	派遣大学名	派遣国	奨学金	期 間
平成 25年度	ハンブルク大学	ドイツ		25年8月1日～26年7月31日
	ワシントン大学	アメリカ合衆国	JASSO	25年9月25日～26年6月14日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	25年9月1日～26年6月30日
	グラーツ大学	オーストリア	JASSO	25年9月5日～26年7月5日
平成 26年度	バーミンガム大学	連合王国	JASSO	26年9月22日～26年12月12日
	パリ第10大学	フランス	JASSO	26年9月4日～27年7月10日
	ワシントン大学	アメリカ合衆国	JASSO	26年9月24日～27年6月12日
	ロンドン大学 SOAS	連合王国	JASSO	26年7月28日～27年6月12日
	西オーストラリア大学	オーストラリア	JASSO	26年2月23日～27年11月21日
平成 27年度	ハンブルク大学	ドイツ	JASSO	27年10月1日～28年9月30日
	バーミンガム大学	連合王国	JASSO	27年9月21日～28年6月17日
	ヴェネツィア大学	イタリア	JASSO	27年9月7日～28年6月18日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	27年9月1日～28年6月30日
	グラーツ大学	オーストリア	JASSO	27年10月1日～28年7月1日
	ピッツバーグ大学	アメリカ	JASSO	27年8月31日～28年12月19日
	ロンドン大学 SOAS	イギリス	JASSO	27年7月27日～28年6月10日
	復旦大学	中国	JASSO	28年2月26日～29年1月13日
平成 28年度	トリーア大学	ドイツ	JASSO	29年3月7日～30年2月10日
	ピッツバーグ大学	アメリカ	JASSO	29年1月4日～29年4月29日
	ボローニャ大学	イタリア	JASSO	28年11月16日～29年3月25日
	ハンブルク大学	ドイツ	JASSO	28年10月1日～29年7月15日
平成 29年度	上海交通大学	中国	JASSO	29年2月26日～30年1月14日
	上海交通大学	中国	JASSO	29年2月26日～30年1月14日
	国立台湾大学	台湾	JASSO	29年9月5日～30年6月29日
	国立台湾大学	台湾	JASSO	29年9月5日～30年6月29日
	オタワ大学	カナダ	JASSO	29年9月3日～29年12月31日
	ライデン大学	オランダ	JASSO	29年8月22日～30年7月20日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	29年9月1日～30年6月30日
	ロンドン大学 SOAS	イギリス	JASSO	30年1月8日～30年7月6日
	クイーンズランド大学	オーストラリア	JASSO	30年2月19日～30年11月18日

### 3. グローバル教育への取組み

平成20年度からは、語学科目以外に全てを英語で行なう授業科目を開講し、アカデミックかつ実践的な英語能力の涵養を目指している。具体的には、英米文学及び言語学関係の外国人教員による授業（「比較現代日本文化論特殊研究」「アカデミック・ライティング」等）を平成23年度から継続的に行なっている。また、社会学分野では平成24年度から、英語による専門授業を開講している。語学学習への多様な支援として、平成24年度から本学部の全学年に TOEFL itp の無料受験を実現し、海外留学や国際交流への意識向上を図っている。また、英語のスキル向上のために、希望者には「英語アフタースクール」を実施し、能力や志向に応じた細やかな語学学習が可能となっている。

文学部では、神戸オックスフォード日本学プログラムなどによって、国際的な場で活躍できる学

生を育成してきたが、平成24年度文部科学省「グローバル人材育成推進事業（タイプ B 特色型）」に採択された「問題発見型リーダーシップを発揮できるグローバル人材の育成」プログラム（平成26年度より「スーパーグローバル大学等事業 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」に名称変更）に基づき、「グローバル人文学プログラム」を実施してグローバル教育を積極的に推進している。人文学をグローバルな視点で学ぶことにより、高度な国際感覚を育成するための外国語授業科目群（グローバル人文学科目群）、そしてオックスフォード大学ハートフォード・カレッジにおける3週間の短期留学プログラムである「オックスフォード夏季プログラム」など、グローバル社会で活躍できる優れた外国語能力とコミュニケーション能力を育成するための授業科目群（グローバル対話力育成科目群）からなる「グローバル人文学プログラム」を実施している。このプログラムは、すべて外国語で授業が行われており、所定の単位を取得し、「外国語力スタンダード」（TOEFL 等の外国語試験における所定のスコア）を達成した者には、修了時に「グローバル人文学プログラム修了証」を授与している。その結果、本プログラムが目的として掲げる「人文学的課題をグローバルな視点から考察し、日本文化の深い理解を基に異文化との対話を重ねながら、現代社会における諸問題を解決に導いていくリーダーシップとコミュニケーション能力を持った人材」が育ちつつある。（「グローバル人材育成推進事業」については、「第2部 I-1. グローバル人材育成推進事業」73-75頁を参照。）

#### 4. 地域との連携による新たな教育研究の開発

地域歴史遺産の活用を図る地域リーダーの養成を目的とした「地域歴史遺産保全活用基礎論 A・B」「地域歴史遺産保全活用演習 A・B」を文学部専門科目として開講し、史料の保全と活用を通じて、地域との有機的な交流がなされている。

### I-4. 教育方法

#### I-4-1. 授業形態の組合せと学習指導法上の工夫

授業形態は、主として講義・演習からなり、平成28年度の開講科目数は講義科目が208（約46%）、演習・実習科目等が232（約53%）となっており、おおむね例年並みである《資料18》。

演習科目が多いのは、人文学の学問の根幹をなす文献読解能力、資料調査分析能力、表現力の鍛錬に重点を置き、研究の集大成として卒業論文を重視する、文学部の教育目的に沿う措置による。演習の質は学生の研究報告によって担保される。そのため、文学部では1年次生を対象とする各講座の入門講義によって人文学の全体像を俯瞰させるとともに、各専修が人文学導入演習や人文学基礎の少人数教育を開講することによって、人文学の研究手法や調査技法について丁寧に訓練を行い、専門教育への円滑な導入を図っている。演習の授業は同時に研究倫理教育の実践的な場でもあり、盗用などの研究不正について各専修で適切な指導が行われている。

平成29年度は、34の講義、55の演習、11の実習科目に対してティーチング・アシスタント（TA）を配置し、授業運営の補助や受講者のための事前学習・事後学習のフォローを適宜行わせ、少人数教育の一助としている《資料19》。TA に対しては各学期始めにガイダンスを行い、TA ハンドブック等による指導をしている。また業務終了後には実施報告書を提出してもらい、その分析・検討及びTA に対するフィードバックを行っている。

なお平成28年度より、神戸大学では一部の学部・研究科を除いて新たに「2学期クォーター制」を導入し、従来、前期・後期にそれぞれ2単位を付与してきた課程を改変し、1クォーターごとに1単位を付与することになり、文学部にもこれが導入された。従来のセメスター制に基づく学生の在学中は二つの制度が併走することになるが、それにとまらぬ大きな混乱は今のところ生じていない。

《資料18：平成29年度の授業形態》

授業形態	講義	演習	実習	実技	研究指導
授業数	208	226	6	2	2

《資料19：平成25～29年度のTAの文学部への配置実績》

授業形態	TA 配置人数				
	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
講義	32	34	25	37	34
演習	59	53	78	50	55
実習	9	13	10	10	11
実技	0	0	0	0	0

教育を展開する上での指導法の工夫として、本学部ではフィールド型授業も重視している。「地域歴史遺産保全活用演習 B」では、事前指導で古文書・絵図等の取扱いを学んだ後、実際の地域歴史遺産資料を用いた実習を行うことで、地域遺産の保全と活用に関する実践的な知識・技能を得ることを目指している《資料20》。

また、「グローバル・アクティブ・ラーニング」として、他大学の学生らと共に学外のワークショップに参加し、より開かれた場での討論に参加し、公開成果発表会でプレゼンテーションを行うことで、受講生にさらに積極的な学びの場を提供している《資料21》。

《資料20: 「地域歴史遺産保全活用演習 B (a)」 シラバス》

開講科目名	地域歴史遺産保全活用演習 B (a)				
担当教員	奥村 弘、河島 真		開講区分	単位数	
			後期	1.0単位	
ナンバリングコード		曜日・時限	他	時間割コード	2L562
<b>授業のテーマ</b> 地域歴史遺産のうち、とくに古文書・絵図等の地域史料に直接触れ、その解読と整理、さらにその指導方法について学ぶ。これを通じて受講生が、今後、それぞれの職場や居住地などにおいて、地域遺産の保全と 活用に関する実践的・応用的な知識・技能を得られるよう努力する。					
<b>授業の到達目標</b> _____ _____					
<b>授業の概要と計画</b> 2月中下旬に、まず学内で事前指導をおこない、その後に入宿形式で集中的に古文書の取り扱い方について実習する(学外。1泊2日予定)。 事前指導と入宿の日取り等の詳細については、後日掲示板にて発表するので注意しておくこと。なお、入宿経費・交通費等はすべて受講生負担となるので、受講を希望する学生はその旨を了解しておくこと。					
<b>成績評価方法</b> 出席点と入宿後のレポートによる。事前指導と入宿日程すべてに参加しなければ、単位取得は認めないので注意すること。					
<b>成績評価基準</b> _____ _____					
<b>履修上の注意 (関連科目情報)</b> 受講生は、古文書の読解と整理についての基礎的な技能を身に付けていることが望ましく、その上に立ってそれらの指導方法を学ぶように努めてほしい。					
<b>事前・事後学修</b> _____ _____					
<b>オフィスアワー・連絡先</b> 人文学研究科A棟315研究室 月曜12:30-13:20					
<b>学生へのメッセージ</b> 地域歴史遺産の専門的素養を身につけるべく努力して下さい。					
<b>今年度の工夫</b> _____ _____					
<b>教科書</b> 指定しません。					
<b>参考書・参考資料等</b> 授業中に適宜紹介します。					
<b>授業における使用言語</b> 日本語					
<b>キーワード</b> 日本史 古文書 古地図 地域歴史遺産					

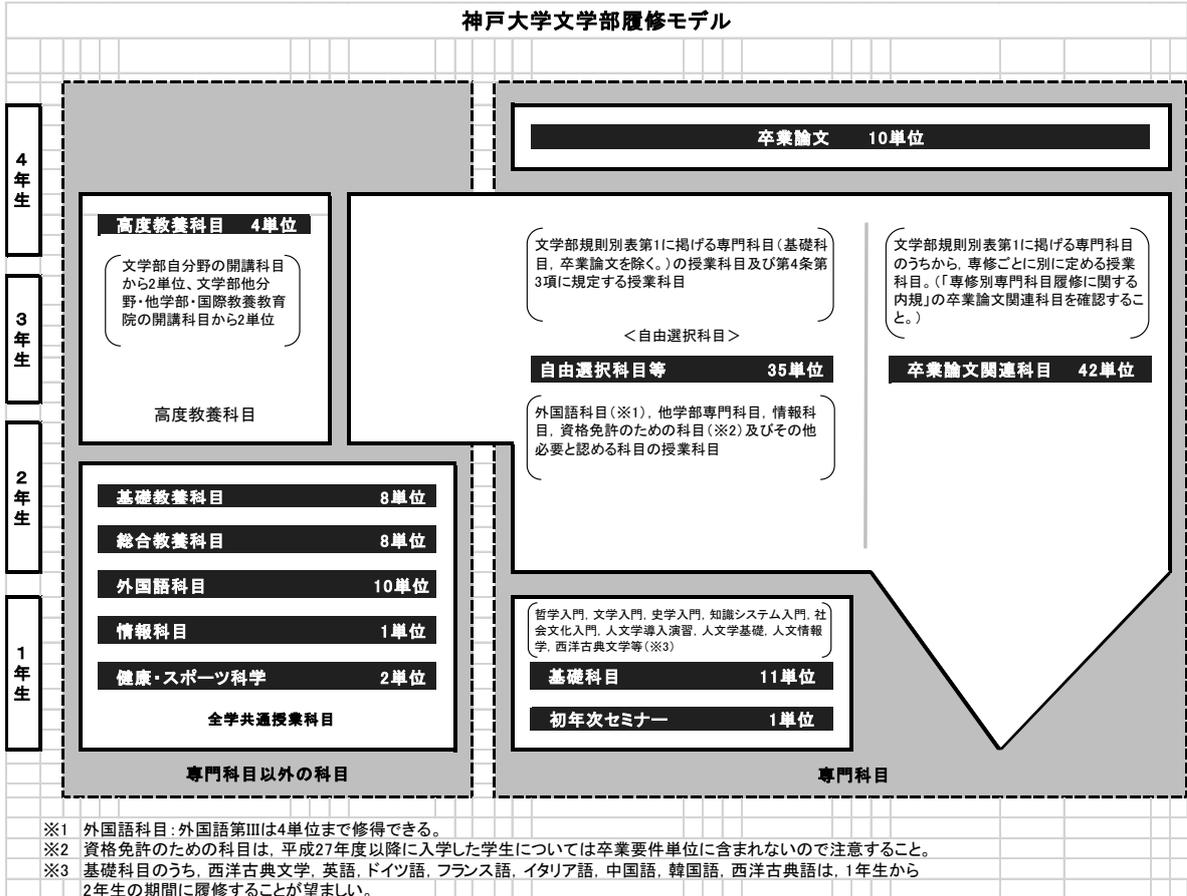
《資料21：「グローバル・アクティブ・ラーニング」シラバス》

開講科目名	グローバル・アクティブ・ラーニング【GH】				
担当教員	嘉指 信雄、シギナシ ミハエラ			開講区分	単位数
				後期	1.0単位
ナンバリングコード		曜日・時限	他	時間割コード	2L219
授業のテーマ					
<div style="border: 1px solid black; height: 20px;"></div>					
授業の到達目標					
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">                 広島で開かれるワークショップに、留学生や現地大学生とともに参加し、核問題を中心とした「戦争と平和」をめぐる諸問題に関する理解を深めるとともに、自らの考えを日本語と英語で表現し、議論する力を伸ばす。             </div>					
授業の概要と計画					
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">                 ・10月中旬：2コマ程度の事前学習を行い、「戦争と平和」、とりわけ核問題に関する基礎的な事項及び英語表現を学習する。開催日時は、10月19日（水）5限及び10月26日（水）5限、場所は、文学部A棟一階学生ホールを予定しているが、掲示情報などに注意すること。                  ・広島での集中セッションは、10月28日（金）29（土）30日（日）に開催する。（高速バスで金曜日の午後出発し、日曜日の夜、神戸に戻る予定。）                  21日は、広島でのワークショップに参加し、現地の大学生などと交流・意見交換する。                  ・11月、事後学習を行う。             </div>					
成績評価方法					
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">                 出席点の他、ワークショップや事前・事後学習などにおける参加を総合的に判断する。             </div>					
成績評価基準					
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">                 出席および議論への貢献：10割             </div>					
履修上の注意（関連科目情報）					
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">                 ・人社系6学部および人文学研究科・経済学研究科博士前期課程の学生を対象とする。                  交換留学生の場合は単位取得はできないが、広島ワークショップへの参加は歓迎。                  交換留学生以外の外国人学生の場合は、単位取得可。                  ・広島でのワークショップ参加に必要な費用（往復の高速バス8,000円、宿泊費用一泊約3,000円、食費など）は自己負担。             </div>					
事前・事後学修					
<div style="border: 1px solid black; height: 20px;"></div>					
オフィスアワー・連絡先					
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">                 By appointment.                  連絡先／嘉指：nkazashi(at)gmail.com             </div>					
学生へのメッセージ					
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">                 具体的な問題場面へのエクスポージャーを通じた「アクティブ・ラーニング」の貴重な機会を積極的に活かしてほしい。             </div>					
今年度の工夫					
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">                 平和問題関連の英語表現を学ぶとともに、広島での自主的学習を目指す。             </div>					
教科書					
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">                 特になし。参考テキストなど、適時指示する。             </div>					
参考書・参考資料等					
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">                 『新・平和学の現在』（2009）／岡本三夫・横山正樹編：，ISBN：                  『ヒロシマ』（増補新版、2014）／ジョン・ハーシー：，ISBN：                  『ヒロシマ・モナムール』（新訳、2014）／マルグリット・デュラス：，ISBN：             </div>					
授業における使用言語					
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">                 日本語及び英語             </div>					
キーワード					
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">                 戦争、平和、核問題、ヒロシマ、ナガサキ             </div>					

シラバスは、すべてウェブサイト上に公開しており、学習の便宜を図っている《資料20、資料21》。

「履修要項」には履修モデルを提示しているが、平成29年度版の履修要項から、最新のモデルを提示している《資料22》。加えて、入学時、1年次の後期開始時、専修配属決定後の12月に合計3回のガイダンスを行うことによって、学生が適切な履修計画を立てられるように配慮している。単位が不足する学生等に対してはこれまでも各教員・各専修で適切に対応してきたが、教務学生係及び教務委員と連携してより手厚い就学指導を行うことのできる体制を平成27年度に整えている。

《資料22：文学部履修モデル》



ハラスメント対策として、専修配属が決定した1年生に対して毎年、「初年次セミナー」の一環としてセミナーを開催している。

**I-4-2. 主体的な学習を促す取組**

自主学習を促すために、《資料23》のように制度面・環境面の整備を行ってきた。例えば、学生が授業時間以外にも教員から勉学上の指導を受けることができるように、オフィスアワーが各教員のシラバスに明記され、周知が図られている《18頁の資料20、19頁の資料21》。また、本学部同窓会がレポートコンテストにより「文窓賞」を授与し、勉学や課外活動に対する意欲の向上を図っている。平成25年には、人文科学図書館に神戸大学では初のラーニングコモンズが設置され、グループ学習、外国人教員との自由な英語会話、協働作業を中心とした新しいタイプの授業などで活用されている。

《資料23：制度面および環境面での整備項目》

項目	内容	
制度面	オフィスアワー	学生は授業時間以外にも教員から勉学上の指導を受けることが容易である。オフィスアワーは平成20年度からはシラバスに記入され、周知されている。また、外国人教員による英語を主としたオフィスアワーを週4日（月、火、水、金）ラーニングcommonsにおいて開催し、留学等について相談したり、外国語能力向上のためのアドバイスを気軽に受けることができるようにしている。
	キャップ制の免除	単位の実質化を図るためにキャップ制（1年間に履修できる単位数の上限：文学部は54単位）を設けるとともに、さらに学生の学習意欲を高めるために、成績優秀な学生に対しては、キャップ制の適応を免除する優遇措置を与えている。
	表彰制度	平成19年度から本学部同窓会がレポートコンテストにより「文窓賞」を授与している。
環境面	図書館 （日本文化資料コーナー）	文学部の人文科学図書館は書籍約30万冊を有し、毎年確実に蔵書数を増やしている。授業期間中は、平日（8時45分～20時）および土曜日（10～18時）、試験期間中は、平日の夜間（21時まで）および日祝日も開館している（10～18時）。 「日本文化資料コーナー」を設けて資史料、貴重図書、レファランス類を集中的に配架し、複数の辞書類・資料を同時に縦覧する必要がある歴史・文学系等の学生の利便を図っている。可能な限り具体的な活用状況を入れる。
	学生用共同研究室	学生が個人あるいはグループで調査・研究するために使用できる「共同研究室」を教育研究分野ごとに設置し、学生の自主学習へ配慮している。共同研究室には辞書や専門書等も整備されており、学生はここで授業の予習や復習、研究発表のための資料作成などを行うことができる。
	コモンルーム	学生がグループ学習や研究会などのために自由に使用することのできる「コモンルーム」を3カ所設置し、学生の自主学習へ配慮している。ホワイトボードを使っての議論の場として活用したり、研究発表や面接の練習などさまざまな形で使われている。
	共同談話室	教員と学生が共同研究、読書会など行うために使用することができる「共同談話室」を5カ所設置し、自由な共同学習や演習等の授業に活用している。各種の読書会、研究会の会合などが活発に行われている。
	情報機器	学生が利用できるパーソナル・コンピューターを「情報処理室」（平成22年度 B 棟に移転・拡充）に48台、人文科学図書館に18台を設置するとともに、各専修の共同研究室や実験室などにも適宜配置している。可能な限り具体的な活用状況を入れる。
	教育機器	視聴覚機材を平成21～23年度 B 棟に、平成24年度 C 棟に設置し、ほぼ全ての教室で視聴覚機材（プロジェクター、スクリーン、DVD など）を使った授業ができるようになった。パワーポイントを用いた授業も多くなされている他、パソコン（インターネット）による具体的な資料検索・資料収集の方法を実践することも可能である。
	ラーニングcommons	自由に机と椅子を組み合わせ、図書館資料を自由に使用し、グループで話し合いながら学習を進めることができるスペースとして、「ラーニングcommons」が人文科学図書館に設置された。他学部にも広く開かれた文学部のラーニングcommonsは、平成25年度の運用開始以来、アクティブラーニングや演習、自主学習、グループ学習、留学報告会等、さまざまな形で活用され、大きな学習成果を挙げている《資料22》

## I-5. 学業の成果

### I-5-1. 学生が身に付けた学力や資質・能力

最近5年間の本学部学生の卒業状況は、《資料24》のとおりである。本学部学生の卒業率（入学者総数に対する既卒業者の比率）は平成22年度入学者以降、平均93.8%という良好な数字を保っている。また、標準修業年限で卒業した学生（4年間で卒業した学生）の比率も平成22年度入学者以降、平均83%以上の数字を維持し、大半の学部生が4年間で卒業している。なお、学部生の場合、

卒業以前に留年・休学して海外留学を経験する者も多い。

また、文学部における学びの集大成となる卒業論文について、平成29年度卒業生が提出した論文題目一覧は《資料25》に掲げる通りである。

《資料24：修業年限内の卒業率 平成29年3月現在》

入学年度 (標準修業年度)	入学者総数 (a)	既卒業者数 (b)	既卒業率 (b/a)	標準年限内 卒業者数 (c)	標準年限内 卒業率 (c/a)
平成22年(平成25年)	121	99	81.8%	99	81.8%
平成23年(平成26年)	117	113	96.6%	99	84.6%
平成24年(平成27年)	119	107	89.9%	103	86.6%
平成25年(平成28年)	121	118	97.5%	100	82.6%
平成26年(平成29年)	118	116	98.3%	101	85.6%

《資料25：平成30年3月卒業者の卒業論文題目一覧表》

専修	論文題目
哲学	人間による動物の利用の是非
哲学	井筒俊彦『意識と本質』に見る、深層意識下における言語の変質について
哲学	バタイユの思想におけるノスタルジー
哲学	パスカルの『パンセ』
哲学	プラトンの芸術批判
哲学	言語哲学的問題に対する状況意味論の応用の検討
国文学	村上春樹『風の歌を聴け』論
国文学	宣長神道における「現身」の神と「御霊」の神について
国文学	『源氏物語』論
国文学	鶴屋南北論
国文学	少年の処刑とそれに殉じる女たち
国文学	大庭みな子「三匹の蟹」論
国文学	『源氏物語』紫の上について
国文学	松本清張『点と線』論
国文学	松尾芭蕉の世界
国文学	西脇順三郎『壤歌』論
国文学	坂口安吾「不連続殺人事件」と「復員殺人事件」
国文学	夢野久作『ドグラ・マグラ』論
国文学	女性ファッション誌における短縮語とその特徴について
国文学	『平治物語』論
英米文学	‘Lapis Lazuli’の‘gay’を読み解く
英米文学	L・M・モンゴメリ研究
英米文学	カズオ・イシグロの『わたしを離さないで』におけるノーフォークの意味について
英米文学	「書く」ことを読む
英米文学	宝塚歌劇団における『ロミオとジュリエット』

英米文学	『ヴェニス商人』における女性キャラクターの考察
英米文学	ヴァージニア・ウルフ『灯台へ』研究
英米文学	トルーマン・カポーティ研究
英米文学	J.D. Salinger の「The Catcher in the Rye」研究
英米文学	Mark Twain ` Adventures of Huckleberry Finn` 研究
ドイツ文学	ルート・クリューガー『生きつづける』
ドイツ文学	ハインリヒ・ベル『道化師の告白』における廃墟文学的要素
ドイツ文学	クライスト『こわれがめ』における認識
ドイツ文学	フリッシュ『シュティラー』についての研究
ドイツ文学	シュティフター『森の小道』における観察と距離
フランス文学	サルトル研究
フランス文学	マルグリット・デュラス研究
フランス文学	ジャン・ジュネ研究
フランス文学	ミラン・クンデラ研究
フランス文学	セリーヌ研究
日本史学	古代の大宰府における軍事編制の研究
日本史学	上杉謙信と上田長尾氏
日本史学	天保期尼崎藩における幕府巡見使迎接の研究
日本史学	諸司時服に関する基礎的考察
日本史学	奈良時代衛府制度の基礎的考察
日本史学	日本古代の地方行政機構に関する一考察
日本史学	中世の東寺の門指の活動について
日本史学	南北朝期の伊予国弓削島荘の荘園経営
東洋史学	唐代前半期西州における馬匹管理
東洋史学	宗教と科学のあいだ
西洋史学	中世ヨーロッパにおける道路と橋の建設・管理とその権力主体
西洋史学	19 世紀イギリスにおける自転車と女性
西洋史学	徳島俘虜収容所における演劇活動
西洋史学	19 世紀におけるイギリスのインド統治
西洋史学	第一次世界大戦期デンマークの中立概念研究
西洋史学	同時代人によるテンプル騎士団の評価とその変遷
西洋史学	スパルタの外交政策と神話の関係性
西洋史学	中近世アルプス地域における商業・交通
西洋史学	中世中期フランスにおけるワイン生産とワイン商業
西洋史学	18 世紀末から 19 世紀初頭のパリにおける服飾品小売
心理学	友人からの注意が孤独感、幸福感に及ぼす影響
心理学	視覚的グルーピングが脳律動信号に与える影響
心理学	視覚障害者移動支援システムの実証実験

心理学	Vicarious Embarrassment についての心理学的研究
心理学	歩きスマホ時の ‘‘間隙通過 ‘‘について
心理学	運動学習における overlearning 効果の検証
心理学	繰り返し囚人のジレンマにおける Extortion 戦略の有効性
心理学	容積脈波と感情の研究
心理学	報酬が Overlearning に与える影響
心理学	自由に関する日本人への影響について
心理学	ノスタルジアが痛みの閾値に与える影響
言語学	日本語の補助動詞構文
言語学	日本語身体部位詞「目」、「口」及びそれを含む慣用表現の意味拡張の研究
言語学	童謡における歌詞への音符付与
言語学	ロシア語から日本語への借用語における音韻変換について
言語学	日本語複合動詞の類義表現の意味分析
言語学	日本語における動詞の類義表現について
芸術学	映画『シックス・センス』における叙述トリック的構造
芸術学	祖父江慎のブックデザイン
芸術学	上演をめぐるノイズ
芸術学	2.5次元ミュージカルにおけるキャラクター表象
芸術学	web マンガにおけるコマとページの構造
社会学	現代日本における「場」の考察
社会学	現代のネット社会における YouTube のメディア史
社会学	関西在住カンボジア人技能実習生の生活世界
社会学	若者のファッションに対する消費観の変化
社会学	現代社会における映像メディア視聴の変容
社会学	若者の洋楽聴取態度の変化
社会学	境界に生成する自治空間とその変容
社会学	現代社会における「国語科」の機能
社会学	現代日本における大学生の友人関係
社会学	神戸市の識字教育の現状と課題
社会学	台湾における「日本式ファッション」の受容と再構築
社会学	オタクの変遷とその現在
社会学	フランスとの比較を通して見る現代日本の親密関係
社会学	紙の本
社会学	「腐女子」像への新たなアプローチ
社会学	儀礼的相互行為の場としてのライブ空間
社会学	オタクの消費理論
社会学	顕示的消費は終焉したのか
社会学	テレビ番組における笑い

社会学	インターネット社会におけるロコミの影響と変容についての社会学的考察
美術史学	アンディ・ウォーホルについて
美術史学	東寺講堂の諸像について
美術史学	エル・グレコにおけるビザンツ様式について
美術史学	室生寺金堂伝釈迦如来像について
美術史学	弥勒信仰をめぐる絵画について
美術史学	《ティンパニ奏者》に投影されたパウル・クレーの晩年
美術史学	誰ヶ袖図屏風について
美術史学	ルーベンス《十字架降下》における聖クリストフォロスについて
地理学	空港の旅客ターミナルにおける旅行者の身体的経験
地理学	姫路モノレールに対する場所イメージの変遷
地理学	元町高架下通商店街におけるグラフィティ
地理学	尼崎における阪神間モダニズム
地理学	地名復活の過程と要因
地理学	地方都市における路面電車の役割と実態

在学中に教育職員免許（中学校教員一種・高等学校教員一種）、学芸員資格、社会調査士資格等を取得する者が多く、その内訳は《資料26》の通りである。これらのうち、高等学校教員一種の資格取得者が多いのは例年の傾向である。平成29年度は例年に比べて、中学校、高等学校ともに、資格取得者が少なくなっている。民間企業等への就職率の高さを反映した結果といえる。就職に向けた解禁日も流動化する傾向にあり、教育実習期間に中小企業の面接が入るなどで実習辞退者が出るといった影響も見られ、今後の問題を残している。

#### 《資料26：平成25～29年度資格取得者一覧》

年 度	資格取得者数			
	教育職員免許		学芸員資格	社会調査士 資格
	中学校一種	高等学校一種		
平成25年度	22	30	6	1
平成26年度	26	40	16	5
平成27年度	15	28	14	0
平成28年度	16	28	15	2
平成29年度	7	20	13	1

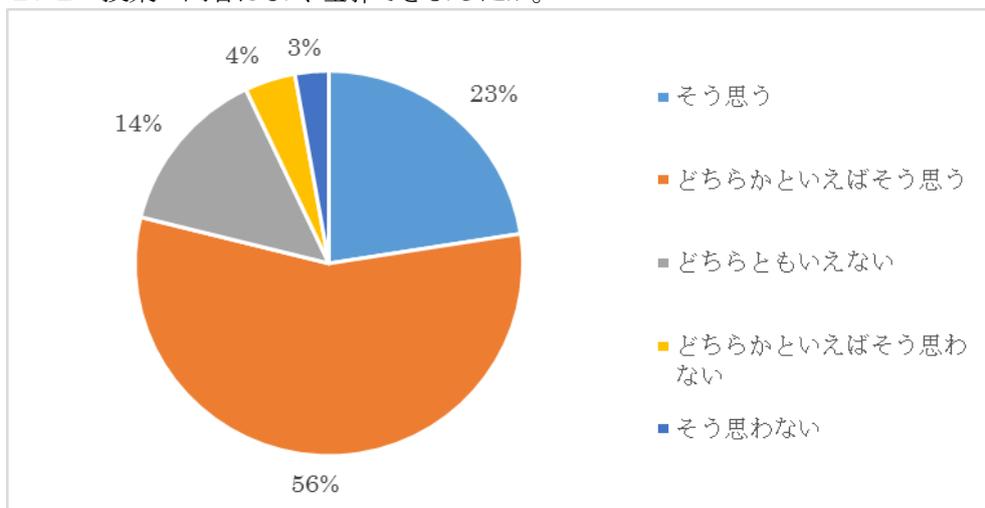
#### I-5-2. 学業の成果に関する学生の評価

在学生を対象とした「授業振り返りアンケート」平成29年度後期の結果では、教育の成果や効果に関する質問項目の「2. この授業の内容はよく理解できましたか。」「3. シラバスに書かれている到達目標をあなたはどの程度達成できたと思いますか。」のうち、2については最上点及び次点の回答者が79.7%、3については最上点及び次点の回答者が77.9%といずれも良好な結果が得られており《資料27》、例年、同様の傾向となっている。

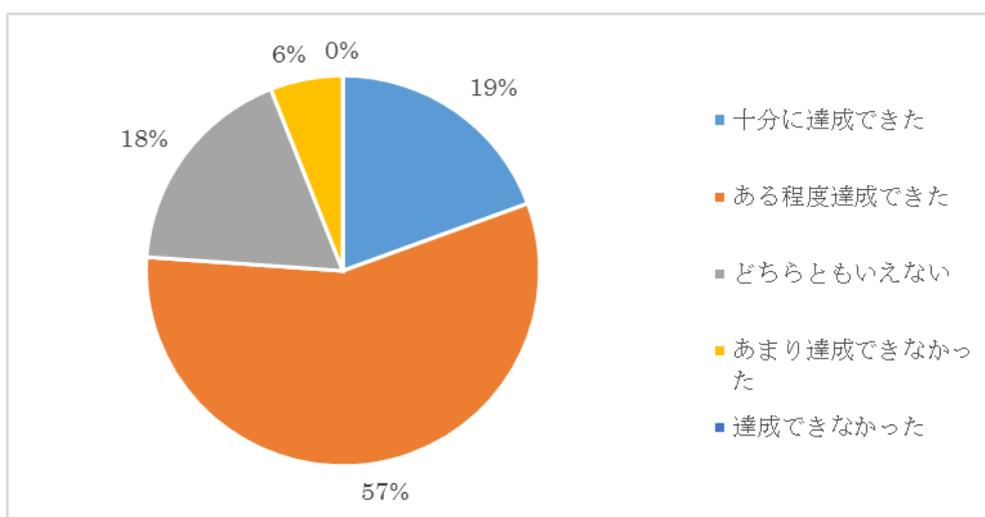
また、平成28年度の卒業時アンケートでは、幅広い教養と深い専門知識の双方で、概ね身についたという回答が得られた。また、課題を設定して解決する能力も身につけていることがわかった。その理由として、各専修における少人数教育や様々な分野の専修における専門知識に触れる機会が与えられていることなどが挙げられた《資料28》。

《資料27：「平成29年度後期授業振り返りアンケート」結果（抜粋）》

2. この授業の内容はよく理解できましたか。

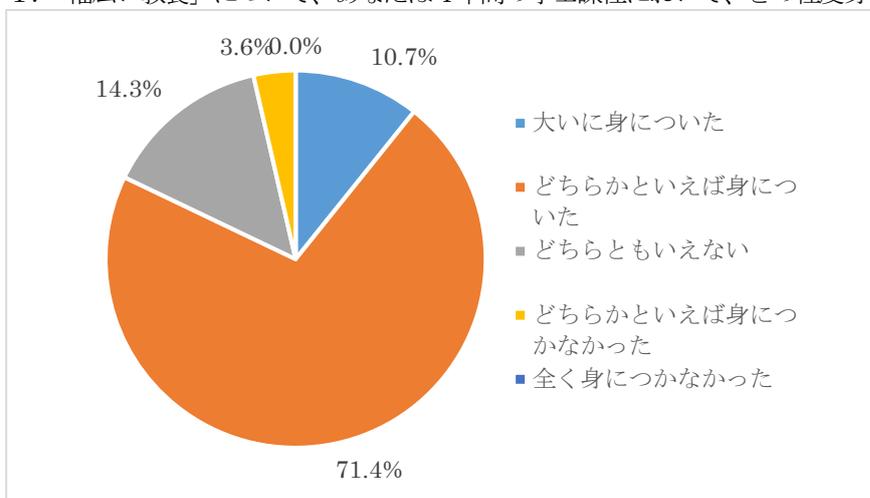


3. シラバスに書かれている到達目標をあなたはどの程度達成できたと思いますか

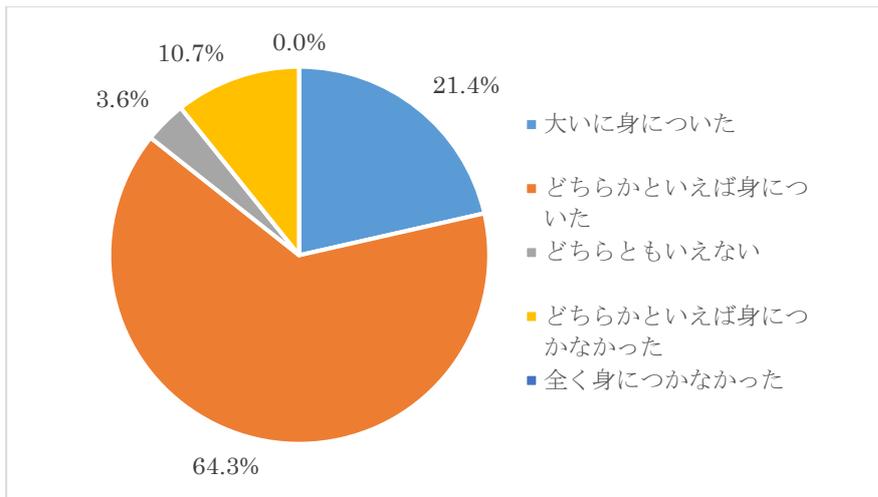


《資料28：「平成28年度文学部卒業時アンケート」結果（抜粋）》

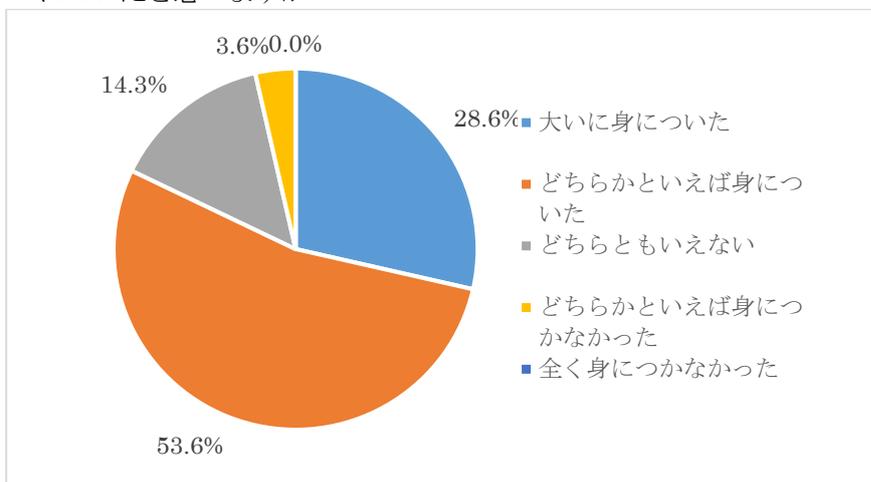
1. 「幅広い教養」について、あなたは4年間の学士課程において、どの程度身についたと思いますか



2. 「深い専門知識・技能」について、あなたは4年間の学士課程において、どの程度身についたと思いますか



7. 「課題を設定し解決していく能力」について、あなたは4年間の学士課程において、どの程度身についたと思いますか



## I-6. 進路・就職の状況

### I-6-1. 卒業後の進路の状況

本学部卒業生の就職率及び進学率については《資料29》の通りであり、この状況はここ数年安定している。平成24～29年度の本学部における卒業生の進路は《資料30》の通りである。公務員・中・高教員その他教育関係・メディア関係など、本学部での教育成果を直接活用できる職種のみならず、金融・保険業、製造業、情報・通信業など、幅広い業種にわたっていることが分かる。

大学院進学者が10%台という状況は、「専門的知識」を有する人材の育成を目的の一つに掲げている本学部の教育方針に合致しており、同時に社会からの期待にも適ったものと判断できる。また、アンケート時期の関係から就職率が平均90パーセントを割っているが、この数値は卒業段階ではさらに上昇する可能瀬があり、就職状況は良好である。

《資料29：本学部卒業生の就職率及び進学率》

卒業年度	卒業者数	進学者	就職者	就職希望者	進学率	就職希望者の就職率
平成24年度	117	11	80	106	9.4%	75.5%
平成25年度	131	12	94	119	9.2%	79.0%
平成26年度	113	19	88	95	16.8%	92.6%
平成27年度	121	16	94	105	13.2%	89.5%
平成28年度	119	23	84	96	19.3%	87.5%
平成29年度	116	10	91	106	8.6%	85.8%

《資料30：本学部卒業生の進路状況》

卒業年度	製造業	情報・通信産業	卸売・小売業	金融・保険業	学校教育・その他教育	国家公務員・地方公務員	その他の業種
平成24年度	9	16	8	12	10	12	13
平成25年度	13	11	12	15	12	11	20
平成26年度	15	10	10	12	18	9	14
平成27年度	11	6	4	21	10	19	23
平成28年度	14	12	5	11	7	20	15
平成29年度	13	14	6	10	5	16	27

## II. 教育（人文学研究科）

### II-1. 人文学研究科の教育目的と特徴

人文学研究科は、大学院文学研究科（修士課程）及び文化学研究科（独立研究科：後期3年博士課程）の改組・統合により平成19年4月に新たに設置された研究科である。

本研究科は、人文学すなわち人間と文化に関わる学問を扱い、哲学・文学・史学・行動科学などの人文系諸科学の教育を包括している。以下に本研究科の教育目的、組織構成、教育上の特徴及び想定する関係者とその期待について述べる。

#### II-1-1. 教育目的

- 1 人文学研究科は、人類がこれまで蓄積してきた人間及び社会に関する古典的な文献の原理論的研究に関する教育並びにフィールドワークを重視した社会文化の動的的分析に関する教育を行い、新たな社会的規範及び文化の形成に寄与する教育研究を行うことを目的としている。
- 2 このような教育目的を達成するため、現行の中期目標では「教育憲章」に掲げた、「人間性」、「創造性」、「国際性」及び「専門性」を身に付けた個性輝く人材を養成するため、国際的に魅力ある教育を学部・大学院において展開する。また、豊富な研究成果を活かして、社会の変化を先導し、個人と国際社会が進むべき道を切り拓く高度な知識・能力を有する、次世代の研究者をはじめとした多様な人材の養成に努め、教育の更なる高みを目指す」ことを定めている。
- 3 本研究科のディプロマ・ポリシー（DP）およびカリキュラム・ポリシー（CP）はそれぞれ《資料1》、《資料2》のとおりである。これら DP、CP に基づき、本研究科は専攻ごとに、以下のような人材の養成を目指している。文化構造専攻の前期課程では、人文学の基礎的な方法を継承しつつ、個々の文化現象の現代的意味を問うことのできる基礎的能力を備え、人文学を知識基盤社会に生かすことのできる人材を養成し、後期課程では、人文学の高度な研究方法を継承しつつ、個々の文化現象の現代的意味を問うことができる能力並びに共同研究を企画し、組織する能力を持つ人材を養成する。社会動態専攻の前期課程では、社会文化の動的的分析の基礎的な能力を備え、人文学を知識基盤社会に活かすことのできる人材を養成し、後期課程では、社会文化の高度な動的的分析能力を備え、新たな社会規範及び文化の形成に寄与できる能力並びに共同研究を企画し、組織する能力を持つ人材を養成する。この目的や人材養成は、現行の中期目標において、「高度な専門的知識を習得させ、個人と社会が進むべき道を切り拓く能力を涵養すること」とされている点を達成することと大いに対応している。

#### 《資料1：人文学研究科ディプロマ・ポリシー（DP）》

##### 博士課程前期課程ディプロマ・ポリシー

神戸大学人文学研究科博士課程前期課程は、人文学の高い専門性を追求すると同時に、総合性を高めることによって、人文学の古典的な役割を継承しながら、現代社会に対応する人材を養成することを目的としている。この目的を達成するため、以下に示した方針に従って修士の学位を授与する。

##### ○ 学位：修士（文学）

- ・ 学位授与に関する方針（ディプロマ・ポリシー）  
神戸大学のディプロマ・ポリシーにもとづき、人文学研究科は以下に示した方針に従って当該学位を授与する。
  - ・ 本研究科博士課程前期課程に2年以上在学し、研究科共通科目、選択科目、修士論文指導演習に関してそれぞれ所定の単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、修士論文または特定の課題についての研究の成果の審査及び最終試験に合格すること。
  - ・ 神戸大学のディプロマ・ポリシーに定める能力に加え、修了までに、本研究科学生が、身につけるべき能力を次のとおりとする。

##### （文化構造専攻）

- ・ 人類がこれまで蓄積してきた人間と社会に関する古典的な文献の原理論的研究という人文学

の基礎的な方法を継承しつつ、個々の文化現象の現代的意味を問うことができる能力。

- ・ 研究者としての基礎能力を具えるとともに、人文学を知識基盤社会に生かすことができる能力。

(社会動態専攻)

- ・ 古典研究を踏まえて、フィールドワークを重視した社会文化の動的的分析を行い、なおかつ新たな社会的規範や文化の形成に寄与できる能力。
- ・ 研究者としての基礎能力を具えるとともに、人文学を知識基盤社会に生かすことができる能力。

#### ○ 博士課程後期課程ディプロマ・ポリシー

神戸大学人文学研究科博士課程後期課程は、人文学の高い専門性を追求すると同時に、総合性を高めることによって、人文学の古典的な役割を継承しながら、現代社会に対応する人材を養成することを目的としている。この目的を達成するため、以下に示した方針に従って博士の学位を授与する。

学位：博士（文学・学術）

- ・ 学位授与に関する方針（ディプロマ・ポリシー）

神戸大学のディプロマ・ポリシーにもとづき、人文学研究科は以下に示した方針に従って当該学位を授与する。

- ・ 本研究科博士課程後期課程に3年以上在学し、研究科共通科目、博士論文指導演習に関してそれぞれ所定の単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び最終試験に合格すること。
- ・ 神戸大学のディプロマ・ポリシーに定める能力に加え、修了までに、本研究科学生が、身につけるべき能力を次のとおりとする。

(文化構造専攻)

- ・ 人文学の高い専門性を追求すると同時に、総合性を高めることによって、人文学の古典的な役割を継承しながら、現代社会に対応する能力。
- ・ 人類がこれまで蓄積してきた人間と社会に関する古典的な文献の原理論的研究という人文学の基礎的な方法を継承しつつ、個々の文化現象の現代的意味を問うことができる能力。
- ・ 自立した研究者として、研究を企画し、組織できる能力。

(社会動態専攻)

- ・ 人文学の高い専門性を追求すると同時に、総合性を高めることによって、人文学の古典的な役割を継承しながら、現代社会に対応する能力。
- ・ 古典研究を踏まえて、フィールドワークを重視した社会文化の動的的分析を行い、なおかつ新たな社会的規範や文化の形成に寄与できる能力。
- ・ 自立した研究者として、研究を企画し、組織できる能力。

#### 《資料2：人文学研究科カリキュラム・ポリシー（CP）》

神戸大学のカリキュラム・ポリシーにもとづき、人文学研究科は以下の方針に則りカリキュラムを編成する。

1. 「人間性」「創造性」「国際性」を学生に身につけさせるため、研究科共通科目を開設する。
2. 人文学の「古典的な役割の継承」「現代社会への対応」を涵養し、「高い専門性」「総合性」を学生に身につけさせるため、以下の専門科目を開設する。
  - ・ 各分野の高度に専門的な知識を身につけることができるよう特殊研究科目を開設する。
  - ・ 各分野の研究に必要なスキルと語学の能力を身につけることができるよう少人数で展開される演習科目を開設する。
  - ・ 学位論文完成のため、指導教員による教育研究指導である論文指導演習科目を開設する。

なお、これらの科目は講義・実技・演習等の授業形態に応じて、アクティブラーニング、体験型学習などを適宜組み合わせで行う。

学修成果の評価は、学修目標に即して多面的、包括的な方法で行う。

## II-1-2. 組織構成

これらの目的を実現するため、本研究科では、《資料3》のような組織構成をとっている。

### 《資料3：組織構成》

専攻	コース	教育研究分野
文化構造	哲学	哲学、倫理学
	文学	国文学（国語学を含む）、中国・韓国文学、英米文学、ヨーロッパ文学
社会動態	史学	日本史学、東洋史学、西洋史学
	知識システム論	心理学、言語学（英語学を含む）、芸術学
	社会文化論	社会学、美術史学、地理学、文化資源論（連携講座：後期課程のみ）

## II-1-3. 教育上の特徴

- 1 人文学研究科は、学生が明確な目的意識をもって専門分野の研究を深めるようにするため、一貫性のある明確なプログラムに従って学修・指導を進めている。また、年次ごとのプログラムを明確に定めることにより、後期課程からの編入生も、他大学院の前期課程（修士課程）で学修した成果を本研究科での学修にスムーズに移行できるようにしている。
- 2 人文学研究科は、次のような指導体制を構築して、学生の研究教育を支援している。①教育研究分野ごとに、各年次で学修する内容を具体的に定め、その修得を学生に徹底している。②学生1名に対して3名からなる指導教員チームを編成している。また、このチームには必ず他専攻の教員が1名参加し、学生が高い専門性ととも幅広い学問的視野を獲得できるように配慮している。③学生ごとに履修カルテを作成し、これによって指導教員チームは学生の学修に関する情報を共有している。この履修カルテは、指導プロセスの透明化にも役立てられている。さらに、学修プロセス委員会を設置し、指導方法を常に検証・改善する仕組みをとっている。
- 3 学域全体における研究の位置付けを見失うことなく、研究の社会的意義に対する省察を行うため、本研究科は、教育プログラムとして研究科共通科目を設定し、これを必修としている。研究科共通科目は本研究科内の共同研究教育組織（海港都市研究センター、地域連携センター、倫理創成プロジェクト、日本文化社会インスティテュート）の支援のもとで実施されている。
- 4 本研究科は、《資料4》のような文部科学省等の推進する各種の教育改革プログラムに採択されており、これらとの連携のもとで教育改革を積極的に推進してきた。

### 《資料4：採択されたプログラム一覧》

プログラム名		採択課題名	期間
日本学術振興会	大学院教育改革プログラム	古典力と対話力を核とする人文学教育—学域横断的教育システムに基づくフュージョンプログラムの開発	平成20～22年度
日本学術振興会	若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム	東アジアの共生社会構築のための多極的教育研究プログラム	平成20～24年度
日本学術振興会	組織的な若手研究者等海外派遣プログラム	国際連携プラットフォームによる東アジアの未来を担う若手人文研究者等の育成	平成21～24年度
文部科学省	国際共同に基づく日本研究推進事業	日本サブカルチャー研究の世界的展開	平成22～24年度
文部科学省	グローバル人材育成推進事業（タイプB特色型）※1	問題発見型リーダーシップを発揮できるグローバル人材の育成 ※2	平成24～28年度
日本学術振興会	頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム※3	国際共同による日本研究の革新—海外の日本研究機関との連携による若手研究者養成	平成25～27年度

文部科学省	運営費交付金機能強化経費「実践型グローバル人材育成事業」※4	日本語教育・日本研究を中心とした実践型グローバル人材育成事業	平成29～33年度
-------	--------------------------------	--------------------------------	-----------

- ※1 平成26年度より、「スーパーグローバル大学等事業 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」に改称。
- ※2 国際文化学部を代表部局とし、文学部・人文学研究科、発達科学部、法学部、経済学部・経済学研究科、経営学部の共同のプログラムを推進してきた。
- ※3 平成26年度より、「頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム」に改称。
- ※4 運営費交付金（機能強化経費）による「日本語教育・日本研究を中心とした実践型グローバル人材育成事業」に特化したプロジェクトである。

## II-2. 教育の実施体制

### II-2-1. 基本的組織の編成

本研究科は、上記（29-30頁）の教育目的を達成するため、前期課程（修士課程）、後期課程（博士課程）ともに一貫性のある明確なプログラムの下に文化構造専攻と社会動態専攻の2つの専攻を設けている。各専攻は哲学、文学（以上、文化構造専攻）、史学、知識システム論、社会文化論（以上、文化動態専攻）のコースに分かれている。後期課程社会動態専攻に奈良国立博物館及び大和文華館との連携講座（文化資源論）を置いている《31頁資料3》。

教員の配置状況は、《資料5》および《資料6》のとおりである。授業の根幹をなす演習と研究指導及び研究科共通科目の授業は、いずれも専任教員が担当している。専任教員の多くは博士号を有している。また、入学定員が前期課程50名（平成27年度より44名）、後期課程20名であるのに対し、専任教員は60名であり、質量ともに必要な教員が確保されている。

#### 《資料5：教員の配置状況 平成29年5月1日現在》

専攻	課程	収容定員	専任教員数（現員）										助手		非常勤教員数		
			教授		准教授		講師		助教		計						
			男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
文化構造	前期	34	14	1	6	4	0	1	0	0	20	6	26	0	0	2	1
	後期	24															
社会動態	前期	54	14	0	13	6	0	1	0	0	27	7	34	0	0	3	0
	後期	36															

#### 《資料6：教育研究分野別教員現員数 平成29年5月1日現在》

教育研究分野	教授	准教授	講師	教育研究分野	教授	准教授	講師	教育研究分野	教授	准教授	講師
哲学	1	2	0	ヨーロッパ文学	3	2	0	言語学	3	1	0
倫理学	1	1	0	日本史学	2	2	0	芸術学	1	1	0
国文学	5	2	0	東洋史学	1	3	0	社会学	3	3	0
中国・韓国文学	3	1	0	西洋史学	0	3	0	美術史学	1	1	0
英米文学	2	2	1	心理学	2	3	0	地理学	1	2	0

※特任教員、兼務教員を含み、文化資源論 教授1名、准教授1名を除く。

入学者の選抜については、全学及び人文学研究科として求める学生像（アドミッション・ポリシー）を定め《資料7》、これに基づき、前期課程における一般学生、外国人特別学生を対象とするI期およびII期、並びに特別入試（平成26年度より導入）、後期課程における一般学生、外国人特別学生を対象とする入試など多様な選抜を実施している。

学生定員と現員の状況については、《資料8》、及び教育研究分野別の学生数（平成27年度）の《資料9》のとおりである。

《資料7：求める学生像（アドミッション・ポリシー）》

<p><b>神戸大学が求める学生像</b></p> <p>神戸大学は、世界に開かれた国際都市神戸に立地する大学として、国際的で先端的な研究・教育の拠点になることを目指しています。</p> <p>これまで人類が築いてきた学問を継承するとともに、不断の努力を傾注して新しい知を創造し、人類社会の発展に貢献しようとする次のような学生を求めています。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 進取の気性に富み、人間と自然を愛する学生</li> <li>2. 旺盛な学習意欲をもち、新しい課題に積極的に取り組もうとする学生</li> <li>3. 常に視野を広め、主体的に考える姿勢をもった学生</li> <li>4. コミュニケーション能力を高め、異なる考え方や文化を尊重する学生</li> </ol>
<p><b>人文学研究科が求める学生像</b></p> <p><b>大学院博士課程前期課程</b></p> <p>人文学研究科は博士課程前期課程に次のような学生を求めています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 人文学諸分野に関心を持ち、既成の価値観にとらわれることなく、自分で問題を発見し、追究していく情熱を持っている人。</li> <li>・ 自ら選んだ専門分野の研究を深め、その学術的展開を志す人。</li> <li>・ 社会の一員としての自覚を持って、自らの学術研究を社会との係わりで展開していく意欲を持っている人。</li> </ul> <p><b>大学院博士課程後期課程</b></p> <p>人文学研究科は博士課程後期課程に次のような学生を求めています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 人文学諸分野に関心を持ち、既成の価値観にとらわれることなく、自分で問題を発見し、追究していく情熱を持っている人。</li> <li>・ 自ら選んだ専門分野の研究を深め、その学術的展開を行って研究者を志す人。</li> <li>・ 研究者としての自覚をそなえ、自らの学術研究を学際的かつ国際的な幅広い視野のなかで展開していく意欲を持っている人。</li> </ul>

《資料8：学生定員（収容定員）と現員の状況 各年5月1日現在》

人文学研究科博士課程前期課程

専攻	年度	収容定員	現員	定員充足率（年）	定員充足率(7年間)
文化構造	平成23年度	40	55	138%	122%
	平成24年度	40	49	123%	
	平成25年度	40	41	103%	
	平成26年度	40	38	95%	
	平成27年度	37	44	119%	
	平成28年度	34	44	129%	
	平成29年度	34	52	152%	
社会動態	平成23年度	60	64	107%	113%
	平成24年度	60	65	108%	
	平成25年度	60	67	112%	
	平成26年度	60	58	97%	
	平成27年度	57	72	126%	
	平成28年度	54	68	126%	
	平成29年度	54	62	115%	

※平成27年度より、入学定員が、文化構造専攻は20名から17名、社会動態専攻は30名から27名に変更となった。

人文学研究科博士後期課程

専攻	年度	収容定員	現員	定員充足率(年)	定員充足率(7年間)
文化構造	平成23年度	24	33	138%	127%
	平成24年度	24	24	100%	
	平成25年度	24	24	100%	
	平成26年度	24	26	108%	
	平成27年度	24	30	125%	
	平成28年度	24	36	150%	
	平成29年度	24	41	171%	
社会動態	平成23年度	36	60	167%	162%
	平成24年度	36	60	167%	
	平成25年度	36	55	153%	
	平成26年度	36	56	156%	
	平成27年度	36	58	161%	
	平成28年度	36	59	164%	
	平成29年度	36	61	169%	

《資料9：教育研究分野別の学生数 平成29年4月1日現在》

人文学研究科

専攻	博士課程前期課程		博士課程後期課程	
	教育研究分野	学生数	教育研究分野	学生数
文化構造	哲学	5	哲学	6
	倫理学	9	倫理学	6
	国文学	22	国文学	10
	中国・韓国文学	7	中国・韓国文学	5
	英米文学	5	英米文学	6
	ヨーロッパ文学	4	ヨーロッパ文学	8
社会動態	日本史学	12	日本史学	17
	東洋史学	2	東洋史学	0
	西洋史学	4	西洋史学	4
	心理学	8	心理学	3
	言語学	5	言語学	5
	芸術学	6	芸術学	4
	社会学	11	社会学	8
	美術史学	10	美術史学	11
	地理学	4	地理学	4
			文化資源論	5
	合計	114	合計	102

II-2-2. 教育内容、教育方法の改善に向けた取組み

人文学研究科評価委員会は、授業評価アンケートの実施など、教育に関わる評価作業を行うとともに、教員の教育方法および技術の向上を図るためにファカルティ・ディベロップメント (FD) を

開催している。人文学研究科のFDは、評価委員会が中心となり実施している。学生による授業評価アンケート、教員相互の授業参観・評価（ピアレビュー）を定期的に行い、その結果は、FDにおいて報告され、カリキュラム編成や授業方法の改善に活用され、中期目標の実現に向けた教育課程の改善が図られている《資料10》。さらに、毎年度、評価報告書を作成し、独自に外部評価を受けて、FDの達成点と改善点を的確に把握し、それを教員・職員間で共有している《資料11》。

こうした活動が個々の科目の授業内容に反映されることはもちろん、カリキュラム構成や授業方法等の改善も頻繁に行っており、たとえば、人文学に必須の古典力を強化することやグローバル人材を育成することなどを目的として、前期課程の研究科共通科目の充実を行った《資料12》。

《資料10：平成26～29年度のFD実施状況》

開催日	テーマ	参加者数
平成26年6月25日	FD懇談会「「ミッションの再定義」をどう読むか」	45
平成26年7月23日	FD講演会「LMSの紹介—ICTを用いた授業の支援」	45
平成26年11月26日	グローバルFD講演会「Facts and Fictions: On New Education in Poland」	46
平成27年2月18日	FD講演会「本学の教育改革について」	53
平成27年3月6日	FD講演会「平成26年度ピアレビュー結果の検討」	44
平成27年7月22日	神戸大学学修管理システム(BEEF)について	54
平成27年9月2日	初年次セミナー・アクティブラーニングに関するFD	47
平成28年1月13日	教員評価について	41
平成28年1月27日	グローバルFD講演会「This, That, or the Other? On Japanese Studies in Romania」	49
平成28年2月2日	グローバルFD講演会「ヤケヴォ大学における国際化戦略」	41
平成28年2月17日	障害者差別解消法と来年度からの神戸大学の体制について	46
平成28年3月7日	平成27年度ピアレビュー結果の検討及び授業評価アンケート結果について	53
平成28年6月8日	入試改革について	55
平成29年2月15日	Horizon 2020 セミナー	51
平成29年3月19日	“The Globalizing Strategy in the Education of the University of Hawai” （「ハワイ大学における教育のグローバル化戦略」）	46
平成29年5月24日	「中国における日本語教育と北京日本学研究中心・ 神戸大学間のダブルディグリープログラムについて」	50
平成29年6月14日	「アカデミック・ライティング指導の意義 —早稲田大学の取り組みから—」	51
平成29年7月12日	「中東欧と日本：国際交流基金ブダペスト日本文化センターの活動報告」	45
平成29年9月6日	文部科学省事業「地（知）の拠点大学による地方創成推進事業（COC+）」 について	41
平成29年12月20日	平成29年度ピアレビュー結果の検討について	48

《資料11：平成23～29年の外部評価実施状況》

実施日	外部評価委員
平成23年5月18日	小田部胤久（東京大学教授）
平成24年4月27日	山本弘明（名古屋文理大学教授・名古屋大学名誉教授、元名古屋大学文学研究科長）
平成25年7月6日	三角洋一（大正大学特任教授・東京大学名誉教授）
平成26年6月28日	深澤克巳（東京大学教授）

平成27年6月27日	立花政夫（東京大学名誉教授、元東京大学人文社会系研究科長）
28年7月3日	中島道男（奈良女子大学教授・奈良女子大学大学院人間文化研究科長） BONAVENTURA RUPERTI（ヴェネツィア大学教授・国際日本文化研究センター外国人研究員）
平成29年6月26日	中畑正志（京都大学大学院文学研究科・教授）

《資料12：平成22年度と平成27年度の人文学研究科博士課程前期課程研究科共通科目の比較》

平成22年度 研究科共通科目	平成29年度 研究科共通科目
海港都市研究交流演習	古典力基盤研究 (a) (b) 海港都市研究交流演習 (a) (b)
海港都市研究	海港都市研究 (a) (b)
地域歴史遺産活用演習	地域歴史遺産活用演習 (a) (b)
地域歴史遺産活用研究	地域歴史遺産活用研究 (a) (b)
倫理創成論研究	倫理創成論研究 (a) (b)
倫理創成論演習	倫理創成論演習 (a) (b)
日本語日本文化教育演習	日本語日本文化教育演習 (a) (b)
多文化理解演習	多文化理解演習 (a) (b)
日本語教育研究Ⅰ・Ⅱ	日本語教育研究Ⅰ (a) (b)・Ⅱ (a) (b)
日本語教育内容論Ⅰ・Ⅱ	日本語教育内容論Ⅰ (a) (b)・Ⅱ (a) (b)
日本語教育方法論Ⅰ・Ⅱ	日本語教育方法論Ⅰ (a) (b)・Ⅱ (a) (b)・Ⅲ (a) (b)
日本語研究	日本語研究 (a) (b)
日本社会文化演習Ⅰ・Ⅱ	日本社会文化演習Ⅰ (a) (b)・Ⅱ (a) (b)
	グローバル人文学特殊研究 (a) (b)
	比較現代日本論特殊研究 (a) (b)
	比較日本文化産業論特殊研究 (a) (b)
	グローバル対話力演習Ⅰ (a) (b)・Ⅱ (a) (b)
	アカデミック・ライティングⅠ (a) (b)・Ⅱ (a) (b)
	オックスフォード夏季プログラム

## Ⅱ-3. 教育内容・方法

### Ⅱ-3-1. 教育課程の編成

前期課程の教育課程は、「研究科共通科目」「専門科目」及び「修士論文指導演習」、後期課程の教育課程は、「研究科共通科目」及び「博士論文指導演習」から構成されている。

前期課程・後期課程の研究科共通科目として、古典力・海港都市・地域歴史遺産・倫理創成・日本語日本文化教育等に関わる授業科目を設け、個別の研究や学域を越えた幅広い視野のもとに自らの研究の社会的意義を自覚させるように配慮している。なお、平成24年度の文部科学省グローバル人材育成推進事業への採択を受け、翌年度から実践的な英語能力の育成を目的とする科目を加えた《資料12》。

前期課程の「専門科目」は、演習と講義形式による特殊研究からなる。科目数は演習科目（「修士論文指導演習」を含む）と特殊研究科目がほぼ同数となっている。人文学における研究の根幹をなす文献読解能力、資料調査分析能力、表現力の養成には演習がふさわしく、前期課程に多くの演習科目が開講されているのはそのためである。修士論文の作成は、これらの演習を受講することで初めて可能となる。後期課程の授業形態は、研究科共通科目・博士論文指導演習ともに演習が基本となる。「修士論文指導演習」および「博士論文指導演習」は、学位論文の作成に特化した演習であり、指導教員3名が、学修カルテ《資料13》を参照しながら、連携して指導に当たる。

《資料13：学修カルテ（博士課程前期課程）》

人文学研究科大学院生学修カルテ【博士課程前期課程】			
学籍番号		氏名	
専攻		教育研究分野	
指導教員	主)	副)	副)
博士前期 1年次 4月20日 <u>前期課程指導教員・研究テーマ届提出</u> 5月20日 <u>修士論文研究計画書提出</u> 2年次 4月10日 <u>修士準備論文を1部提出</u> 6月第3水曜日   前期課程公開研究報告会 6月第4金曜日   主指導教員は前期課程公開研究報告会 終了報告書を提出 11月16日まで <u>修士論文題目を提出</u> 1月16日まで <u>修士論文を1部提出</u> 2月中旬         最終試験 3月上旬         博士課程前期課程修了判定 3月下旬         学位記授与式			実施状況チェック

○このカードは個人情報保護の観点から取扱に注意が必要です。

具体的な研究・研究論文テーマ 関心のある関連領域
将来の希望・就職
修学上の留意点
単位取得状況 共通科目  専門科目

○このカードは個人情報保護の観点から取扱に注意が必要です。

### 指導履歴

年月日	指導内容

○このカードは個人情報保護の観点から取扱に注意が必要です。

### 発表論文など

年月日	論文名	学会名、雑誌名など
記入例① (学術雑誌等での論文発表) 2016年6月	論文名、著者名 (共著の場合には、学生本人に下線を付けてください。) を記入してください。	掲載誌名、発行所等、巻 (号)、最初と最後の頁、査読の有無
記入例② (学会等での論文発表) 2017年8月	論文名、発表者名 (共同発表の場合には、学生本人に下線を付けてください。) を記入してください。	学会名、開催場所
記入例③ (研究費獲得の場合)	研究費獲得：科研 (特別研究員奨励費)、平成26年度 50万円、平成23年度 70万円	
記入例④ (受賞歴、新聞記事掲載等) 2017年5月	学会賞等受賞名や新聞雑誌等掲載事項	

○このカードは個人情報保護の観点から取扱に注意が必要です。

○発表論文等の記載内容は、人文学研究科における、大型補助金獲得や年次報告書作成時に利用することがありますので、以下の点を明記願います。

※ 学術雑誌等への発表論文は、査読の有無を記入のこと

※ 学会、シンポジウム等での発表論文は開催場所を記入のこと本研究科では、学生の多様なニーズ、社会からの要請に対応した教育課程の編成に配慮した次のような取組を実施している。

## II-3-2. 学生や社会からの要請への対応

人文学研究科では、グローバル化が進む現代社会における諸問題に対応し、また社会からの要請に応えるため、教育課程の編成やそれらに配慮した取組みを以下のとおり実践している。

### 1. 他研究科の授業科目の履修

本研究科では、他研究科の授業科目を本研究科での専門科目と同等に扱い、修了に必要な単位として認めている。

### 2. 他大学との単位互換

本研究科は、国内では奈良女子大学大学院人間文化研究科、大阪大学大学院文学研究科、神戸松蔭女子学院大学大学院文学研究科、神戸市外国語大学大学院外国語学研究科と交流協定を締結しており、これらの授業科目中10単位を上限として修了に必要な単位として認めている。

海外では、全学協定及び部局間協定に基づき、単位互換協定を締結している《資料14》。

#### 《資料14：単位互換協定を締結している海外の大学 平成30年3月現在》

協定校	国名	大学間協定	部局間協定
木浦大学校	大韓民国	○	
成均館大学校	大韓民国	○	
韓国海洋大学校	大韓民国	○	
ソウル国立大学校	大韓民国	○	
高麗大学校	大韓民国	○	
国立群山大学校	大韓民国	○	
木浦海洋大学校	大韓民国	○	
韓国外国語大学校	大韓民国		○
山東大学	中華人民共和国	○	
華東師範大学思勉人文高等研究院	中華人民共和国	○	
中山大学	中華人民共和国	○	
南京大学	中華人民共和国	○	
中国海洋大学	中華人民共和国	○	
復旦大学	中華人民共和国	○	
北京外国語大学	中華人民共和国	○	
武漢大学	中華人民共和国	○	
上海交通大学	中華人民共和国	○	
清華大学	中華人民共和国	○	
上海海事大学	中華人民共和国	○	
大連海事大学	中華人民共和国	○	
江南大学	中華人民共和国		○
鄭州大学	中華人民共和国		○
浙江大学	中華人民共和国		○
香港大学	中華人民共和国		○

東北大学	中華人民共和国		○
国立台湾大学	台湾	○	
国立政治大学	台湾	○	
国立台湾海洋大学	台湾	○	
スラバヤ工科大学	インドネシア	○	
南洋理工大學	シンガポール	○	
モンゴル国立大学	モンゴル	○	
イスタンブール工科大学	トルコ	○	
クイーンズランド大学	オーストラリア	○	
西オーストラリア大学	オーストラリア	○	
ウーロンゴン大学	オーストラリア	○	
オーストラリア商船大学	オーストラリア	○	
ピッツバーグ大学	アメリカ	○	
オタワ大学	カナダ	○	
グラーツ大学	オーストリア	○	
カレル大学	チェコ	○	
パリ第2大学	フランス	○	
パリ第10大学	フランス	○	
リヨン高等師範学校	フランス	○	
パリ第7大学	フランス	○	
バルセロナ大学	スペイン	○	
バーゼル大学	スイス	○	
バーミンガム大学	イギリス	○	
SOAS ロンドン大学東洋アフリカ研究学	イギリス	○	
オックスフォード大学	イギリス	○	
エセックス大学	イギリス	○	
ライデン大学	オランダ	○	
ソフィア大学	ブルガリア	○	
ブリュッセル自由大学	ベルギー	○	
ヴェネツィア大学	イタリア	○	
ボローニャ大学	イタリア	○	
トリノ大学	イタリア	○	
ヤゲウォ大学	ポーランド		○
キール大学	ドイツ	○	
マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテ	ドイツ	○	
トリーア大学	ドイツ	○	
ハンブルク大学	ドイツ	○	

ブカレスト大学	ルーマニア	○	
サンクトペテルブルグ大学	ロシア	○	

この制度に基づき、平成24年度から平成29年度の6年間に、協定校との間で受け入れ34名、派遣18名の留学生交換実績がある。交換留学生（受け入れ）実績は《資料15》、交換留学生（派遣）実績は《資料16》のとおりである。

《資料15：交換留学生（受入）実績》

年 度	所属大学名	出身国	奨学金	期 間
平成 24年度	グラーツ大学	オーストリア		24年4月1日～24年9月30日
	北京外国語大学	中国		24年4月1日～25年3月31日
平成 25年度	国立台湾大学	台湾	交流協会	25年4月1日～25年9月30日
	北京外国語大学	中国		25年4月1日～25年9月30日
	中山大學	中国	HUMAP	25年10月1日～26年9月30日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	25年10月1日～26年9月30日
平成 26年度	北京外国語大学	中国		26年4月1日～26年9月30日
	中山大學	中国	HUMAP	26年10月1日～27年9月30日
	ヴェネツィア大学	イタリア	JASSO	26年10月1日～27年9月30日
	ヴェネツィア大学	イタリア	JASSO	26年10月1日～27年9月30日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	26年10月1日～27年9月30日
平成 27年度	ヤゲヴォ大学	ポーランド	JASSO	26年10月1日～27年9月30日
	北京外国語大学	中国	神戸大学基金	27年4月1日～27年9月30日
	北京外国語大学	中国	神戸大学基金	27年4月1日～27年9月30日
	山東大学	中国	神戸大学基金	27年10月1日～28年9月30日
平成 28年度	北京外国語大学	中国	神戸大学基金	28年4月1日～28年9月30日
	ライデン大学	オランダ		28年4月1日～28年3月31日
	リヨン高等師範学校	フランス		28年4月1日～29年9月30日
	ヤゲヴォ大学	ポーランド		28年4月1日～28年9月30日
	ヴェネツィア大学	イタリア		28年10月1日～29年9月30日
	ヴェネツィア大学	イタリア		28年10月1日～29年9月30日
	キール大学	ドイツ		28年10月1日～29年9月30日
	山東大学	中国	神戸大学基金	28年10月1日～29年9月30日
	復旦大学	中国	神戸大学基金	28年10月1日～29年3月31日
平成 29年度	北京外国語大学	中国	JASSO	29年4月1日～29年9月30日
	中国海洋大学	中国	JASSO	29年4月1日～29年9月30日
	中国海洋大学	中国	JASSO	29年4月1日～29年9月30日
	中国海洋大学	中国	JASSO	29年4月1日～29年9月30日
	山東大学	中国	JASSO	29年10月1日～30年9月30日
	キール大学	ドイツ	JASSO	29年4月1日～29年9月30日
	キール大学	オーストリア	JASSO	29年10月1日～30年3月31日
	ヤゲヴォ大学	ポーランド	JASSO	29年4月1日～29年9月30日
パリ第7大学	フランス	JASSO	29年10月1日～30年9月30日	

	パリ第7大学	フランス	JASSO	29年10月1日～30年9月30日
--	--------	------	-------	-------------------

※HUMAP：兵庫・アジア太平洋大学間交流ネットワーク、JASSO：日本学生支援機構

#### 《資料16：交換留学（派遣）実績》

	派遣大学名	派遣国	奨学金	期 間
平成 24年度	ヴェネツィア大学	イタリア		24年9月1日～25年6月15日
平成 25年度	グラーツ大学	オーストリア	JASSO	25年8月30日～26年7月15日
	ヴェネツィア大学	イタリア		25年9月～26年6月7日
	オックスフォード大学	英国	神戸大学基金	25年10月～25年12月
平成 26年度	オックスフォード大学	英国	JASSO	26年10月6日～27年3月14日
	グラーツ大学	オーストリア	JASSO	26年10月1日～27年7月3日
	SOAS	英国	JASSO	26年7月28日～27年6月20日
	国立台湾大学	台湾	JASSO	26年9月1日～27年1月31日
	パリディドロ第7大学	フランス	JASSO	26年9月1日～27年6月30日
平成 27年度	バーミンガム大学	英国		27年9月21日～28年6月17日
	中山大學	中国		27年9月20日～28年1月23日
平成 28年度	ヤゲヴォ大学	ポーランド		28年10月1日～29年2月24日
	復旦大学	中国	JASSO	28年4月1日～29年7月31日
	ボローニャ大学	イタリア		29年1月1日～30年2月2日
平成 29年度	パリ第7大学	フランス	JASSO	29年9月1日～30年6月30日
	パリ第10大学	フランス	JASSO	29年9月4日～30年6月30日
	パリ第10大学	フランス	JASSO	29年9月4日～30年6月30日
	ヴェネツィア大学	イタリア	JASSO	30年2月5日～31年1月31日

### 3. ダブルディグリー・プログラム

平成27年度より、北京外国語大学北京日本学術研究センターとの間でダブルディグリー・プログラムを実施している。これは、博士前期課程の学生が、本研究科在籍中に派遣先大学に最低1年間留学し、所定の単位を修得し、派遣先大学と本研究科にそれぞれ修士論文を提出することによって、最短2年間で2つの学位を取得できるプログラムである。平成27～28年度に各1名を派遣しており、平成28年度には2名を受け入れている。

### 4. 連携講座

本研究科では、博士後期課程社会動態専攻に文化資源論講座を置いて、奈良国立博物館及び大和文華館と連携し、文化財学、文化資源学に関する教育を行い、博物館、美術館及び自治体において、文化財保全、文化財行政を担当できる高度な知識を持った人材を養成している。

### 5. 日本語日本文化教育の取組

本研究科では、学生が専攻する専門分野の特性を活かしながら、非日本語母語話者に対する日本語日本文化教育を行うための知識と能力を身につけることを目指す「日本語日本文化教育プログラム」《資料17》を平成20年度から博士課程前期課程の教育課程に組み入れて実施している。平成22年度以降毎年度、主にこのプログラムの修了者を対象にして、海外の大学での日本語日本文化教育インターンシップを実施している《資料18》。

《資料17：日本語日本文化教育プログラム授業科目》

別表 授業科目および必要修得単位数

	授業科目	単位数		合計単位数
必修	日本語日本文化教育演習	2		12
I群	多文化理解演習(a)(b)	4	2	
	日本語教育研究Ⅰ(a)(b)			
	日本語教育研究Ⅱ(a)(b)			
	日本語教育内容論Ⅰ(a)(b)			
	日本語教育内容論Ⅱ(a)(b)			
	日本語教育方法論Ⅰ(a)(b)			
	日本語教育方法論Ⅱ(a)(b)			
日本語教育方法論Ⅲ(a)(b)				
II群	日本語研究(a)(b)	2		
	国語学特殊研究Ⅰ(a)(b)			
	国語学特殊研究Ⅱ(a)(b)			
	国語学特殊研究Ⅲ(a)(b)			
	国語学特殊研究Ⅳ(a)(b)			
	国語学特殊研究Ⅴ(a)(b)			
	日本語学特殊研究(a)(b)			
	応用言語学特殊研究(a)(b)			
	認知言語学特殊研究Ⅰ(a)(b)			
	認知言語学特殊研究Ⅱ(a)(b)			
	音声学特殊研究Ⅰ(a)(b)			
	音声学特殊研究Ⅱ(a)(b)			
III群	日本社会文化演習Ⅰ(a)(b)	2		
	日本社会文化演習Ⅱ(a)(b)			
	国文学特殊研究Ⅰ(a)(b)			
	国文学特殊研究Ⅱ(a)(b)			
	国文学特殊研究Ⅲ(a)(b)			
	国文学特殊研究Ⅳ(a)(b)			
	国文学特殊研究Ⅴ(a)(b)			
	国文学特殊研究Ⅵ(a)(b)			
	日本古代中世史特殊研究Ⅰ(a)(b)			
	日本古代中世史特殊研究Ⅱ(a)(b)			
	日本中世史特殊研究Ⅰ(a)(b)			
	日本中世史特殊研究Ⅱ(a)(b)			
	日本近代史特殊研究Ⅰ(a)(b)			
	日本近代史特殊研究Ⅱ(a)(b)			
	日本現代史特殊研究Ⅰ(a)(b)			
日本現代史特殊研究Ⅱ(a)(b)				

IV群 (国際文 化学研究 科科目)	日本語教育内容論特殊講義	2		
	日本語教育方法論特殊講義			
	言語コミュニケーション論演習 [齊藤・川上] ※			

※言語コミュニケーション論演習は齊藤・川上担当のものに限る。

[日本語日本文化教育演習]を2単位、I群から4単位、II群・III群から各2単位、及びI群・II群・III群・IV群のいずれかから2単位、合計12単位を必要修得単位数とする。

#### 《資料18：日本語日本文化教育インターンシップ派遣実績》

年度	派遣先機関	派遣国	期 間
平成24年度	ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本学科	ドイツ	24年10月15日～25年12月13日
平成25年度	ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本学科	ドイツ	26年3月26日～27年3月25日
平成26年度	ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本学科	ドイツ	27年3月15日～28年3月7日
平成27年度	トリーア大学日本学科	ドイツ	28年1月23日～28年2月7日
	オックスフォード大学東洋学部日本学科	連合王国	28年2月20日～28年3月20日
	北京外国語大学日本語学科	中国	28年2月28日～28年3月26日
平成28年度	トリーア大学日本学科	ドイツ	28年9月29日～29年7月22日
	ディミトリエ・カンテミル大学日本語学科	ルーマニア	28年10月31日～12月2日
	ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本学科	ドイツ	28年8月28日～29年3月2日
	北京外国語大学日本語学科	中国	29年2月26日～3月20日
平成29年度	ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本学科	ドイツ	29年10月1日～30年3月1日
	オックスフォード大学東洋学部日本学科	連合王国	30年2月17日～3月11日
	北京外国語大学日本語学科	中国	30年3月8日～30年3月30日
	トリーア大学日本学科	ドイツ	29年11月3日～11月28日

## 6. グローバル教育への取組

人文学研究科では、文部科学省、日本学術振興会によって採択された教育研究プログラムを通じて、国際的な場で活躍できる学生の育成をはかってきた。この目的を達成するため、研究科共通科目にグローバル教育のための科目を新たに設置するなど、教育課程を充実させてきた。平成24年度に文部科学省グローバル人材育成推進事業等に採択された「問題発見型リーダーシップを発揮できるグローバル人材の育成」プログラムに基づき、人文学研究科博士課程前期課程では、高度な国際感覚を育成するための外国語授業科目群（グローバル人文学科目群）と、「アカデミック・ライティング」など優れた外国語能力とコミュニケーション能力を育成するための授業科目群（グローバル対話力育成科目群）とからなる、「グローバル人文学プログラム」を実施している。このプログラムは、すべて外国語で授業が行われており、所定の単位を取得し、「外国語力スタンダード」（TOEFL等の外国語資格試験等における所定のスコア）を達成した者には、修了時に「グローバル人文学プログラム修了証」を授与している。

その結果、本プログラムが目的として掲げる「人文学的課題をグローバルな視点から考察し、日本文化の深い理解を基に異文化との対話を重ねながら、現代社会における諸問題を解決に導いていくリーダーシップとコミュニケーション能力を持った人材」が育ちつつある。（「グローバル人文学プログラム」については、「第2部 I-1. グローバル人材育成推進事業」84-88頁を参照。）

## II-4. 教育方法

### II-4-1. 授業形態の組合せと学習指導法上の工夫

教育を展開する上での指導法の工夫として、例えば景観文化財の現地保存について北野の伝建地区に赴くなど、フィールド型授業も重要視している《資料19》。

#### 《資料19：「歴史地理学特殊研究 I (a)」シラバス》

開講科目名	歴史地理学特殊研究 I (a)			開講区分	単位数
担当教員	岡地 真			第3クォーター	1.0単位
ナンバリングコード		曜日・時限	月3	時間割コード	3L510
<b>授業のテーマ</b> 景観および文化資源の保存活用					
<b>授業の到達目標</b> 目標は、受講生が自ら現地を訪れ、文化財に関して考察する基礎的知識を身につけること、自ら調べ考える好奇心を持つことである。					
<b>授業の概要と計画</b> 都市の可視みや景観を構成する建造物・歴史資料など、多様な文化財の現地保存について、実際に調べ、考える。授業はグループワーク、演習形式で進める。学部生と共に実践的作業を進め、グループを導いて牽引する役割を期待したい。詳細は神戸大学 LMS (学修管理システム BEEF) 「景観文化財学」で確認すること。					
<b>成績評価方法</b> 平常点による。課題レポート、調査、討論や発表など授業への参加取り組み度合いから、総合的に評価する。					
<b>成績評価基準</b> 秀、優、良、可、不可に基づく。					
<b>履修上の注意 (関連科目情報)</b> 専門的知識より、文化財や歴史資料等の保存活用に興味があることを重視します。30・40を連続受講のこと。					
<b>事前・事後学修</b> 法制度や理論は参考文献を読み、各自で文化財保存の実態や課題等を学ぶこと。自分たちで積極的に資料調査をし学習すると良い。グループワークである点に留意。					
<b>オフィスアワー・連絡先</b> 人文学研究科C棟5階 C566室 火曜日12:30-13:00					
<b>学生へのメッセージ</b> この講義では実際に野外を歩き調査することを通じて、調査法を学ぶと共に、文化資源について考えていきたい。					
<b>今年度の工夫</b> 視聴覚教材を使って内容の理解を図る。学修支援システムBEEFで授業内容を案内する。参考図書を附属図書館資料ガイド" KULIP" で紹介している。					
<b>教科書</b> テキストは使用しない。プリントを配布する。以下はテーマに関する基本的図書である。 文化的景観：生活となりわいの物語 / 金田章裕：日本経済新聞出版社，2012，ISBN： 歴史的遺産の保存・活用とまちづくり / 大河直躬，三船康道編著：学芸出版社，2006，ISBN： 遺跡保存の事典 新版 / 文化財保存全国協議会：平凡社，2006，ISBN:9784582120110					
<b>参考書・参考資料等</b> 景観文化財、文化財に関する参考図書を体系的にまとめ、人文学図書館KULIPコーナーで紹介している。下記はやや専門的だが、文化財保存・活用の重要な参考図書である。 現代の建築保存論 / 鈴木博之：王国社，2001，ISBN： 歴史的遺産の保護 / 加藤一郎 野村好弘：信山社出版，1997，ISBN:4797250127 遺跡と観光：市民の考古学シリーズ / 澤村明：同成社，2011，ISBN:9784886215642					
<b>授業における使用言語</b> 日本語					

また実社会に応用できる能力を身につけることを目的として、実習型の授業も重視している。例えば、日本語教育に関連する基礎的知識を習得した上で、3週間にわたって実施される「神戸大学夏期日本語日本文化研修プログラム」等において実習を行うことで、異文化交流と日本語教育の実体験ができる授業を行っている《資料20》。

《資料20：「日本語日本文化教育演習」シラバス》

開講科目名	日本語日本文化教育演習		
担当教員	實平 雅夫	開講区分	単位数
		前期	2.0単位
ナンバリングコード	曜日・時限	月5	時間割コード 1L523
授業のテーマ			
日本語日本文化教育と異文化理解			
授業の到達目標			
<p>1) 日本語日本文化教育に関する基礎的知識の習得 日本語日本文化教育に関する講義（オムニバス形式・国際教育総合センター留学生教育部門教員が担当）と日本語の模擬授業を通して、日本語教授法、日本語学、日本文化・日本事情、異文化交流などの基礎的知識を習得する。</p> <p>2) 日本語教育の基礎的な教授スキルの習得 国際教育総合センター留学生教育部門で開講されている留学生対象とした日本語日本文化の授業の観察、及び本授業における日本語の模擬授業を通して、日本語日本文化教育のティーチングアシスタントや教授を担う際に必要となる基礎的な教授スキルを身につける。</p>			
授業の概要と計画			
<p>本授業では、日本語日本文化教育に関する講義（オムニバス形式・国際教育総合センター留学生教育部門教員が担当）と日本語の模擬授業を通して、日本語・日本文化教育に必要な力は何かを考える。授業のスケジュールは以下のとおり。全15回（30時間）。定員は12名程度。受講希望者が多い場合は、受講動機のレポートを渡し、その評価により受講者を決定する。</p> <p>第1回目（4/10）オリエンテーション（授業の概要、スケジュール、評価について）  第2回目（4/17）講義①「外から見た日本語」（朴秀娟）  第3回目（4/24）講義②「日本語教授法1」（齊藤）  第4回目（5/1）講義③「日本語教授法2」（實平）  第5回目（5/8）講義④「日本語教授法2」（川上）  第6回目（5/22）講義⑤「やさしい日本語」（ハリソン・黒田）  第7回目（5/29）講義⑥「異文化コミュニケーション」（黒田）  第8回目（6/12）講義⑦「外から見た日本」（ハリソン）  第9回目（6/19）ニーズ調査、レディネス調査、教材分析・選定（『みんなの日本語』）  第10回目（6/26）教案作成・検討①  第11回目（7/3）教案作成・検討②  第12回目（7/10）模擬授業・検討①  第13回目（7/24）模擬授業・検討②  第14回目（7/31）模擬授業・検討  第15回目（8/7）模擬授業の振り返り・フィードバック</p>			
成績評価方法			
<p>本授業は、授業（講義）への参画、模擬授業への参加と模擬授業の振り返りシートの提出、期末レポートの3点で評価する。なお、講義全7回のうち5回以上、模擬授業全3回のうち2回以上出席していること、さらに最終レポートを提出していることが、成績評価の前提条件となる。すなわち、このいずれかの条件を満たさない場合、不可となる。</p>			
成績評価基準			
<p>1) 授業（講義）への参画：40%</p> <p>2) 模擬授業への参加と模擬授業の振り返りシートの提出（3回）：40% 日本語・日本文化教育の模擬授業の実施を通して日本語・日本文化教育に必要な力とは何かを考え、記録する。</p>			
履修上の注意（関連科目情報）			
<p>本授業は、セメスター開講科目（前期15回の授業）である。クォーターごとの履修は不可能であるので、注意すること。  関連科目情報：人文学研究科の日本語日本文化教育プログラム、国際文化学研究科の日本語教師養成サブコースの開講科目を履修することが望ましい。</p>			
事前・事後学修			
<p>国際教育総合センター留学生教育部門が2017年度前期に実施するオープンセンターウィークにおいて日本語及び日本事情科目の公開授業を観察して参観レポートを提出する。また、模擬授業終了後、振り返りシートを提出すること。</p>			

学生に対する指導体制は、前期課程、後期課程ともに入学時から主指導教員が履修状況をチェックし、個別に指導を行う一方、他専攻の教員1名を含む副指導教員2名を置き、あわせて3名の指導教員が協力して指導に当たっている。学生は『学生便覧』に明記されている学修プロセスに従って修士論文研究計画書、博士論文作成計画書などを提出する《資料21》。また、正副研究科長、正副大学院委員と各教育研究分野の代表で構成される学修プロセス委員会は、学位論文作成に向けて指導が適切に行われているかを検証するとともに、学修プロセスの見直しを行っている。

平成29年度も、学修プロセスにしたがって前期課程公開研究報告会（前期課程2年次）、後期課程公開研究報告会（後期課程2年次）、博士予備論文公開審査（後期課程3年次）が実施され、該当する学生のその時点における研究成果を踏まえて指導が行われた。

《資料21：学修プロセスフロー》

人文学研究科学生の学修プロセスフロー図			
年次	時期	事項	
<b>【博士課程前期課程】</b>			
1年次	4月20日	■「 <u>前期課程指導教員・研究テーマ届</u> 」提出	
	5月20日	■「 <u>修士論文研究計画書</u> 」提出	
2年次	4月10日	■ <u>修士準備論文を1部提出</u>	
	6月第3水曜日	前期課程公開研究報告会	
	前期課程公開研究報告会の翌週の金曜日	■主指導教員は「前期課程公開研究報告会終了報告書」を提出	
	11月16日まで	■「 <u>修士論文題目</u> 」提出	
	1月16日まで	■ <u>修士論文を1部提出</u>	
	2月中旬	最終試験	
	3月上旬	博士課程前期課程修了判定	
	3月下旬	学位記授与式	
	<b>【博士課程後期課程】</b>		
	1年次	4月20日	■「 <u>後期課程指導教員・研究テーマ届</u> 」提出
5月31日		■「 <u>博士論文作成計画書</u> 」提出	
2年次	7月1日	■主指導教員は指導学生の後期課程公開研究報告会発表題目を提出	
	9月30日	後期課程公開研究報告会	
	10月10日	■主指導教員は「後期課程公開研究報告会終了報告書」を提出	
	3年次	5月31日	■ <u>博士予備論文を3部提出</u>
3年次	6月最終水曜日または7月第1水曜日	博士予備論文公開審査	
	博士予備論文公開審査の翌週の金曜日	■主指導教員は「博士予備論文公開審査報告書」を提出	
	12月1日～12月10日	■ <u>博士論文を5部提出</u>	
	1月～2月	最終試験	
	3月上旬	博士課程後期課程修了者（学位授与）認定	
3月下旬	博士学位授与		
備考：_____は、学生が提出するもの。 ■は教務学生係に提出するもの。 博士課程前期課程9月修了者の修士論文題目は5月15日まで、修士論文提出は7月15日まで。 博士課程後期課程9月修了者の博士論文提出は、7月1日から7月10日まで。 (注) 時期が休日にあたる時は、その前日とします。ただし、修士論文提出については、その翌日とします。各年度の時期については、前年度の12月に掲示により通知します。			

学位論文の提出条件、作成要領は、人文学研究科博士課程後期課程の一期生が学位論文を提出するのに合わせて、平成21年度に「学位論文受理条件（申し合わせ）」および「学位論文等作成要領」を作成して明文化し、学生に周知した《資料22》《資料23》。

#### 《資料22：学位論文受理条件（申し合わせ）》

##### 論文博士 [2009年11月より適用]

原則として、出版されている研究書あるいは出版が内約されている研究書であること。出版が予定されていない場合には、2本以上の査読誌掲載論文を含んでいること。その場合、学位取得後1年以内に電子媒体サービス等を利用して刊行すること。

##### 課程博士 [2010年4月入学者より適用]

- (1) 学位論文の内容を、査読誌ないしはそれに準ずる研究誌に刊行していること（採択済みも含む）、なお、教員が所属している教育研究分野でしかるべき規定を設けている場合には、この規定に加えて、当該教育研究分野の規定を尊重する。
- (2) 特段の理由がない限り、電子媒体サービス等を利用して、学位論文を学位取得後1年以内に刊行すること。

#### 《資料23：学位論文等作成要領》

##### 学位論文等作成要領

学位論文の審査を願ひ出る者は、この作成要領に従って書類を整備すること。

##### 1 申請書類について

次に掲げる書類等を主指導教員を経て研究科長に提出するものとする。ただし、提出にあたっては、必ず主指導教員及び教務学生係の点検を受けること。

- |                              |      |
|------------------------------|------|
| (1) 学位論文審査願                  | 1部   |
| (2) 学位論文提出承認書                | 1通   |
| (3) 論文目録                     | 1部   |
| (4) 学位論文                     | 1編5部 |
| (5) 論文内容の要旨（4,000字程度、日本語による） | 7部   |
| (6) 履歴書                      | 1部   |
| (7) 参考論文                     | 1部   |

##### 2 学位論文について

- ・ 永久保存に耐え得るタイプ印刷とし、製本すること。
- ・ 規格は自由であるが、なるべくA4版が望ましい。
- ・ 表紙には、提出日、論文題目等を明記すること。（別紙見本Aを参照）
- ・ 提出後は、訂正、差し替えができないので、誤字、脱字等がないように注意すること。
- ・ 外国語による論文の場合は、提出論文の扉に、論文題目とその和訳（括弧書き）を併記すること。
- ・ 共著論文のうち、次の条件を満たしているものは、学位論文として受理することができる。
  - ①論文提出者が研究及び論文作成の主動者であること。
  - ②学位論文の共著者から、当該論文を論文提出者の学位論文とすることについての承諾書が得られること。（別紙承諾書添付）

##### 3 論文目録について

###### (1) 題目について

- ①題目（副題を含む）は、提出論文のとおり記載すること。
- ②外国語の場合は、題目の下にその和訳（括弧書き）を併記すること。

###### (2) 印刷公表の方法及び時期について

- ①公表は、単行の書籍又は学術雑誌等の公刊物（以下「公表誌」という。）に登載して行うものであること。
- ②論文全編をまとめて公表したものについては、その公表年月、公表誌名、（雑誌の場合は、巻・号）又は発行書名等を記載すること。また、論文を編・章等の区分により公表したものについては、

<p>それぞれの区分ごとに公表の方法・時期を記載すること。</p> <p>③学位論文（編・章）について、別の題目で公表した論文をもって公表したものとする場合は、その題目（公表題目）を（ ）を付して併記すること。</p> <p>④未公表のものについては、次の記載例を参照の上、その公表の方法、時期の予定を記載すること。 （記載例）</p> <p>イ すでに出版社等に提出し、出版が内約されている場合。            題目   ○○○○○○○○○○           ○○○出版社から平成○○年○○月 刊行予定</p> <p>ロ すでに投稿し、学会等において、掲載期日が決定しているが、申請手続の時点において、印刷公表されていない場合。            題目   ○○○○○○○○○○           ○○○学会誌○巻○号       平成○○年○○月○○日 掲載予定</p> <p>ハ 現在投稿中の場合。            題目   ○○○○○○○○○○           ○○○学会誌 投稿中       平成○○年○○月○○日 投稿済み</p> <p>ニ 近く投稿する予定の場合。            題目   ○○○○○○○○○○           ○○○学会誌平成○○年○○月投稿予定</p> <p>⑤共著の場合は必ず共著者名を付記すること。</p> <p>(3) 冊数について            学位論文1通についての冊数を記載すること。</p> <p>(4) 参考論文について            すでに学会誌等に発表した論文題目を記載し、その論文を添付すること。</p> <p>4 履歴書について           (別紙見本Bを参照)</p> <p>(1) 氏名について            戸籍のとおり記載し、通称・雅号等は一切用いないこと。</p> <p>(2) 学歴について            ①高等学校卒業後の学歴について年次を追って記載すること。            ②在籍中における学校の名称等の変更についても記載すること。</p> <p>(3) 職歴・研究歴について            原則として常勤の職について、機関等の名称、職名等を正確に年次を追って記載すること。ただし、学歴と職歴に空白となる期間があり、非常勤等の職歴がある場合はこれを記入し、職歴等に不明な期間がないように記載すること。</p> <p>(4) 賞罰について            特記すべきものと思われるものを記載すること。</p> <p>5 論文内容の要旨について            記載方法については、(別紙見本C)を参照。</p>	<p>以 上</p>
--	------------

ティーチングアシスタント (TA) は、授業の必要性に応じて適宜配置している《資料24》。TA採用者に対しては「TA ハンドブック」を配布するとともに、授業担当者からのガイダンスを行っている。

《資料24：TAの人文科学研究科への配置実績（平成27～29年度、単位：人）

	講義科目	演習・実習科目等
平成27年度	2	15
平成28年度	1	10
平成29年度	2	15

シラバスは、すべてウェブサイト上に公開しており、担当教員名、講義目的、授業内容、成績評価・基準、準備学習等についての具体的な指示、教科書・参考文献、履修条件等の履修情報を掲載し、学習の便宜を図っている。履修科目登録時には、指導教員が点検し、学生の意欲や関心に合った履修を促している。シラバスに参考文献や授業の履修条件を適宜示すことにより、学生の主体的

学修を促している。また、オフィスアワーが各教員のシラバスに記載され、授業時間外に学修・学生生活に関する質問・相談に応じている《46頁の資料19、47頁の資料20》。

## II-4-2. 主体的な学習を促す取組

履修科目登録にあたって指導教員が点検し、学生の意欲や関心に合った履修を促している。シラバスに参考文献や授業の履修条件を適宜示すことにより、学生の主体的学修を促している。

大学院生の学習意欲を高めるために、海外で研究発表を行う機会や調査・実験を行う機会を提供している。特に後期課程の大学院生の、海外で開催される学会への参加に対して、大学院学生海外派遣援助事業などを活用して支援してきた《資料25》《資料26》。また、海港都市研究センターは、台湾・大韓民国・中華人民共和国の大学と連携して、大学院生の研究発表を中心とする国際シンポジウム（海港都市国際シンポジウム）を継続的に開催してきた。平成29年度は提携校と連携して国際シンポジウムを開催し、大学院生の海外派遣を行っている。

### 《資料25：平成24年度から29年度までの、大学からの資金援助を得た海外派遣件数》

	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
件数	8	7	4	14	13	12

※平成26年度までは、神戸大学基金による海外派遣件数である。

### 《資料26：平成29年度における大学からの資金援助を得た海外派遣》

教育研究分野	派遣先	派遣目的	発表論文名
言語学	フランス パリ 高等師範学校	研究発表	A comparison of coding patterns in motion and change-of-state expressions in English: A corpus-based approach
文化資源論	フランス ユネスコ本部、ギメ東洋美術館等パリ市内の関連美術館 ベルギー ベルギー王立美術館 オランダ 国立民族学博物館 ドイツ ケルン東方芸術博物館	調査・資料収集	
国文学	ドイツ ハンブルク大学	平成29年度日本語教育インターンシップ活動	
ヨーロッパ文学	ドイツ トリーア大学	平成29年度日本語教育インターンシップ活動	
社会学	ポーランド ヤゲウォ大学	講義	
中国・韓国文学	中国 中山大学	研究発表	A Study on the Transmit of Japanese Meiji-period Political Novel Kajinnokigu In East Asia
社会学	中国 中山大学	研究発表	Tokyo as a Contemporary Port City and Its Network Construction Through Risks
国文学	イギリス オックスフォード大学	平成29年度日本語教育インターンシップ活動	
心理学	中国 北京外国語大学	平成29年度日本語教育インターンシップ活動	
美術史学(2名)	アメリカ メトロポリタン美術館、ク	資料収集	

	リストイーズ、コロンビア大学、ボ ストン美術館		
社会学	ベルギー 神戸大学ブリュッセルオ フィス	研究発表	Illustrating Cosmo-politization: The Formation of Cosmopolitics through Complexities of Sub-Politics

環境面では、平成19年度の学舎改修に際して学生用スペースを拡張したが、平成22年度以降にはラーニングコモンズの設置、情報処理室の拡充などを行うことで、《資料27》のように主体的な学修を促す環境を整備している。

#### 《資料27：主体的な学習を促す環境の整備項目》

施設等	概要
図書館（日本文化資料コーナー）	本学部の人文科学図書館は書籍約30万冊を有し、毎年確実に蔵書数を増やしている。授業期間中は、平日（8時45分～20時）および土曜日（10～18時）、試験期間中は、平日の夜間（21時まで）および日祝日も開館している（10～18時）。 「日本文化資料コーナー」を設けて資史料、貴重図書、レファランズ類を集中的に配架し、複数の辞書類・資料を同時に縦覧する必要がある歴史・文学系等の学生の利便を図っている。
学生用共同研究室	学生が個人あるいはグループで調査・研究するために使用できる「共同研究室」を教育研究分野ごとに設置し、学生の自主学習へ配慮している。
コモンルーム	学生がグループ学習や研究会などのために自由に使用することのできる「コモンルーム」を3カ所設置し、学生の自主学習へ配慮している。
共同談話室	教員と学生が共同研究、読書会など行うために使用することができる「共同談話室」を5カ所設置し、自由な共同学習や演習等の授業に活用している。可能な限り具体的な活用状況を入れる。
情報機器	学生が利用できるパーソナル・コンピューターを「情報処理室」（平成22年度 B 棟に移転・拡充）に48台、人文科学図書館に18台を設置するとともに、各専修の共同研究室や実験室などにも適宜配置している。
教育機器	視聴覚機材を平成21～23年度 B 棟に、平成24年度 C 棟に設置し、ほとんどの教室で視聴覚機材（プロジェクター、スクリーン、DVD など）を使った授業ができるようになった。
ラーニングコモンズ	自由に机と椅子を組み合わせ、図書館資料を自由に使用し、グループで話し合いながら学習を進めることができるスペースとして、「ラーニングコモンズ」が人文科学図書館に設置された。平成25年度から運用が始まり、自主学習や演習等の授業に活用されている。

## II-5. 学業の成果

### II-5-1. 学生が身に付けた学力や資質・能力

本研究科博士課程前期課程の学位取得等の状況は、《資料28》のとおりである。ここ数年、人文科学研究科博士課程前期課程の入学者の標準修業年限（2年）内修了者の比率は、平均約75%となっている。本研究科博士課程後期課程の学位取得状況は《資料29》のとおりである。平成19年度の人文科学研究科への改組以後は、修業年限（3年）内の学位取得者の比率は平均約37%となっている。修士学位論文の題目は、《資料30》、博士學位論文の題目は《資料31》のとおりである。また、専修教育職員免許状の取得状況は《資料32》のとおりである。

多数の学生が国際学会や全国規模の学会等で研究成果を発表し、優秀論文賞を受賞するなど、在学生の研究成果が各種学会等において高く評価されている《資料33》。

《資料28：人文学研究科（博士課程前期課程）の修士学位取得状況一覧 平成29年3月現在》

入学年度 (標準修業年度)	入学者総数 (a)	既修了者数 (b)	既修了率 (b/a)	標準年限内修 了者数 (c)	標準年限内修 了率 (c/a)
平成22年(平成23年)	43	38	88.4%	32	74.4%
平成23年(平成24年)	51	48	94.1%	40	78.4%
平成24年(平成25年)	48	45	93.8%	39	81.3%
平成25年(平成26年)	44	42	95.5%	35	79.5%
平成26年(平成27年)	41	31	75.6%	31	75.6%
平成27年(平成28年)	61	59	96.7%	50	81.9%
平成28年(平成29年)	63	51	80.9%	43	68.2%

《資料29：人文学研究科（博士課程後期課程）の博士学位取得状況一覧 平成29年3月現在》

入学年度 (標準修業年度)	入学者総数 (a)	既修了者数 (b)	既修了率 (b/a)	標準年限内修 了者数 (c)	標準年限内修 了率 (c/a)
平成22年(平成24年)	26	16	61.5%	10	38.5%
平成23年(平成25年)	21	8	38.1%	8	38.1%
平成24年(平成26年)	11	5	45.5%	3	27.3%
平成25年(平成27年)	19	1	5.3%	1	5.3%
平成26年(平成28年)	23	12	52.2%	7	30.4%
平成27年(平成29年)	25	13	52.0%	5	20.0%

《資料30：平成29年度人文学研究科博士課程前期課程修了者の修士論文題目》

専攻	教育研究分野	論文題目
文化 構造 専攻	哲学	『テアイテス』においてなぜ「プロタゴラス」が反駁されるか—ソクラテスの「産婆術」と「人間尺度説」の対立構造を手がかりに
	哲学	意味の規範性と合理性—Davidsonを手がかりとして—
	哲学	ソクラテス・プラトンと孔子の基本思想をめぐる比較考察—死に対する認知、徳、無知・不惑を中心に
	倫理学	アーレント政治思想からみたインターネット公共空間の現代的諸相
	倫理学	メディアにおける責任の問題—ナショナリズムとの関係において
	倫理学	丸山真男のリベラリズム思想—荻部直と孫歌を中心とした考察—
	倫理学	マーサ・C. ヌスバウムの「嫌悪感」に関する考察—ヘイトクライムを例に—
	倫理学	ティモシー・モートンの「ダーク・エコロジー」思想について—「人間と非人間との関係」の視点から—
	国文学	「私小説」としての『苦海浄土—わが水俣病』—石牟礼道子における「主体」の成立—
	国文学	無意志自動詞による可能表現の研究
	国文学	南北朝期における伊勢という場と宗教言説
	国文学	庄野潤三の一〇年間～五〇年代後半から六〇年代前半にかけて～
国文学	山東京伝の志向と考証—読本・合巻と『骨董集』との関わりを軸として—	

	国文学	『将門記』における叙述の多元性—貞盛・武芝関連表象を手がかりとして—
	国文学	源高明准抛説の成立に関する研究
	国文学	小松左京研究—『日本沈没』を中心に
	国文学	ダロウに関する—考察—中国語母語話者への教育に向けて—
	国文学	リービ英雄研究—言語論と「越境」を中心に
	中国・韓国文学	現代韓国小説にみる役割語の考察
	中国・韓国文学	端木琿の作品における故郷描写について—「カルジ草原」を中心に
	英米文学	<i>Ways of Life in Mrs Dalloway: An Inquiry into Septimus, Clarissa, and Other Characters</i>
	英米文学	<i>Delay and Suspense in Bleak House</i>
	英米文学	<i>Trapped in Circles: Alienation and Shelter-Seeking in Daniel Alarcón's At Night We Walk in Circles</i>
	英米文学	<i>Joy Kogawa's Japanese Canadian Experience and Perspective: Ethnic Identity, Christianity and Pacifism</i>
	ヨーロッパ文学	ヴァレリーにおける「政治的なもの」をめぐって
社会 動 態 専 攻	日本史学	享保期における出版統制政策—御条目立案過程の分析を中心に—
	日本史学	鎌倉末期～室町初期における大乗院諸引付にみる越前国坪江郷の支配構造
	日本史学	一九三〇年代の東京都制構想
	日本史学	神郡の成立に関する基礎的研究
	東洋史学	五・三〇運動期における中国の言論界——『嚮導』、『現代評論』、『京報副刊』をめぐって
	西洋史学	中世都市の公共空間「道路と広場」と市民意識—イタリア北・中部を中心として—
	心理学	規範違反状況における第三者による介入の進化心理学的研究
	心理学	運動準備中における時間知覚の歪みに関する神経基盤
	心理学	<i>The Perimeter on the Ground</i>
	心理学	英語学習動機付けの網羅的調査—大阪府の公立中学校の実態調査—
	心理学	注意が脳律信号に与える影響
	言語学	日本語の感情メタファー分析—感情の所在—
	言語学	日本語教育におけるマイクロレクチャーの開発と利用に関する基礎研究—学習者の視点を中心に—
	芸術学	グローバル時代におけるハリウッド映画のナラティブ—『カサブランカ』と『バベル』における集中化と分散化の構造を中心に
	芸術学	北野武の映画作品における円環構造と逸脱—『ソナチネ』と『キッズ・リターン』を中心に
社会学	第二次世界大戦後の日本プロテスタンティズムの興隆—単立千里山基督教会の事例を通して—	
社会学	EUにおける中国系新移民～フランスとスペインに移住した中国東北人を中心に～	

社会学	香港における「全職パパ」の社会学的考察
社会学	中国内モンゴルにおける民族意識の動揺—モンゴル民族の意識とライフスタイルの変遷に関する社会学的研究
社会学	中国の対外教育政策と現地の受容—日本における中医薬系孔子学院を事例として—
社会学	中国人女性の越境するライフコース—日本への留学、就職そして帰国—
美術史学	アンリ・ルソー《眠るジプシー女》の制作背景について
美術史学	円山応挙の仏画制作—慈照寺蔵「釈迦十六善神像」と大乘寺蔵「十六羅漢図」の成立をめぐって
美術史学	近代工芸作品における古代技法の再解釈—六角紫水・清水南山の工芸技法を中心に—
美術史学	毛沢東図像研究—「前進」表現を中心に—
地理学	大学生のキャリア意識と居住地選好—メンタルマップ研究の視点から—
地理学	場所イメージから再考する「阪神間モダニズム」—郊外住宅地芦屋の形成と変遷—

《資料31：平成29年度人文学研究科博士課程後期課程修了者の博士論文題目》

専攻	教育研究分野	博士論文題目
文化 構造	倫理学	Cosmopolitan Normativity: Between Global and Social Justice (コスモポリタンな規範性：グローバル正義と社会正義の間)
	国文学	中国人日本語学習者に対する条件表現の指導について
	英米文学	Rowling and Feminism; An Analysis of Her Female Characters in <i>Harry Potter</i> and other works (ローリングとフェミニズム—『ハリー・ポッター』及び他作品の女性キャラクターについての考察) アメリカ南部文学における遺伝をめぐる社会文化的言説の研究 —エレン・グラスゴウの小説を中心に—
社会 動態	日本史学	鎌倉後期の西国における寺社造営財源案出政策と公武 近世後期伊丹郷町運営の研究 近世後期の平野郷町改革と領主支配
	西洋史学	帝政末期トリエステ国立ギムナジウムにおける多言語教育
	心理学	The Personal and Interpersonal Character of Choice: Sociocultural Variation, Desire for Control, and Rejection Avoidance (選択の個人的および対人的な特徴：社会文化的差異、コントロール志向、拒絶回避)
	言語学	A Corpus-Based Study of Linguistic Parallelism between Motion and Change-of-State Expressions in English: An Examination of Conceptual Parallelism (英語における移動表現と状態変化表現の言語的平行性に関するコーパス研究：概念的平行性の検討)
	社会学	価値・規範を中心とした社会システム理論の再生のための比較文明学的研究 —パーソンズ社会学とトッド人類学の接続を基調として—
	社会学	現代日本における「子ども中心主義」の諸相 —大学生／子育て世代の語りからみた規範の再生産とその影響力—
	美術史学	<イーゼンハイム祭壇画>研究

《資料32：教育職員免許（専修免許状）取得状況》

	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
取得者数	20	19	6	13	14	9

《資料33：平成23～29年度学生受賞者一覧》

氏名	所属（受賞時）	成績功績等の概要
李瑩瑩	人文学研究科 博士課程後期課程	論文「上代漢字文献における「矣」の用法」が、平成23年度漢検漢字文化研究奨励賞・佳作（財団法人 日本漢字能力検定協会）を受賞した（平成23年度）。
八木彩乃	人文学研究科 博士課程前期課程	グローバルCOE「心の社会性に関する教育研究拠点」総括シンポジウム「心はなぜ、どのように社会的か？～フロンティアとアジェンダ～」(2012. 3. 17開催) で若手ポスターアワードを受賞した（平成23年度）。
大杉千尋	人文学研究科 博士課程後期課程	論文「イーゼンハイム祭壇画《キリスト復活》に関する一考察―「オランダ型」キリストの機能をめぐって」により、第12回美術史論文賞を受賞した（平成26年度）。
Charis Eisen	人文学研究科 博士課程後期課程	選択がないような状況における人々の行動の文化差および自己観による影響を検討した研究内容が独創性や発展性の面で高く評価され、日本社会心理学会の若手研究者奨励賞を受賞した。（平成27年度）
竇新光	人文学研究科 博士課程後期課程	中国国家優秀自費留学生賞を受賞した（平成28年度）。
王輝皓	人文学研究科 博士課程後期課程	中国国家優秀自費留学生賞した（平成28年度）。
Charis Eisen	人文学研究科 博士課程後期課程	学術研究活動において、国際的規模又は全国的規模の学会から賞を受けたものとして本学の学生表彰を受けた（平成28年度）。
川上恵理	人文学研究科 博士課程後期課程	美術史の分野では新人の登竜門である鹿島美術財団の優秀賞を受賞した（平成29年度）。
佐々木純哉	人文学研究科 博士課程前期課程	権威のあるグレンツェンピアノコンクール第9回全国大会の大学・一般コースにおいて、金賞(最高位)を獲得したことにより本学の学生表彰を受けた（平成29年度）。

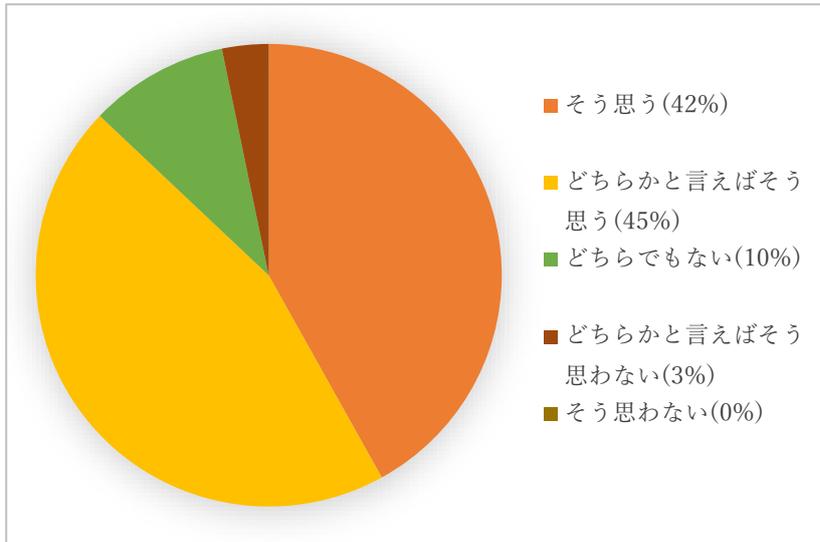
II-5-2. 学業の成果に関する学生の評価

「授業振り返りアンケート」平成29年度後期の結果では、教育の成果や効果に関する質問項目の「この授業の内容はよく理解できましたか。」「シラバスに書かれている到達目標をあなたはどの程度達成できたと思いますか。」のうち、前者については最上点及び次点の回答者が97.3%、後者については最上点及び次点の回答者が86.66%といずれも良好な結果が得られており、いずれも極めて高いレベルを維持している《資料34》。

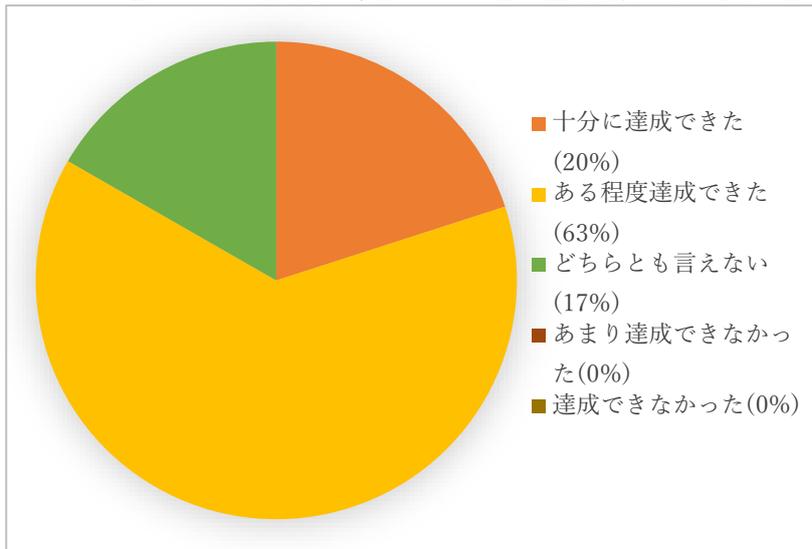
また、平成28年度の修了時アンケートでは、「深い学識」と「高度の専門的知識」について、身についたという回答が多く得られた。また、「課題を設定して解決する能力」も身につけていることが確認された《資料35》。

《資料34：「平成29年度1Q, 2Q, 3Q, 4Q 授業評価アンケート」結果（抜粋）》

この授業の内容はよく理解できましたか。

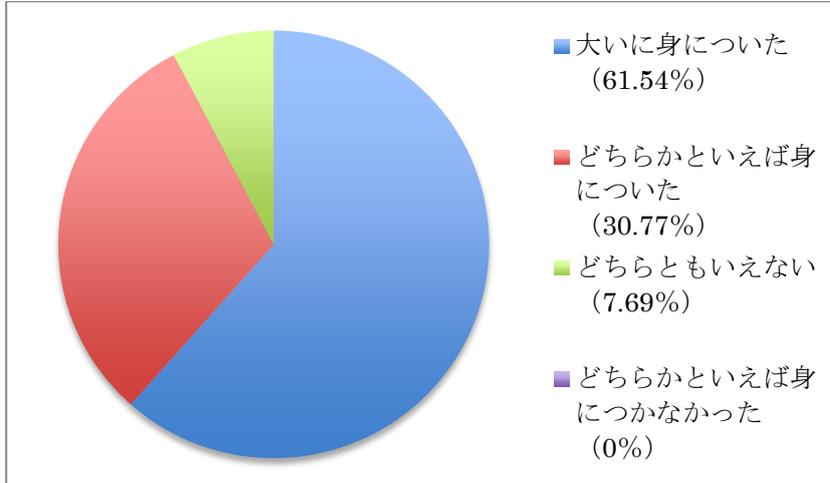


シラバスに書かれている到達目標をあなたはどの程度達成できたと思いますか。

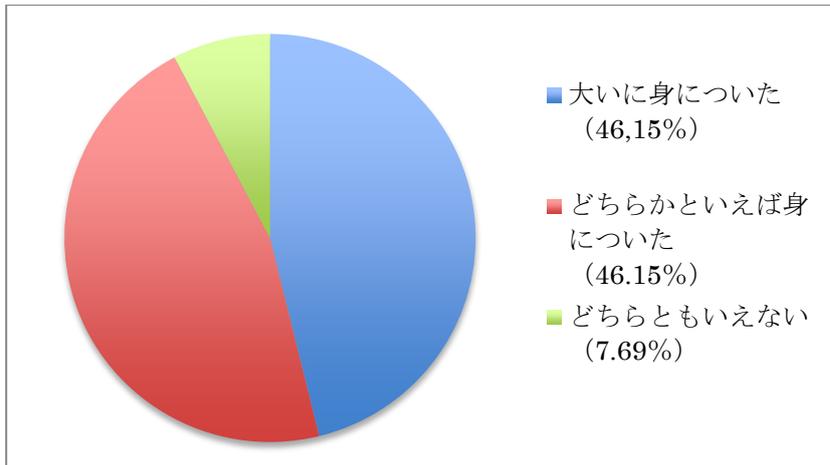


《資料35：「平成26年度人文学研究科修了時アンケート」結果（抜粋）》

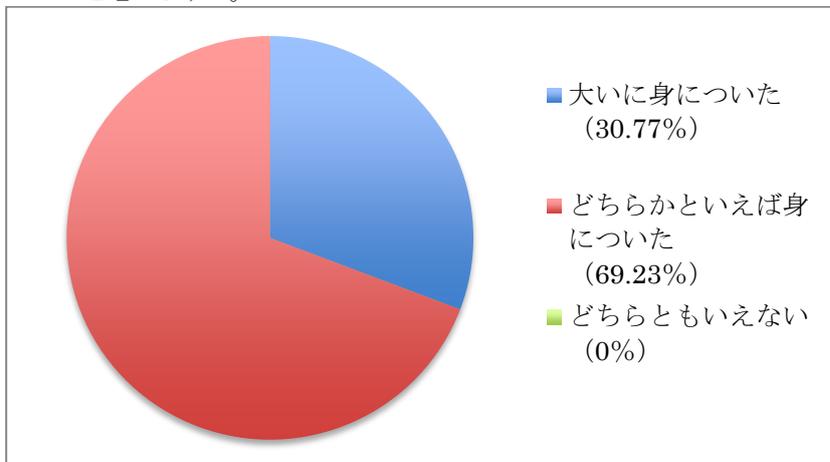
「深い学識」について、あなたは2年間の博士課程前期課程において、どの程度身についたと思いますか。



「高度の専門知識」について、あなたは2年間の士課程前期課程において、どの程度身についたと思いますか。



「課題を設定し解決していく能力」について、あなたは2年間の博士課程前期課程において、どの程度身についたと思いますか。



## II-6. 進路・就職の状況

### II-6-1. 修了後の進路の状況

人文学研究科博士課程前期課程の就職率及び進学率は《資料37》、進路状況は《資料38》の通りである。進路就職先としては教育・研究関係や公務員など、本研究科の教育成果が活かされる職種に就く者もいるが、近年は一般企業に就職する者が増える傾向にある。

《資料37：人文学研究科（博士課程前期課程）修了者の就職率及び進学率》

修了年度	修了者数	進学者	就職者	就職希望者	進学率	就職希望者の就職率
平成24年度	47	12	17	25	25.5%	68.0%
平成25年度	51	17	20	33	33.3%	60.6%
平成26年度	39	13	14	26	35.3%	53.8%
平成27年度	41	11	18	30	26.8%	60.0%
平成28年度	60	20	26	40	33.3%	65.0%
平成29年度	51	14	19	37	27.5%	51.4%

《資料38：人文学研究科修了生（博士課程前期課程）の進路状況》

卒業年度	一般企業	学校教育・ その他教育	国家公務員・ 地方公務員	進学者
平成24年度	10	6	1	11
平成25年度	8	9	2	12
平成26年度	12	1	1	13
平成27年度	9	6	3	11
平成28年度	17	3	6	20
平成29年度	9	4	1	14

人文学研究科博士課程後期課程の修了者の就職先（常勤職）は、《資料39》のようになっている。常勤研究・教育職への就職は昨今の日本において極めて厳しいのが現実であるが、国内外の大学の教員、各種研究機関の研究員、博物館等の学芸員など、相当数の者が専門を生かした職業に就いている。また、《資料40》に示すように日本学術振興会特別研究員（PD）に採用された者も少なくない。また本研究科は、《資料41》のように、各種研究プロジェクトに優秀な大学院生を一定数リサーチアシスタントとして採用しているほか、《資料42》のように、就職難の状況において若手研究者を支援する目的で、標準修業年限内に修了した学生を人文学研究科や文学部の非常勤講師として2年間を限度に採用している。さらに、日本学術振興会の教育改革支援プログラムなどの経費によって学位取得者を学術推進研究員として採用している。このような形で、若手研究者の大学院修了後の研究を支援している。

《資料39：人文学研究科（博士課程後期課程）修了者の進路（常勤職のみ）》

修了年度	大学 教員	各種研究 機関研究 員	博物館・ 美術館等 学芸員	中学校・ 高等学校 教員	日本学術 振興会特 別研究員	本研究科 研究員	その他
平成24年度	6	2	2	1	2	1	5
平成25年度	2	2	0	0	1	3	9
平成26年度	2	1	0	0	1	4	0
平成27年度	0	0	1	0	0	3	0
平成28年度	1	0	0	0	1	3	7
平成28年度	1	0	0	0	1	3	7
平成29年度	1	0	0	0	0	3	8

《資料40：日本学術振興会特別研究員採用数》

年度	PD	DC
平成24年度	3	6
平成25年度	2	6
平成26年度	1	8
平成27年度	3	11
平成28年度	1	10
平成29年度	4	6

《資料41：リサーチアシスタント採用者数》

年度	採用者数	備考
平成24年度	5	本部からの配分のみ
平成25年度	4	本部からの配分のみ
平成26年度	4	本部からの配分のみ
平成27年度	6	本部からの配分のみ
平成28年度	5	本部からの配分のみ
平成29年度	4	本部からの配分のみ

《資料42：標準修業年限内学位論文提出者への支援（新規採用）》

論文提出年度	教育研究分野	職名
平成24年度	言語学 社会学 社会学 地理学	学術推進研究員、非常勤講師 学術推進研究員、非常勤講師 学術推進研究員、非常勤講師 学術推進研究員
平成25年度	言語学 社会学 社会学	学術推進研究員、非常勤講師 学術推進研究員、非常勤講師 学術推進研究員
平成26年度	国文学 日本史	学術研究員、非常勤講師 学術研究員
平成27年度	哲学 哲学 社会学 ヨーロッパ文学 国文学 社会学	非常勤講師 非常勤講師 非常勤講師 非常勤講師 非常勤講師 学術研究員、非常勤講師
平成28年度	社会学 国文学	非常勤講師 学術研究員、非常勤講師
平成29年度	国文学 心理学 社会学 国文学 社会学	非常勤講師 学術研究員 学術研究員 学術研究員、非常勤講師 学術研究員、非常勤講師

### Ⅲ. 研究（文学部・人文学研究科）

#### Ⅲ-1. 文学部・人文学研究科の研究目的と特徴

文学部・人文学研究科は、人文学すなわち人間と文化に関わる学問を扱い、哲学・文学・史学・言語学・行動科学などの人文系諸科学を包括している。以下に文学部・人文学研究科の研究目的、組織構成、研究上の特徴について述べる。

##### Ⅲ-1-1. 研究目的

- 1 文学部・人文学研究科は、人類がこれまで蓄積してきた人間・文化及び社会に関する古典的な文献の原理論的研究並びにフィールドワークを重視した社会文化の動態的分析を通じ、新たな社会的規範及び文化の形成に寄与する研究を行うという目的を掲げている。
- 2 この研究目的を達成するため、現行の中期目標に「卓越した研究成果を世界に発信するとともに、現代社会が抱える様々な課題にも取り組む」ことを定めている。
- 3 また「既存の学術分野の深化・発展と学際的な分野融合領域の開拓だけではなく、未来社会を見据えた重点分野における先端研究を展開し、さらに、将来これらの研究を担う、優れた若手研究者の養成・輩出に努める。」という中期目標に沿って複数の専門分野から成る教育研究組織を活用した共同研究を行うと共に、「多様で広範なレベルで国際・地域社会との連携を強め、教育研究活動の成果を広く社会に還元する。」という中期目標に沿って専門分野の業績を一般向けに解説した著書等で研究成果を広く社会へ発信する。
- 4 以上をとおして、当該分野での国内外の研究水準を引き上げ、さらに人文学のみならず他の専門分野の研究にも貢献することを目指す。

##### Ⅲ-1-2. 組織構成

これらの目的を実現するため、人文学研究科では《資料1》のような組織構成をとっている。

###### 《資料1：組織構成》

専攻	講座	教育研究分野
文化構造	哲学	哲学、倫理学
	文学	国文学（国語学を含む）、中国・韓国文学、英米文学、ヨーロッパ文学
社会動態	史学	日本史学、東洋史学、西洋史学
	知識システム論	心理学、言語学（英語学を含む）、芸術学
	社会文化論	社会学、美術史学、地理学、文化資源論（連携講座：後期課程のみ）

##### Ⅲ-1-3. 研究上の特徴

- 1 文学部・人文学研究科の研究上の特徴は、人文学の専門分野の諸研究をたえず深化させる一方、その多様な研究方法と研究成果を地域社会の文脈に定位しながら現代日本の諸問題にも適用し、学際的かつ国際的に展開される人文学を構築してきた点にある。
- 2 文学部・人文学研究科は「地域連携センター」「海港都市研究センター」「倫理創成研究プロジェクト」「日本文化社会インスティテュート」の4共同研究組織を設置し、様々な共同教育研究プロジェクトを異なる分野の教員が協力して実施することをとおして、単独の分野のみでは不可能な幅広い視野から人文学の研究を推し進めている。
- 3 平成15年度に「地域連携センター」を設置し、日本史学、美術史学、地理学、社会学等の地域連携に関係する諸分野が協力しながら運営している。同センターの設置目的は、地域の歴史文化に関する研究成果を当該地域社会に還元し、地域の歴史的環境を生かした街づくり、里づくりを

支援していくことである。

- 4 海港都市研究、国境を越える人の移動、異文化との交流による社会と文化の変容について研究するための国際的ネットワークを構築するために、平成 17 年に「海港都市研究センター」を設置した。同センターでは、東アジアを中心とした人と文化の接触および新しい文化創造の可能性を検討し、国という分断的な壁を乗り越えて、緩やかな公共空間を構築するための条件とプロセスを解明することを目的としている。
- 5 倫理創成研究プロジェクトを推進して、現代日本で求められている、新しい倫理システムの創成に関する研究を行っている。具体的には「リスク社会の倫理システムの構築」と「多文化共生の倫理システムの構築」の研究をとおして、現代社会の倫理システムを人文学の多様な観点から分析し、科学技術のグローバル化によって特徴づけられる時代に対応した新しい倫理システムの創成を目指している。
- 6 平成 26 年度に共同研究組織を再編し、平成 20 年度に設置された「日本語日本文化教育インスティテュート」を吸収して「日本文化社会インスティテュート」を設置した。日本文化社会インスティテュートは、日本文化、社会に関する教育・研究、および日本における人文学の教育・研究を、国際交流を通じて深化・発展させることを目的とし、人文学研究科のみならず、法学研究科、EU 教育府の先生方の協力を得て、運営されている。日本文化社会インスティテュートは、これまで頭脳循環プロジェクト、日本語日本文化教育プログラム、KOJSP、グローバル人材育成などの関連諸事業を総括するとともに、上記の目的を実現するための、国際的なシンポジウムの企画、新たなプロジェクトなどを実施している。

#### Ⅲ-1-4. 研究をサポートする体制

文学部・人文学研究科は、平成 19 年度に特別研究制度（サバティカル制度）を創設し《資料 2》、教育上・学内行政上、著しい貢献が認められ、当該年度に要職を免れた教員に、半年間、教育・学内行政に関する業務を免除し、研究に専念することを認めている。平成 24 年度から平成 29 年度までの間にこの制度を利用した教員の数は《資料 3》のとおりである。

##### 《資料 2：「特別研究制度に関する申合せ」平成 19 年 6 月 13 日制定》

人文学研究科に勤務する教員の資質向上と学部・大学院教育の発展を図るため、研究に専念する機会を与え、今後の教育研究活動に資する基盤を提供する。この機会を与えられた者は、授業及び教授会、各種委員会等の仕事を免除され、前期（4月～9月）もしくは後期（8月～1月）の半年間、国内外において研究に専念する。

##### <申請資格>

次の条件をすべて満たしていること。

1. 申請時において神戸大学大学院人文学研究科に3年以上在勤の者。
2. 過去5年間において、夏期休業期間（8月、9月）と土曜日・日曜日・祝日を除き同一年度で通算40日以上の海外出張、研修（ただし、集中講義は除く。）、休暇をとっていない者。ただし、病気休暇・産前休暇・産後休暇・忌引は上記の期間（40日）に含めないものとする。勤務年数が5年に満たない者は、神戸大学大学院人文学研究科着任以降の期間を対象とする。
3. 所属専修及び所属教育研究分野から教育上支障ないと承認を受けた者。
4. 特別研究期間開始時に定年まで1年以上の在職期間を残す者。

##### <選考規程>

1. 年度ごとに若干名とする。
2. 教育上及び行政事務上の支障がないものと認定された者に限る。
3. 選考委員会において次の条件を記載順に考慮し候補者を選定する。  
(ア)優れた研究計画を有する者。

(イ)行政事務において貢献度の高い者。

(ウ)「申請資格」2項の条件を長期間満たしている者。

4. 選考委員会は研究科長、副研究科長及び各講座から1名ずつの委員、教務委員(副)、以上9名により構成される。

5. 選考委員会は特別研究期間の前年7月31日に申し込みを締め切り、9月30日までに選考を行った後、その結果を10月1回目の教授会に諮る。

<附則>

1. 特別研究制度を利用しても、その後の授業負担は増えないものとする。

2. この制度が円滑に実施できるよう、必要に応じ、所属専修及び所属教育研究分野に対し非常勤講師枠配分等の措置を講ずるものとする。

3. 特別研究期間中の当該研究者の行政事務(委員会委員等の職務)は他の教員が代替する。

4. 特別研究期間中は国内外での非常勤講師等を禁止する。ただし、選考委員会がやむをえない事情があると認めた場合には、これを許可することがある。

5. 特別研究期間中の制度を利用した者は、研究期間終了後直ちに研究報告書を教授会へ提出する。

附 則

この申合せは、平成19年6月13日から施行する。

附 則

この申合せは、平成27年4月22日から施行する。

#### 《資料3：制度を利用した教員数》

平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
なし	3人	2人	2人	1人	2人

\*平成23年度の2人は、神戸大学の若手教員の海外派遣制度による。

文学部・人文学研究科は人文学の横断的共同研究の活性化のため、平成18年度から「グローバル化時代における価値規範のあり方」を研究主題に、30代の若手教員(15名程度)を中心に、グローバル化時代における価値規範のあり方について、人文学の諸領域を横断する共同研究を継続的に進めている。なお、平成22年度には、このプログラムに対して、昭和報公会からも50万円の奨学寄付金が寄せられている。この取り組みに対して、平成18年度から継続して部局による支援が行われている。平成26年度からは、部局長裁量経費の共同研究組織支援の一環として支援するようになった。以上の施策により、科学研究費研究成果公開促進費に若手研究者が採択されたほか、第11回日本学術振興会賞受賞等、若手教員から数名の受賞者を出している。

## Ⅲ-2. 研究活動の状況

文学部・人文学研究科の教育研究の性格を反映して、研究活動は論文・著書の執筆および研究発表に集中している。また、研究活動にあたっては、科学研究費補助金のみならず、各種の外部資金を積極的に獲得して、研究の水準を向上させている。

### Ⅲ-2-1. 研究実績の状況

本研究科の平成24年度から平成29年度の論文、著書、研究発表の総数は年間平均245.3件である《資料4》。研究業績は多言語で行われ、これは本研究科の特色および研究目的に合致する。研究業績の学術的意義の高さを示すものとして、《資料5》に平成24年度以降の各種学会賞等の受賞者をあげる。

《資料4：研究活動実施状況（平成23～28年度）》

	平成 24年度	平成 25年度	平成 26年度	平成 27年度	平成 28年度	平成 29年度	平均
論文数	79	93	94	108	109	94	96.1
著書数	31	30	36	51	36	32	36.0
研究発表	84	84	152	120	133	106	113.1

《資料5：平成24年度以降の受賞》

年度	受賞者	賞の名称
平成24年度	嘉指信雄 喜多伸一	科学技術社会論・柿内賢信記念賞実践賞 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション賞
平成25年度	石井敬子 濱田麻矢 濱田麻矢	第31回村尾育英学術奨励賞 第10回太田勝洪記念中国学術研究賞 2013年度日本中国学会賞
平成26年度	石井敬子 原口剛	第11回日本学術振興会賞 2013年度日本地理学会賞（優秀論文部門）
平成27年度	大塚淳 大坪庸介 石井敬子	Marjorie Grene Prize (International Society for History, Philosophy, and Social Studies of Biology) 平成27年度優秀若手研究賞 平成27年度神戸大学学長表彰
平成28年度	石井敬子	平成28年度日本心理学会国際賞（奨励賞）
平成29年度	野口泰基	科研費審査委員表彰 神戸大学優秀若手研究賞

研究活動は国際的な場でも積極的に行われている。平成29年度において、論文は4割以上が海外で発表され、海外で出版された著書が4件、研究発表でも国際会議での発表が4割以上を占める《資料6》。国際会議での基調講演・招待講演の件数も平成29年度に19件あり、国際的な活躍が増加しつつある《資料7》。

《資料6：平成26～29年度研究活動内訳》

年度		平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度
論文数	国内	57	60	63	51
	海外	37	48	46	43
著書数	国内	31	43	32	28
	海外	5	8	4	4
研究発表	国内	105	75	83	59
	海外	47	45	50	47

《資料7：国際会議での招待講演・基調講演件数の推移（平成24～29年度）》

年度	平成 24年度	平成 25年度	平成 26年度	平成 27年度	平成 28年度	平成 29年度
件数	3	11	47	16	21	19

Ⅲ-2-2. 学内共同研究組織における研究活動

神戸大学では、平成28年4月に文系・理系という枠にとらわれない先端研究・文理融合研究を推進し、新たな学術領域を開拓・展開するために「先端融合研究環」が設置された。人文学研究科

の教員も、同研究環の「人文・社会科学系融合研究領域」に配置され、先端的・学際的な文理融合研究を推進しつつある。同研究領域で実施されている9の研究プロジェクトの内、「メタ科学技術研究プロジェクト：方法・倫理・政策の総合的研究」では、松田毅教授がプロジェクトリーダーを務め、他に5名の教員が研究分担者・研究参画者となっており、「人文情報の文理融合研究と地域学創出」では、奥村弘教授がプロジェクトリーダーを務め、他に4名の教員が研究分担者・研究参画者となっている。この他、「現代中国研究拠点」では1名が研究分担者として、「移住・多文化・福祉政策に関する国際的研究拠点の形成」では2名が研究参画者として、研究に携わっている。

「メタ科学技術研究プロジェクト：方法・倫理・政策の総合的研究」は、知識基盤社会の土台となる、科学技術を焦点に、探究方法と価値規範、政治経済の相互に関連する不可欠の三つの観点、広義の「科学方法論」「科学技術倫理」「科学技術政治経済学」を統合し、科学技術に関する、人文社会科学の共同研究のスタイルを開発・確立することを志している。28年度は、6回、11名の報告を行い、共同討議を積み重ねた。討議内容は、環境リスク論、サイエンスカフェ等の科学コミュニケーションによる市民のエンパワーメント、公害訴訟をめぐる司法判断と科学の専門知の連関、因果関係や確率事象を扱う科学方法論の現在の状況、経済活動とその法規制の葛藤をめぐる経済学的アプローチの可能性、歴史学における専門知の危機、STS（科学技術社会論）における、科学の公共性と科学者の社会的責任の位置づけに及んだ。平成29年度には、本グループが中心となって文理融合の研究チームを作り申請した「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業（領域開拓プログラム（研究テーマ公募型））」が採択された（詳しい活動内容等については、第Ⅱ部Ⅱ-2 倫理創成プロジェクトの[6] 89頁～90頁を参照。）

日本社会の国際化と地域課題の深刻化に対応する人文学の全国的な知の共有のための研究とそれに基づく社会連携は、現在重要な課題となっている。「人文情報の文理融合研究と地域学創出」では、この課題を深め、新たな人文学のあり方を模索するために、阪神・淡路大震災以来、この課題に対して持続的な研究を進める人文学研究科を拠点として、大学共同利用機関法人人間文化研究機構と協力し、人文系学術情報の全国的な共有化モデル形成とそれを基礎とした地域学の創出を研究目的とする。そのため人文学研究科は、平成28年度に人間文化研究機構に属する国立歴史民俗博物館と、このような研究を具体化する「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」を相互に協力して推進することで合意し協定を結び、国立民族学博物館とは、地域に存在する地域歴史文化資料の発見、保全、活用していく学術的なプロセスを明らかにし、それを地域歴史文化遺産として社会的に価値づける教育研究を進めることで協定を締結した。平成29年度は、この協定を、神戸大学、東北大学、人間文化機構の協定（「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」の連携・協力に関する基本協定）へと引き上げ、大学及び人文系研究機関が共同で取り組む全国的な人文系学術情報共有のプラットフォームを形成した。

### Ⅲ-3. 競争的外部資金の獲得状況

競争的外部資金の獲得状況を《資料8》に示す。平成29年度には124,179千円を獲得している。

《資料8：競争的外部資金の獲得状況(平成24～29年度)》

年度	科研費	共同研究	受託研究	寄附金	その他競争的資金	合計
平成24年度	72,337	43,633	8,884	7,340	1,479	133,673
平成25年度	67,700	24,111	8,884	2,850	1,200	104,745
平成26年度	76,200	24,111	16,992	1,500	16,298	135,101
平成27年度	84,390	8,088	16,033	19,640	31,700	159,851
平成28年度	86,635	7,160	18,016	2,800	23,878	138,489
平成29年度	84,218	7,054	22,673	3,045	7,189	124,179

金額（千円）

### Ⅲ-3-1. 科学研究費助成事業

科学研究費助成事業の申請件数が年間平均 46.8 件である。平成 24 年度から平成 29 年度までの獲得件数は平均 47.8 件(新規 15.2 件)で獲得額は平均 78,580 千円である。申請件数は平成 24 年度の 34 件に比べ平成 25 年度以降 50 件近くを維持しており、科研費獲得に積極的になったと言える《資料 9》。また平成 26 年度には基盤研究 (S) が 1 件新規採択された。

《資料 9 : 科学研究費助成事業への申請・獲得件数、獲得額に関するデータ》

年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平均
申請件数	34	56	53	49	49	40	46.8
獲得件数 (新規)	49 (12)	45 (13)	43 (17)	51 (19)	50 (14)	49 (16)	47.8 (15.2)
金額(千円)	72,337	67,700	76,200	84,390	86,635	84,218	78,580

### Ⅲ-3-2. 共同研究、受託研究費 の状況

平成 24 年度から平成 29 年度の共同研究、受託研究の推移を《資料 10》に示す。

《資料 10 : 共同研究、受託研究の実施件数及び金額》

年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
共同研究件数	6	2	2	3	1	3
金額(千円)	43,633	24,111	24,111	8,088	7,160	7,054
受託研究件数	7	7	9	6	11	15
金額(千円)	8,884	8,884	16,992	16,033	18,016	22,673

共同研究、その他競争的資金として学術機関や省庁からの研究費は主に日本学術振興会から受入れている。東日本大震災を契機に設立された東北大学災害科学国際研究所や国立国語研究所等からの受入れ実績もある。《資料 11》《資料 12》。

《資料 11 : 文部科学省・日本学術振興会等からの大学改革等補助金 (共同研究) 》

相手方	期 間	題 目	金額 (千円)	
			上段直接経費	下段間接経費
文部科学省	平成 20～22 年度	大学院教育改革プログラム (古典力と対話力を核とする人文学教育—学域横断的教育システムに基づくフュージョンプログラムの開発)	77,871	5,316
	平成 22～24 年度	国際共同に基づく日本研究推進事業 (日本サブカルチャー研究の世界的展開)	17,986	4,269
	平成 24～27 年度	国際化拠点整備事業費補助金 (グローバル人材育成推進事業)	31,710	0 (文学部分)
	平成 28～29 年度	国立大学改革強化推進補助金	14,000	0
日本学術振興会	平成 20～24 年度	若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム [ITP] (東アジアの共生社会構築のための多極的教育研究プログラム)	68,775	0
	平成 21～	若手研究者海外派遣事業・組織的な若手研究者等海外派遣プログラム	46,200	

	24年度	(国際連携プラットフォームによる東アジアの未来を担う若手人文研究者等の育成)	0
	平成25～27年度	若手研究者戦略的海外派遣事業補助金 (頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム事業)	55,212 0
	平成27年度	JSPS サマー・プログラム	159 0
	平成29年度	海外日本語教育インターン(大学連携日本語パートナーズ)派遣プログラム	55 0
国際交流基金	平成24年度	国際交流基金・知的交流会議助成プログラム 「世界マンガ・アニメネットワーク国際会議」	2,140 0
	平成29年度	海外日本語教育インターン(大学連携日本語パートナーズ)派遣プログラム	55 0
神戸市	平成24年度	中国人材育成事業研修生受入 「古代日本における仏教と神道の展開についての諸問題」(方海燕)	600 0
直接経費合計			300,867
間接経費合計			9,585

《資料12：学術機関・省庁からの受入実績(その他競争的外部資金)》

相手方	期間	題目	金額(千円)	
			上段直接経費	下段間接経費
日本学術振興会	平成21～23年度	社会学理論分野に関する学術動向の調査研究	5,991	185
	平成20～22年度	平成20年度二国間交流事業共同研究・セミナー「日仏二社会の珪肺・アスベスト疾患—空間的マッピングと人文学的研究」	6,000	0
	平成26～29年度	社会心理学・神経科学・内分泌学の連携による文化差の遺伝的基盤の解明	12,850	0
	平成29～32年度	生命・環境技術の社会実装に関する先端融合研究—21世紀型参加のビジョンと試行—	1,245	374
科学技術振興機構	平成26～29年度	多世代視覚障害者移動支援システムにおけるAR・VR技術の社会実装	15,275	4,583
海南大学日本語学部	平成24年度	中国人材育成事業研修生受入 「古代日本における仏教と神道の展開についての諸問題」(方海燕)	279	0
東北大学災害科学国際研究所	平成24～25年度	東日本大震災の震災資料の所在調査および収集・保存の手法等に関する検討—宮城県岩沼市をフィールドとして—	2,400	0
国立国語研究所	平成26～29年度	統辞・意味解析情報の付与	2,063	0
津田塾大学	平成26年度	研修員受入	229	0
大阪経済大学	平成27年度	研修員受入	115	0
立命館大学	平成27年度	研修員受入	57	0

九州産業大学	平成 28 年 度	研修員受入	115 0
直接経費合計			46,619
間接経費合計			5,142

平成 24 年度以降に地方自治体・民間企業との間で実施した受託研究は《資料 13》のとおりである。特に日本史学教育研究分野で自治体からの研究費等の受入れが顕著である。

《資料 13：地方自治体・民間からの受入実績（受託研究）》

相手方	期 間	題 目	金額（千円）	
			上段直接経費	下段間接経費
自治体 関 係	三田市	平成 26 年 度	旧三田藩主九鬼家資料の総合調査	230 1
	(財)神戸都市問 題研究所 (神戸市文書館)	平成 18～29 年度	歴史資料の公開に関する研究	16,765 1,677
	丹波市	平成 22 年 度	丹波市内古文書等歴史資料調査	7,523 0
	加西市	平成 20～22 年度	鶴野飛行場関係歴史遺産基礎調査	1,535 0
	福崎町	平成 22～23 年度	①福崎町の地域歴史遺産掘り起こし ②大庄屋三木家住宅の活用案および改修	2,850 150
	小野市	平成 22～26 年度	小野市下東条地区地域歴史調査	1,500 0
	養父市	平成 22 年 度	大規模史料群（明延鋌山資料）の詳細調査	496 0
	明石市	平成 23 年 度	明石藩家老関係資料目録作成業務委託	1,400 0
	朝来市	平成 22～23 年度	石見銀山と生野銀山との共同研究に関する中近世史の 調査研究および歴史資料の保存活用についての研究	600 0
	灘区役所	平成 23 年 度	「麻耶道のとおる村の歴史」関係資料調査および講演会 開催事業	600 0
	朝来市	平成 24～26 年度	朝来市枚田家文書を中心とした史料調査研究	1,500 0
	明石市	平成 24～25 年度	明石藩土黒田家関連資料調査・補修	3,100 0
	明石市	平成 26～29 年度	明石藩関連資料調査・公開業務	6,300 0
	明石市	平成 26～29 年度	明石市における地域史料の調査研究業務委託	6,100 0
	明石市	平成 29 年 度	横河家関連資料調査・公開業務委託	1,000 0
福崎町	平成 24～29 年度	福崎町の地域歴史遺産掘り起こしおよび大庄屋三木家 住宅活用案の作成等	9,000 0	

福崎町	平成 29 年 度	三木家住宅民俗資料調査	1,050 0	
丹波市	平成 24～29 年度	兵庫県丹波市における地域資源としての歴史文化遺産 (古文書等)の調査および成果の刊行	11,340 0	
三木市	平成 26～29 年度	三木市史編さん事業	31,600 0	
小野市	平成 27～28 年度	小野市市場地区地域歴史調査及び地域新聞「新東播」デ ータベース化の研究	600 0	
小野市	平成 29 年 度	小野市小野地区の歴史調査及び伊藤家文書を活用した 小野市の幕末から明治期の歴史の調査研究	300 0	
朝来市	平成 27～29 年度	朝来市石川家文書の史料調査研究並びに山田家文書調 査に係る指導助言	1,500 0	
西脇市	平成 27 年 度	西脇小学校校舎改修基本計画・基本設計等業	6,514 240	
加西市	平成 27 年 度	青野原俘虜収容所調査委託	1,204 0	
神戸市	平成 27～29 年度	神戸村文書の解読(翻刻)に関する研究	1,530 152	
三田市	平成 27～29 年度	旧三田藩主九鬼家資料の総合調査	630 63	
福崎町	平成 27 年 度	辻川界限ジオラマ模型制作	100 0	
加西市	平成 28 年 度	冊子『加西に捕虜がいた頃』ドイツ語翻訳委託	691 0	
加西市	平成 29 年 度	青野原俘虜収容所調査委託	799 0	
加西市	平成 29 年 度	小谷区の文化遺産調査研究委託	1,086 0	
そ の 他	日本電信電話株 式会社コミュニ ケーション科学 基礎研究所	平成 26 年 度	視線一致知覚範囲に関する個体密度および文化差の基 礎検討	180 20
	International Visegrad Fund	平成 29 年 度	Visegrad University Studies Grant	674 0
直接経費合計			120,297	
間接経費合計			2,303	

### Ⅲ-3-2. 奨学寄附金の受け入れ

人文学研究科・文学部が財団・団体からの受け入れた奨学寄附金に関する平成 24 年度から平成 29 年度の金額・内容は《資料 14》のとおりであり、平成 24 年度から平成 29 年度の受け入れの推移は、《資料 15》のとおりである。

《資料 14：財団・団体からの奨学寄付金・助成金の受入件数及び金額》

年度	助成団体名等	寄付金名称	寄附目的	寄附金額
平成 24 年度	公益財団法人稲盛財団	稲盛財団研究助成金	ポスト・モンゴル期西アジアの国際関係に関する基礎的研究：マムルーク朝・ティムール朝関係を中心に	1,000,000
	(財)三菱財団	三菱財団助成金	コータン仏教史の好古・美術史学的研究に対する研究助成	350,000
	日本心理学会	日本心理学会「国際学会シンポジウム企画補助金」	第30回国際心理学会議において、シンポジウム“Cultural/linguistic specifications of cognitive functions for communication”を開催するため	720,000
	(財)三菱財団	三菱財団助成金	「鉱山地域社会史確立のための基礎的研究—生野銀山石川家の分析を中心に—」に対する研究助成	800,000
	公益財団法人JFE21世紀財団	JFE21世紀財団アジア歴史研究助成	「近世ユーラシア大陸の威信言語研究にもとづく、「東洋学」の再構築」に関する研究助成	2,140,000
	公益財団法人倶進会	科学技術社会論・柿内賢信記念賞研究助成	放射性廃棄物の軍事利用である劣化ウラン弾を巡る科学的・政治的・法的問題の再検討	400,000
	特例民法法人上廣倫理財団	上廣倫理財団研究助成金	学術研究のため	600,000
	公益財団法人 中山隼雄科学技術文化財団	中山財団研究助成金	触地雷上の宝探しゲームによる中途失明者の自律移動支援用具に対する親和性の向上	1,330,000
平成 25 年度	公益財団法人村田学術振興財団	村田学術振興財団研究助成金	集団間葛藤から和解へ：謝罪と許しの心理メカニズムに関する実証研究に対する研究助成	1,200,000
	メトロポリタン東洋美術研究センター	メトロポリタン東洋美術研究センター助成金	「江戸時代後期から明治時代初期の光琳蒔絵に関する考察」研究にかかる研究助成	250,000
	公益財団法人上廣倫理財団	上廣倫理財団研究助成金	学術研究のため	600,000
	公益財団法人中山隼雄科学技術文化財団	中山財団研究助成金	人文学研究に対する助成	800,000
平成 26 年度	クリタ水・環境科学振興財団	クリタ水・環境科学振興財団助成金	研究への助成	600,000
	株式会社ユーハイム 有限会社ジャーマンホームベ ーカ-エッチフロイントリブ 株式会社ケーニヒス クローネ	「第一次世界大戦開戦100年と青野原捕虜収容所」奨学寄付金	「第一次世界大戦開戦100年と青野原捕虜収容所」に対する研究助成	300,000
	一般財団法人地域地盤環境研究所	遺跡分布情報の整理	先史時代の遺跡分布情報への助成	300,000
	出光文化福祉財団調査研究事業助成	出光文化福祉財団調査研究事業助成	後白河院政期における天平絵画及び唐宋絵画の受容に関する調査研究に対す	300,000

			る研究助成	
平成 27 年度	マイアミ大学教授 Michael McCullough	ヒトと赦しの進化心理 学に関する研究助成	マイアミ大学の研究責任者 Michael McCullough からの研究分担のため	17, 440, 164
	公益財団法人鹿島美 術財団	鹿島美術財団美術に関 する調査研究の助成	後白河院政期における天平絵画及び唐 宋絵画の受容に関する調査研究に対す る研究助成	540, 000
	公益財団法人村田学 術振興財団	公益財団法人村田学術 振興財団 助成金	カリフ制の歴史と歴史叙述：マムルー ク朝時代を中心に	1, 110, 000
	出光文化福祉財団調 査研究事業助成	出光文化福祉財団調査 研究事業助成	「地獄草子並びに関連諸作品の調査・ 研究」に対する研究助成	550, 000
平成 28 年度	公益財団法人仏教美 術研究上野記念財団	公益財団法人仏教美術 研究上野記念財団若手 研究者研究奨励金	研究助成	100, 000
	公益財団法人三菱財 団	公益財団法人三菱財団 助成金	ムガル帝国時代南アジア社会の歴史文 献学的研究：『アーイーニ・アクバリ ー』を中心として	1, 900, 000
	公益財団法人出光文 化福祉財団	公益財団法人出光文化 福祉財団調査研究事業 助成	「第二次世界大戦前後の欧米における 東洋美術展覧会に関する研究－中国と 日本を中心に」に対する研究助成	400, 000
	一般社団法人信託協 会	一般社団法人信託協会 助成金	東アラブ圏におけるワクフ（財産信託） 制度史の古文書学的研究	400, 000
平成 29 年度	一般社団法人信託協 会	一般社団法人信託協会 助成金	東アラブ圏におけるワクフ（財産信託） 制度史の古文書学的研究【追加配分】	250, 000
	三井住友信託銀行	公益信託 福原心理教 育研究振興基金	研究助成のため	600, 000
	公益財団法人JFE21 世 紀財団	公益財団法人 JFE21 世 紀財団アジア歴史研究 助成	ポスト・モンゴル期アラビア語歴史叙 述の地域性と普遍性	1, 500, 000
	国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館総 合資料学奨励研究（公 募型）	1689 年「堺大絵図」に盛られた土地区 画と戦前の比較 ー空中写真を検討材 料にしてー	695, 000

《資料 15：奨学寄付金・助成金の推移》

	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
件数	8	4	4	4	4	4
金額（千円）	7, 340	2, 850	1, 500	19, 640	2, 800	3, 045

## 第2部

### I. 外部資金による教育研究プログラム等の活動

#### I-1. 運営費交付金機能強化経費：実践型グローバル人材育成事業 「日本語教育・日本研究を中心とした実践型グローバル人材育成事業」

##### [1]本事業について

平成 29 年度概算要求において、機能強化経費（機能強化促進分）として文学部・人文学研究科にも予算が配分され、平成 29 年度から 33 年度まで「日本語教育・日本研究を中心とした実践型グローバル人材育成事業」を実施することになった。「グローバル人材育成」は神戸大学の機能強化の柱のひとつであるが、文学部・人文学研究科は、「神戸オックスフォード日本学プログラム(KOJSP)」（オックスフォード大学東洋学部日本語専攻の2年生全員が文学部で1年間学ぶ、ユニット受け入れ型のプログラム）や、日本学術振興会「頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム」（以下、「頭脳循環プログラム」と略記する）に採択された「国際共同による日本研究の革新—海外の日本研究機関との連携による若手研究者養成」事業（25年度～27年度）などによって挙げた成果をもとに、日本語教育と日本研究に関わる部分で大学の機能強化に貢献することが求められている。

##### [2]平成 29 年度の取り組み

###### (1)日本語教育

###### ①「神戸オックスフォード日本学プログラム(KOJSP)」の充実

- ・ KOJSP 生（第5期生が平成29年8月に修了、10月に第6期生が来日）に対してきめ細かいケアを行うため、専任の特命助教を1名、4月から1年間雇用した。
- ・ 平成30年3月にKOJSPアドヴァイザリーボード委員の教員4名がオックスフォード大学東洋学部を訪問し、教育内容について意見交換を行い、さらに30年10月から受け入れ予定の第7期生について情報を得た。
- ・ 広報用に、KOJSP第1期生から第5期生までの活動をまとめたパンフレットを作成した。

###### ②留学生向けアカデミック・ライティング授業の開設・運営

- ・ 留学生向け日本語アカデミック・ライティングの授業と、チュートリアル形式で日本語論文・レポート作成の支援が行えるような日本人学生を養成するための授業として、下記のような科目を新設した。いずれも正式には大学院博士課程前期課程の学生を対象とした授業だが、実際には学部生や博士課程後期課程の学生、研究生等も多数参加した。

授業科目	単位数
日本語アカデミック・ライティング	2単位
日本語学術文章の作成と指導	2単位

- ・ アカデミック・ライティング授業を新設するにあたり、6月14日に早稲田大学ライティング・センター長の佐渡島紗織教授を招聘して、チューターと教員に対するFDを行った。

###### ③「日本語日本文化教育プログラム」（主に博士課程前期課程の学生を対象として、海外の教育機関等で日本語日本文化教育を担う人材を養成するための教育プログラム）の充実

- ・ 以下の2科目を追加開講することにより、プログラムの充実を図った。

授業科目	単位数
日本語教育学	2単位
日本語教育内容論	2単位

###### ④日本語日本文化教育に関する海外インターンシップの実施

- ・ 人文学研究科では「日本語日本文化教育プログラム」修了者（あるいは修了見込み者）に海外教育機関でのインターンシップの機会を与え、真に国際通用性のあるグローバル人材を養成することを目標として、平成 22 年度以降、日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」と「頭脳循環プログラム」によって中・長期（約 2 ヶ月～1 年）に渡って毎年 1 名の大学院生もしくは PD をハンブルク大学（ドイツ）に送り出してきた。27 年度以降は学内予算を得て、オックスフォード大学（イギリス）、トリーア大学（ドイツ）、ディミトリア・カンテミル・キリスト教大学（ルーマニア）、北京外国語大学（中国）にも各 1 名、短期間（2 週間～1 ヶ月）ないし長期（1 セメスター）派遣することが可能になり、毎年 4～5 名の大学院生がインターンシップを行っている。
- ・ 29 年度は学内予算、国際交流基金からの補助と機能強化経費を組み合わせ、以下のような形で大学院生 4 名を海外大学に派遣した。なお、ハンブルク大学でのインターンシップに関しては、ハンブルク大学が寮費を全額負担してくれている。

派遣期間	派遣者	派遣先
平成 29 年 10 月 1 日～ 平成 30 年 3 月 1 日	博士課程後期課程 1 年	ハンブルク大学
平成 29 年 11 月 3 日～ 平成 29 年 11 月 28 日	博士課程前期課程 1 年	トリーア大学
平成 30 年 2 月 17 日～ 平成 30 年 3 月 11 日	博士課程前期課程 3 年	オックスフォード大学
平成 30 年 3 月 8 日～ 平成 30 年 3 月 30 日	博士課程前期課程 1 年	北京外国語大学

- ・ オックスフォード大学でインターンシップを行った学生は、平成 30 年 3 月で北京外国語大学とのダブルディグリー・プログラムを修了し（修了するのに 3 年かかっているのはそのためである）、平成 30 年 9 月から對外経済貿易大学（中国）で日本語講師として就職することが決まっている。

⑤ 「現代日本プログラム」（協定校からの交換留学生を対象として、英語で行われる日本の文化・社会・科学技術に関する全学的な教育プログラム）の充実

- ・ さまざまな形で来日中の海外大学の研究者に、文学部・人文学研究科が提供している科目のうち、オムニバス授業になっているものに参加してもらった形で、「現代日本プログラム」の充実を図った。多様性に富む授業となり、履修生には非常に好評だった。29 年度にオムニバス授業に参加してくれた海外の研究者（機能強化経費が財源となっているものに限る）は以下のとおり。

氏名	所属
Eva Kaminski 准教授	Jagiellonian University, Faculty of International and Political Studies (ポーランド)
Simon Kaner 教授	University of East Anglia, Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures (イギリス)
Ljiljana Markovic 教授	University of Belgrade, Faculty of Philology (セルビア)
Griseldis Kirsch 准教授	University of London, SOAS (イギリス)
Joy Hendry 名誉教授	Oxford Brooks University, Department of Social Sciences (イギリス)
Akos Kopper 准教授	ELTE University, Institute of Politics and International Relations (ハンガリー)

- ・ 「グローバル人文学プログラム」（文科省「グローバル人材育成推進事業」（平成 24 年採択）により文学部・人文学研究科で展開している教育プログラム）の科目として、以下の 2 科目を機能強化経費により開講した。

授業科目	単位数

グローバル・アクティブ・ラーニング in 広島	1 単位
グローバル・アクティブ・ラーニング in 淡路島	1 単位

- ・ 「グローバル・アクティブ・ラーニング in 広島」は従来「神戸オックスフォード日本学プログラム」の一環としても開講されてきたもので、29年度はオックスフォード生10名を含む留学生18名（国籍はイギリス、中国、スロヴァキア、ロシア、ドイツ、オーストリア、フランス）に加え、日本人学生6名の計24名が参加した。

## (2) 日本研究

### ① 「頭脳循環プログラム」型（海外の研究者と共同研究を行いながら、その中で大学院生を含む若手研究者を育てていく方式）の国際的・学際的な日本研究の推進

- ・ 平成29年6月23日にポーツマス大学から研究者6名を招聘し、人文学研究科海港都市研究センター主催で国際ワークショップ「交差する海港都市」を開催した。詳細は80頁を参照。
- ・ 平成29年8月5日・6日の両日、人文学研究科において国際研究集会「New Perspectives in Japanese Studies」を開催した。この集会には「頭脳循環プログラム」の連携パートナー機関である欧州3大学からそれぞれ、当時の受入代表者だったビヤーク・フレレスヴィック教授（オックスフォード大学、言語学・日本語音韻論）、ボナヴェントゥーラ・ルペルティ教授（ヴェネツィア大学、日本文学・比較演劇論）、ヨルク・クヴェンツァー教授（ハンブルク大学、日本文学・日本精神史）が基調報告者およびゲストスピーカーとして参加した。また、「頭脳循環プログラム」の派遣者およびその他の若手研究者も多数、報告者として参加した。プログラムは以下のとおり。

## NEW PERSPECTIVES IN JAPANESE STUDIES

August 5th~6th 2017

Graduate School of Humanities, Kobe University

### August 5th

(B132)

12:30~12:45 Greetings & project explanation (Hiroko Masumoto, Kobe University)

12:50~13:50 **Bjarke Frellesvig** (*University of Oxford*) — Keynote speech

### Session A (B132)

14:00~14:30 Kiyomitsu Yui (*Kobe University*)

‘Lost and Found’ in Translation in Pop Culture and Visuality

14:35~15:05 Anna Bordilovskaya (*Rikkyo University*)

English Influence on Contemporary Japanese: Multi-Layered Lexicon and Potential for Global English Words

### 15: 05~15:20 Coffee break

15:20~15:50 Adrian O. Tamas (*Kobe University*)

Trendsetters and Masculinity in Postwar Japan

15:55~16:25 Tsang Ka Yan (*Kobe University*)

New Type of Couple in Hong Kong and Japan-Focusing on Stay-home Dad

### Session B (Student hall)

14:00~14:30 Mihaela Sighinas (*Kobe University*)

Japanese Travel Culture: on meibutsu and meisho

14:35~15:05 Jennifer Coates (*Kyoto University*)

Incorporating the Audiences' Perspective: Reception Studies and Grounded Theory in Japanese Cinema

### 15: 05~15:20 Coffee break

15:20~15:50 Shin Okawachi (*Kobe University*)

How are global risks shared? A case study of an anti-nuclear artist

15:55~16:25 Goran Vaage (*Kobe College*)

The state of the art in humour research — implications for Japanese studies

**17:30~ Barbecue party**

### August 6th

(B132)

10:45~11:30 **Bonaventura Ruperti** (*University of Venice*) 日本の舞踊 — 歌、舞、身体 —

**11:30~13:00 Lunch**

#### **Session A** (B132)

13:00~13:30 Giulio Bertelli (*Osaka University*)

An unknown world — Italian diplomats and traders in Japan between the Bakumatsu and early Meiji era

13:35~14:05 Roman Pasca (*Kanda University of International Studies*)

“To Whom Would Shakyamuni Preach?” : A Critique of Buddhism in Tokugawa Intellectual History

**14:05~14:20 Coffee break**

14:20~14:55 Yoshihiko Shiratori (*Kobe University*)

University Reform in Japan : a Historical and Comparative Perspective

15:00~15:30 Kiyomitsu Yui (*Kobe University*)

Globalization of higher education and regional responses

#### **Session B** (Student hall)

13:00~13:30 Peter Szalay (*Osaka University*)

Debunking Beauty — Online Discussions of Celebrity Cosmetic Surgeries

13:35~14:05 Alvaro Hernandez-Hernandez (*International Research Center for Japanese Studies*)

Between the amateur and the commercial world: A short introduction to the Vocaloid movement in Japan

**14:05~14:20 Coffee break**

14:20~14:55 Carmen Sapunaru Tamas (*Kobe University*)

Ucchimasho! Sacred Entertainment at Tenjin Matsuri

15:00~15:30 Andrea de Antoni (*Ritsumeikan University*)

Give up The Ghost (of Japan) Steps to a Comparative Ecology of Spirits in Contemporary Japan and Italy

(B132)

15:35~16:20 **Jörg Quenzer** (*University of Hamburg*) — Guest lecture

16:20~16:35 Closing session

- ・ 平成29年11月13日・14日の両日、中山大學（中国）で開催された第13回海港都市国際会議で発表するために、大学院生を含む若手研究者3名を派遣した。詳細は80頁を参照。
- ・ 「頭脳循環プログラム」事業により格段に深まった人文学研究科と欧州3大学（オックスフォード大学、ヴェネツィア大学、ハンブルク大学）との関係を維持しつつ、欧州における研究ネットワークの拡大を図るために、近年新たに学術交流協定を結んだトリーア大学とベオグラード大学（いずれも大規模でレベルの高い日本学科を擁する大学である）からも研究者を招いて平成29年11月18日と19日の両日、神戸大学ブリュッセル・オフィスにおいてワークショップ「New Perspectives in Japanese Studies Part 2」を開催した。このワークショップには、神戸大学側からは本事業の代表者である増本浩子教授（ドイツ文学）の他、油井清光教授（社会学）、

大橋完太郎准教授（芸術学）、中畑寛之准教授（フランス文学）、石山裕慈准教授（国語学）、大学院生の大川内晋（社会学、「頭脳循環プログラム」でヴェネツィア大学に派遣）が参加した。欧州5大学からの参加者は以下のとおりである。

オックスフォード大学：ビヤーク・フレスヴィック教授（言語学）、

マリア・テレギナ（言語学、大学院生）

ハンブルク大学：ヨルク・クヴェンツァー教授（日本文学・日本精神史）、

レオ・メッサーシュミット（日本思想、大学院生）

ヴェネツィア大学：マルコ・ザッパ講師（国際政治学）

トリーア大学：アンドレアス・レーゲルスベルガー教授（日本文学）

ベオグラード大学：ダリボル・クリチュコビッチ講師（日本思想）

ワークショップでは「学際性」をキーワードに、日本の文学や文化、思想、言語、社会にアプローチする研究発表を参加者全員が行い、活発に議論を行った後、今後この欧州5大学と神戸大学の間で日本研究に関してどのような国際共同研究のテーマがあり得るか、ブレインストーミング的に話し合った。このワークショップ開催にあたっては学内の競争的資金も獲得した。

## ②ユニット交流（海外の大学との、専修等ユニット単位での学生・教員の学術交流）の促進、海外大学の日本学科との学術交流

- ・平成29年7月7日、トリーア大学（ドイツ）において嘉指信雄教授（倫理学）が主に日本学科の学生を対象に“Transmigration of Symbols in Hiroshima and Fukushima: Literary Engagements with the Ambiguity of Nature”というタイトルで講演を行った。
- ・平成29年11月16日・17日の2日間、パリ第10ナンテール大学（フランス）において、パリに留学中もしくは短期滞在中のPDや学生を集めてワークショップを開催し、パリ第10ナンテール大学の教員・学生と研究交流を行う機会を得た。開催にあたってはアンヌ・ソヴァニャルグ教授（美学・芸術哲学）とティエリー・オケ教授（科学哲学・生命哲学）の協力を得て、大橋完太郎准教授（芸術学）と中畑寛之准教授（フランス文学）が企画・運営にあたった。ワークショップで研究発表を行ったのは、増田展大（芸術学、PD）、亀田晃輔（美術史、大学院生）、木村薫（フランス文学、大学院生）、中山恵理子（芸術学、大学院生）の4名である。パリ第10ナンテール大学からも4名の学生が参加した。
- ・平成30年2月4日に国際交流基金ブダペスト日本文化センターで開催された中東欧PhDワークショップにおいて、カレル大学（チェコ）をはじめとする中東欧諸国の大学から選抜された博士課程後期課程の学生を対象に、増記隆介准教授が平安時代の仏画に関する講義を行った。また、翌5日にはELTE大学（ハンガリー）においても同様の講義を行った。

## I-2. 科学研究費補助金基盤研究（S）（研究代表者：奥村弘、課題番号：26220403） 「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて—」

2014年度からスタートした上記テーマの新規科学研究は、2013年度までの科学研究「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」の成果を踏まえ、東日本大震災後の新たな課題（津波、放射能被害など）及び海溝型地震への対応をさらに進め、「災害文化」形成に資する地域歴史資料学を確立することを目的としている。

2017年12月に日本学術振興会の研究進捗評価（中間評価）をうけ、人文科学系の7件の評価対象中、唯一A+評価を受けるなど、着実に研究成果を積み重ねている。

2017年度は、次の5回の地域歴史資料学研究会を開催した（2017年3月以降）。第9回（震災アーカイブに関する国際研究会、2017年3月10日、於神戸大学震災文庫）、第10回（災害資料の公開に関する研究会、6月15日、於神戸大学自然系図書館）、第11回（韓国アーカイブ研究会、10月12日、於神戸大学文学部）、第12回（日伊の文化財情報システムに関する国際研究会、11月13日、於神戸大学文学部）、第13回（被災地図書館との震災資料情報交換会、2018年1月29日、於神戸大学社会系図書館）。また、4月8日には科研グループ研究会を神戸大学文学部にて開催した。

また、本年度は本科研主催による次の2つの公開シンポジウムを開催した。①国際シンポジウム「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立をめざして」（11月11～12日、於神戸大学統合研究拠点コンベンションホール）では、被災歴史資料・災害資料の保全・活用をめぐる東日本大震災以降の実践的研究を踏まえつつ、国内外における研究成果と課題について議論した。2日間で延べ約160名が参加した。②被災地フォーラム新潟（12月2日、新潟大学）では、中越地震以降の民俗資料を含む多様な資料保全の実践や災害史研究の蓄積を踏まえて、東日本大震災以降の資料保全と歴史研究の課題等について議論した。

このほか、本科研グループとして次のシンポジウム及び研修会に共催または協力した。共催としては、①ふくしま史料ネットシンポジウム「ふくしまの未来へつなぐ、伝える」（6月17日、於郡山市民プラザ）、②第4回全国史料ネット研究交流集会（1月20～21日、於ノートルダム清心女子大学）、③第16回歴史文化をめぐる地域連携協議会（1月28日、於神戸大学瀧川記念学術交流会館）。協力としては、兵庫県文化遺産防災研修会（7月5日、於神戸大学農学部）、兵庫県文化遺産防災研修会 in 播磨西（11月28日、於城郭研究センター）など。

被災資料・歴史資料の調査保全としては、歴史資料ネットワークと協力し、九州北部豪雨災害の情報収集及び共有につとめたほか、東日本大震災で津波被害をうけた岩手県大船渡市S家資料の整理作業に協力した。また、今年度の新たな展開としては、伊方原発関係資料の保存・整理作業を愛媛資料ネットと協力して進めた。

その他の研究活動としては、阪神・淡路大震災時の資料保全活動のデータ整理を進めたほか、附属図書館で開催された震災展示に協力した。また、2004年の台風被害で水損した地域資料の修復ワークショップを大阪芸大短期大学部伊丹学舎にて実施した。

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	26220403	研究期間	平成26年度～平成30年度
研究課題名	災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて—	研究代表者 (所属・職) (平成29年3月現在)	奥村 弘（神戸大学・大学院人文学研究科・教授）

【平成29年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
○	A+ 当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
	A 当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A- 当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B 当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C 当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
<p>(意見等)</p> <p>本研究は、近年多発している大規模災害に対する地域歴史資料学の実践的方法論の確立に向け、市民参加型の歴史資料ネットワークの構築と活用という新しい視点から期待以上の大きな成果を上げており、文化財防災体制の構築にも大きな進展をもたらしている。とりわけ2015年の関東・東北豪雨災害（常陸水害）や2016年の熊本地震では、これまでの知見を提供するなど実践的研究の成果が明らかになっている。今後は、地域社会が災害を「記憶」し、災害に対応し得る強い「災害文化」を形成するという方法論の完成をとおして、地域歴史資料学と災害史研究の融合を図り、想定し得る海溝型地震や広域災害等への実践的対応を提示することを期待したい。また、イタリアの文化財防災等から得た知見をもとに、日本からの国際的発信も積極的に行うことが望まれる。</p>	

## II. 部局内センター等の活動

### II-1. 海港都市研究センター

2017年度、海港都市研究センター（以下、海港センターと略）では、大学院人文学研究科における共通科目授業の開講、上海社会科学院で行われた国際海港都市文化フォーラムへの参加、中山大学でのシンポジウム、ポーツマス大学との共同ワークショップ、韓国海洋大学へのシンポジウム参加、紀要『海港都市研究』第13号の刊行などを行った。

#### [1] 人文学研究科共通科目の開講

前期（4月～7月）の毎週月曜5限に、博士課程前期課程の大学院生向けの「海港都市研究交流演習」および博士課程後期課程の大学院生向けの「海港都市研究交流企画演習」を開講した。（実際の授業名は、昨年度以降のクォーター制の導入により、さらに枝分かれしているが、本質的な事柄ではないので省略する）。

受講生は計10名前後で、昨年度に引き続き、「移民」「難民」さらに「戦争」に関わるテーマを受講生自身が選択し、関連するテキストについて報告しつつ分析検討を加え、受講生全員で討論する、という形で行った。また、6月第4週には、不法移民と少年の交流を扱った、ダルデンヌ兄弟（ベルギー）監督の映画『イゴールの約束』（1997年）をめぐって討論を行った。

受講生の半分は留学生で、報告のレベルは一定ではなかったが、討論を通じて、それぞれの問題意識を一定程度深めることはできたと思われる。

#### [2] 上海国際海港都市文化フォーラム（第7回 WCMCI 学術年会）への参加

5月18日から20日にかけて、上海国際海港都市文化フォーラム及び第七回 WCMCI（The World committee of Maritime Cultural Institutes）が上海社会科学院で行われた。神戸大学以外の主な参加機関は以下の通り。韓国海洋大学、木浦大学、長崎大学、台湾海洋大学、淡江大学、台北市立大学、中国海洋大学、厦門大学、中山大学、華東師範大学、上海海洋大学。神戸大学からは藤田裕嗣、樋口大祐、濱田麻矢の三人が参加した。

19日はバスで浦東新区までゆき、まずは上海航海博物館を見学、その後上海海事大学と上海海洋大学の二校をめぐったが、とくに前者の大学博物館は海洋史の展示が充実していた。

20日は終日上海科学院で海港都市文化フォーラムに参加した。なお、同日に WCMCI 協議会が行われ、韓国海洋大学、長崎大学、上海社会科学院、中国海洋大学、中山大学、厦門大学、台湾中央研究院、木浦大学の代表者と一年の活動と今後の予定について話しあい、2018年3月に釜山の韓国海洋大学で第8回の WCMCI を開催することを確認した。

#### [3] ポーツマス大学 PTUC との交流プロジェクト

6月23日から26日にかけて、概算要求機能強化経費の援助を受け、英国ポーツマス大学 PTUC（Port Towns and Urban Cultures）プロジェクトの研究者4名を神戸大学に迎え、研究交流を行った。まず23日（金）午後、「交差する海港都市－神戸、ポーツマス、その歴史と可能性－」と題する国際ワークショップを開催し、神戸側4名（本学教員の奥村弘、樋口大祐のほか、兵庫県立大学の園田節子氏、神戸市外国語大学の石高志氏）、およびポーツマス側4名（Brad Beaven 氏、Robert James 氏、Karl Bell 氏、Melanie Bassett 氏）が報告を行った。

つづいて24日（土）及び25日（日）は、神戸市内のエクスカージョンを行い、海港都市神戸の特色をよく現している空間や施設を巡検した。

そして、最終日の26日（月）は、午前中、神戸市文書館で Kobe Chronicle 等の英字資料に接し、ポーツマス側研究者4名のそれぞれの関心に関わる資料の所在と分量等に関する調査を行い、多くの

収穫を得た。そして、午後は神戸大学震災文庫訪問の後、人文学研究科で総括ミーティングを行い、今後の共同研究の方向性等について意見交換した。

#### [4] 中山大学「海のシルクロードと海港都市の変遷」シンポジウムへの参加

韓国海洋大学を中心とする WCMCI（世界海事史学会国際大会）とは別に、木浦大学、韓国海洋大学、台湾大学、中山大学、長崎大学などをパートナーとして持ち回りで開催する海港都市国際会議の第 13 回目にあたる会議が、11 月 13 日、14 日の二日間にわたって中山大学で行われた。詳細はシンポ報告に譲るが、この会議には学術研究員の藤岡達磨、博士課程後期過程院生の大川内晋、竇新光が参加し、英語で報告を行った。

同時に行われた第 13 回海港都市国際シンポジウム所長会議には藤岡が出席し、2018 年度世界海洋文化研究所協議会代表者会議及び国際学術大会は 2018 年 3 月 30 日と 31 日に韓国海洋大学で開かれることを確認し、以降は WCMCI 活動と海港都市国際シンポジウムを共同開催とすることが決められた。2019 年度については 4 月ないしは 5 月に厦門大学で、2020 年度については中国海洋大学で開催予定である。

なお、このシンポジウムへの参加も、概算要求機能強化経費によって実現した。

#### [5] 『海港都市研究』第 13 号の刊行

2018 年 3 月、当センターの紀要『海港都市研究』第 13 号を刊行した。

#### [6] 韓国海洋大学「2018 年度世界海洋文化研究所協議会代表者会議および国際学術大会」への参加

3 月 30 日及び 31 日に韓国海洋大学で開催される会議では「“海港都市文化交渉学”十年の回顧と展望」をテーマに、10 年にわたって行われてきた韓国海洋大学を中心とした海港都市研究に一つの区切りをつけるシンポジウムが行われた。神戸大学からは佐々木衛名誉教授が基調講演を行い、奥村弘、高田京比子が学術報告を行った。また濱田麻矢は代表者ラウンドテーブルで本センターの活動について報告を行った。センターからは樋口大祐、佐々木佑が参加して韓国海洋大学他の参加校と今後の研究交流について打ち合わせを行った。

## II-2. 地域連携センター

地域連携センター活動報告

(2018 年 1 月現在)

大学院人文学研究科（文学部）では、平成 14 年（2002）から、「歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業」を開始した。同年 11 月には地域連携研究員制度を創設し、翌年 1 月には、構内に「神戸大学文学部地域連携センター」を設置した（平成 19 年の改組にもとづき、現在は人文学研究科地域連携センターと改称）。

これは阪神・淡路大震災以来の地域貢献活動を踏まえ、大学が県内各地の歴史資料の保全・活用や歴史遺産を活かしたまちづくりを、自治体や地域住民と連携して取り組んでいくことを目的とした事業である。

現在、連携事業は多岐にわたっているが、おおむね次の四つの分野で事業を進めている。

1. 歴史文化を活かしたまちづくり支援と自治体史の編纂協力
2. 歴史資料・災害資料の保全・活用
3. 地域歴史遺産を活用できる人材の育成
4. 地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

また、平成 26 年度から始まった科学研究費補助金基盤研究（S）「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて—」（研究代表者・奥村弘）のプロジェクトに加えて、平成 27 年度より地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）「地域創生に伝える実践力養

成ひょうご神戸プラットフォーム」のプロジェクトのうち「歴史と文化」領域に関する事業が、当センターを拠点として展開されている。

このほか年報『LINK【地域・大学・文化】』を刊行するなど、研究および研究成果の公表もおこなっている。

以下、個別事業ごとに今年度の活動の概要を報告する。

(1) 歴史文化を活かしたまちづくり支援と自治体史の編纂協力

①兵庫県との連携事業

a 兵庫県文化遺産防災研修会の開催

- ・[キックオフ研修会] 2017年7月5日(水) (於神大農学研究科B棟101教室) (主催:人文学研究科地域連携センター、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、共催:COC+ひょうご神戸プラットフォーム協議会、協力:歴史資料ネットワーク、科研S「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立」研究グループ(研究代表奥村弘))
- ・[播磨西研修会] 2017年11月28日(火) (於日本城郭研究センター2階大会議室) (主催:人文学研究科地域連携センター、兵庫県教育委員会、共催・協力同上)

b 兵庫県地域創生局地域遺産室との連携

- ・2017年9月12日、地域遺産活用方策検討委員会の第1回会議が開かれ、奥村が座長に就任

c 兵庫県地域創生拠点形成支援事業(園田学園・香美町との連携) ※COC+も関連

- ・2017年6月1日付で補助金交付決定(¥250,000)
- ・6月4日園田学園女子大学香美町サテライトスタジオ開所式に木村ほか出席。その後、7月29~30日、8月25~7日、11月3~4日、12月26~7日に香美町小代地区の同スタジオへ出張、同所保管の旧美方町史編纂関係資料の調査・整理作業、小代地区内の巡検、地域住民との交流を実施。2018年3月に小代地区内で現地成果報告会を実施予定(園田学園と連携)

②神戸市における連携事業

a 神戸市教育委員会との連携事業

- ・神戸村文書の研究と成果の公開事業;神戸市立中央図書館所蔵「神戸村文書」の読解、研究
- ・市民向け古文書講座の開催;2017年11月13日(月)(於こうべまちづくり会館)、11月20日(月)(於同前所)、11月27日(月)(於同前所)、12月2日(土)(於神戸市立中央図書館)

b 財団法人住吉学園(住吉財産区)との連携事業

- ・本住吉神社所蔵文書を中心に翻刻作業および古文書勉強会を実施、併せて西摂の地域史研究を実施
- ・2017年3月30日『阪神・淡路大震災資料集Ⅱ 住吉の記憶「住吉西区と阿彌陀寺」』発行。引き続き阪神大震災関連の聞き取り調査を実施、今年度末に『阪神・淡路大震災資料集Ⅲ』発行予定

③神戸市を中心とする文献資料所在確認調査

- ・神戸大学附属図書館所蔵古文書調査:社会科学系図書館貴重書庫所蔵湯浅家(大黒常是)文書の整理完了、解題とともに目録を図書館HPデータベースへ掲載

④協定に基づく小野市との連携事業

a 小野市小野地区歴史調査

b 伊藤家文書を活用した小野市域の幕末・明治期の歴史研究

c 企画展「小野藩士族が見た西南戦争」会期:2018年2月17日~4月8日(於小野市立好古館)への協力

⑤連携協定に基づく朝来市との連携事業

a 石川家文書整理会の指導・助言

b 生野書院企画展「石川雀翁の世界」への協力

c 奥銀谷自治協議会での山田家文書の展示(3月予定)

d 多々良木地区における区有文書の整理

e 旧和田山町域の歴史資料調査

⑥丹波市における連携事業

- a 連続歴史講座「楽しく学ぶ、丹波の歴史遺産」(共催：丹波市教育委員会)：第1回2017年6月24日(土)(於ハートフルかすが)講師前田結城、第2回7月15日(土)(於氷上住民センター)講師西岡真理、第3回10月15日(日)(於ライフピアいちじま)講師小野塚航一、第4回11月18日(土)(於青垣住民センター)講師平岩泰典、⑤12月2日(土)(於柏原住民センター)講師津熊友輔・出水清之助、⑥2018年1月20日(土)(於山南住民センター)講師黒田龍二
- b 特別展示「ミニ企画展 上山家文書にみる幕末維新の丹波」：2017年2月28日(火)～3月19日(日) 於丹波市立柏原歴史民俗資料館
- c 市内古文書等調査
- ・氷上町氷上区有文書調査：2017年7月1～2日、11月26日、12月11日
  - ・春日町歌道谷区有文書の保管状況追跡調査：2017年8月20日
  - ・春日町棚原区有文書調査：2017年12月18日
- d 丹波古文書倶楽部の開催支援
- ・月1回の例会実施(第2土曜、講師木村修二) / 10月14日フィールドワーク実施

⑦連携協定に基づく加西市との事業

- a 青野原俘虜収容所関連の資料収集
- b 加西市小谷地区の歴史文化遺産調査、および成果物の発行

⑧篠山市との連携事業

- a 「地域資料整理サポーター」活動への協力：丹南町史編纂史料目録作成作業計6回実施、史料整理サポーター有志と篠山市内巡見(8月、大山・雲部地区)
- b 篠山市立中央公民館主催古文書入門講座(中西家文書を使用して2回講義)
- c 「丹波篠山の日本遺産をめぐる篠山ウォーキングツアー」への参加(12月、八上城跡などを見学)

⑨尼崎市における連携事業

- ・尼崎市立地域研究史料館の専門委員として市沢が同館の運営に協力

⑩連携協定に基づく三木市との連携事業

a 新三木市史編さん事業

- ・「三木市と国立大学法人神戸大学との連携に関する協定書」(平成25年6月締結)に基づく、受託型協力研究(三木市史編さん事業)実施
- ・地域編部会(口吉川部会、志染部会)活動の助言指導
- ・『市史研究みき』、『市史編さんだより』編集

b 三木市立みき歴史資料館事業への協力

- ・2017年12月10日(日) 於・みき歴史資料館 企画展「地域の史料たちⅡーみんなが主役の市史編さんー」特別講演会「『新三木市史』と歴史文化を活かしたまちづくり」(奥村)

c 旧玉置家住宅文書保存活動

- ・市民グループ「旧玉置家文書保存会」に対し整理活動について助言

⑪明石市との連携事業

a 「明石市における地域史料の調査研究業務」

- ・大久保町大久保町安藤陽家文書調査(計4回、のべ8日間)
- ・後述、明石市立文化博物館企画展「明石藩の世界Ⅴ 明石藩の幕末維新」への協力(前掲安藤陽家文書の出展・解説)

b 「明石藩関連資料調査・公開業務」

- ・明石市立文化博物館企画展「明石藩の世界Ⅴ 明石藩の幕末維新」会期9/16(土)～10/22(日)
- ・記念講演：2017年10月7日(土)：前田結城、加納亜由子(明石文博)講演
- ・ギャラリートーク：2017年9月16日(土)、30日(土)

c 明石市史編さん関係

- ・二見町福里大西家文書調査：2016年3月18日～1月23日まで計10回
- ・明石市史近代史部会 2017年5月13日(土)、2018年1月12日(金)
- d 明石市立文化博物館所蔵横河家文書調査・公開業務
  - ・調査・撮影作業：2017年6月3～4日(土日)、8月23日(水)・28日(月)
- ⑫たつの市に関する連携事業
  - ・神戸大学近世地域史研究会：月1回・日曜日開催。開催日：平成29年4月16日、5月28日、6月18日、7月16日、9月3日、10月1日、11月5日(福崎町辻川フィールドワーク)、12月3日、平成30年1月21日。以降2月18日、3月18日予定
- ⑬佐用町との連携事業
  - a 利神城跡関連
    - ・利神城跡の国史跡指定に関する準備への助言
    - ・利神城跡国史跡指定記念シンポジウム(2017年12月17日於佐用町)のコーディネーターを市沢が担当
  - b 「佐用町域における文化財ハザードマップづくり」
    - ・2009年台風9号の被害を受けた佐用川流域の浸水シミュレーション結果と、その周辺に所在する歴史資料の被害状況を重ね、文化財ハザードマップの精度向上のための作業を実施。協力：佐用町教育委員会藤木透氏(現地情報)、神戸大学工学部小林健一郎氏(シミュレーション作成)
- ⑭福崎町との連携事業
  - a 福崎町立柳田國男・松岡家記念館展示
    - ・次年度展示に向けた松岡静雄関連資料の調査
    - ・松岡家関連資料の目録化作業
  - b 福崎町域に残る民具をまとめたパンフレットの作成
  - c 『広報ふくさき』誌上での調査・研究成果の還元
  - d 大庄屋三木家の民具調査
- ⑮猪名川町における連携事業
  - ・「川辺郡猪名川町における多田院御家人に関する調査研究」(猪名川町・兵庫県立歴史博物館・関西大学との共同研究)に参画(奥村弘・木村修二・山本康司)。調査最終年度につき、まとめ作業が中心。2018年2月17日(土)町民向け報告会予定
- ⑯姫路市香寺町における連携事業
  - ・香寺歴史研究会：2018年2月15日講演会にて木村講演予定(於姫路市立香寺公民館)
- ⑰協定に基づく大分県中津市との連携事業
  - ・中津市歴史博物館(仮称)活用推進委員会への協力：委員長に奥村委嘱、副委員長に松下委嘱、2017年7月27日第1回委員会、2018年2月2日第2回委員会予定
- ⑱協定に基づく人間文化研究機構および東北大学との連携事業
  - ・2018年1月26日、人間文化研究機構と東北大学、そして本学の三者で、大規模災害時の地域の歴史資料の保全、および地域文化の継承と創成のための実践的研究についての協定を締結
  - ・史(資)料ネットワークの事務局を設置されている全国の大学と歴史資料の保全・活用について協議：2018年1月20日岡山大学、1月31日愛媛大学。また2月10日東北大学、3月8日鳥取大学、同9日島根大学も予定

## (2) 歴史資料・災害資料の保全・活用

- ①歴史資料ネットワークへの協力・支援
  - ・奥平野村古文書勉強会：例会開催(毎月第2日曜日)、チューター木村修二担当
- ②石川準吉関係資料の調査
  - ・昨年度に引き続き、同資料の調査・研究を継続
- ③附属図書館震災資料への協力

- ・企画展「阪神・淡路大震災と地域の復興 —23年目の神戸と地域・コミュニティの課題—」（平成30年1月11日（木）～2月1日（木）、於神戸大学附属図書館・社会科学系図書館）に協力
- ④人文学研究科古文書室の所蔵文書整理

- ・2017年8月より人文学研究科所蔵御影村文書目録校正作業を実施（週2日）

### （3）地域歴史遺産を活用できる人材の育成

- ①現代GP「地域歴史遺産の活用を図る地域リーダーの養成」事業の成果にもとついて開講された大学院人文学研究科「共通教育科目」への授業提供
  - a 地域歴史遺産保全活用基礎論A、B：地域歴史遺産の保全・活用のための基礎的講義（リレー形式。第1Q第2Qは月曜1限、第3Q第4Qは金曜1限に開講）
  - b 地域歴史遺産保全活用演習A、B：第2Q古文書を用いた合宿形式の演習を開催（8月30日～9月1日於篠山市）。第4Q市民とともに地域文献史料の活用を図る専門的知識を得るための実践的演習を2月15～6日開催予定（於三木市）
- ②教員養成GP「地域文化を担う地歴科高校教員の養成」事業を定着させる活動
  - ・「地歴科教育論C」の開講（前期）
- ③平成22年～24年度特別研究「地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備」事業を定着・普及させる活動
  - a まちづくり地域歴史遺産活用講座の開催
    - ・「まちづくり地域歴史遺産活用講座 in 朝来」2017年5月21日（日）、於朝来市埋蔵文化財センター「古代あさご館」、主催：朝来市、共催：人文学研究科地域連携センター
    - ・神戸大学文学部公開講座、2017年10月15日（土）・16日（日）、於神戸大学文学部、主催：人文学研究科・地域連携センター、共催：兵庫県教育委員会・COC+ひょうご神戸プラットフォーム協議会、後援：神戸市教育委員会・神戸市灘区
    - ・2018年3月3日（土）「まちづくり地域歴史遺産活用講座 in 三木」開催予定
  - b オプションプログラム古文書解読初級講座の開催（2017年10月31日、11月14日、21日、28日）、於：文学部学生ホール、講師：河島裕子氏、主催：人文学研究科地域連携センター

### （4）地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

#### 第15回歴史文化をめぐる地域連携協議会

- ・テーマ「住民主体の（地域史づくり）—平成大合併後の状況の中で—」（平成30年1月28日（日）、於：瀧川記念学術交流会館、94名参加

### （5）地域連携センターを拠点とするプロジェクト

- ①平成26年度～30年度・科学研究費助成金・基盤研究（S）「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて—」
  - a 「兵庫県文化遺産防災研修会」（2017年7月5日（水）、「兵庫県文化遺産防災研修会 in 播磨西」（2017年11月28日（火））へ協力
  - b 第16回歴史文化をめぐる地域連携協議会（平成30年1月28日（日））を共催
- ②地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）「地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」
  - a 奥村弘・村井良介・木村修二編『地域づくりの基礎知識1 地域歴史遺産と現代社会』（神戸大学出版会発行）の編集・刊行：2018年1月20日発行
  - b 人文学研究科地域連携センター主催諸イベント（兵庫県文化遺産防災研修会、まちづくり地域歴史遺産活用講座、歴史文化をめぐる地域連携協議会等）を共催・後援

### （6）地域連携研究と研究成果の公表

- ①年報『LINK【地域・大学・文化】』9号の刊行

- ・平成 29 年 12 月刊行、特集「地域歴史文化をめぐる〈場〉—つながりを生み出す環境づくり—」、  
本文 144 頁
- ②地域関連研究
  - a 地域連携センタースタッフによる科学研究費補助金研究：4 件
  - b 講演、市民講座等への出講多数

以上、活動の詳細は、平成 30 年 3 月末に発行された、当センターの平成 29 年度事業報告書を参照。  
また、同報告書は、神戸大学学術成果リポジトリ Kernel に公表されている。

## II-3. 倫理創成プロジェクト

### [1] 目的：「リスク社会の倫理システム構築」と「多文化共生の倫理システム構築」

このプロジェクトは、平成 19 年度の人文学研究科改組時に、文化科学研究科の旧倫理創成論講座の担当教員が中心に立ち上げた。人文学における先端的学際研究として「知識基盤社会に相応しい大学院教育」を目指して、グローバル化と科学技術時代における新しい倫理規範を研究し、21 世紀の倫理創成の可能性を学際的に探求することを目的にしてきた。哲学、倫理学、社会学、地理学、文学などの教員と大学院生がともにプロジェクトを推進、展開している。

### [2] 研究プロジェクトと人文学研究科の共通科目の実施とその経過

平成 18 年度に「倫理創成論」の講義を開始し、平成 19 年度から選択必修の研究科共通科目として「倫理創成論研究」と「倫理創成論演習」（博士課程前期課程）、「倫理創成論発展演習」（博士課程後期課程）を開講している。教員の指導のもと院生がアクション・リサーチ、フィールドワークに従事し研究を実施し、成果を様々な機会に発表してきた。神戸大学他部局を始め、国内外の他大学、他機関の研究者、NPO や市民活動家、ジャーナリストなどと文理の枠を超えて連携協力して、教育と研究を推進してきた。

研究活動の面では、国内、アメリカ、フランス、ドイツ、韓国、台湾、アイルランド、チリなどの研究者を招聘してシンポジウム等を開催してきた一方、韓国、中国、台湾、香港などの東アジア地域の研究者との交流も行ってきた。平成 22 年度から国立台湾大学、大連理工大学と連携し、持ち回りで毎年一回、英語を発表言語とする、若手研究者の発表を中心にした、Applied Ethics and Applied Philosophy in East Asia を共同開催している。第 1 回を平成 22 年 7 月に神戸大学で、第 2 回（23 年）大連理工大学、第 3 回（24 年）国立台湾大学で開催し、以降、ローテーションで、第 4 回から 6 回を開催し、韓国の慶熙大学校がこれに加わり、第 7 回（平成 29 年）を慶熙大学校で開催した。内容は、東アジアの諸宗教なども含む、多様な観点から生命医療倫理、工学倫理、環境倫理、研究倫理および政治哲学あるいは応用倫理学・応用哲学の基礎に及ぶ。大学院生レベルから英語で発表する国際会議を継続的に実施する研究交流もプロジェクトのひとつの特色となっている。平成 30 年 9 月に第 8 回の会議（Applied Ethics and Comparative Thought in East Asia として）を神戸大学で開催する予定である。

### [3] 共通科目の実施状況

「倫理創成論演習」「倫理創成論発展演習」は、阪神地区の公害問題（西淀川の大气汚染被害、尼崎・泉南・神戸におけるアスベスト被害など）や地震防災、西宮市の市民による自然保護運動に関する聞き取り調査の記録作成と調査研究から始まった。平成 22 年度からその成果を土台に京都精華大学大学院マンガ研究科と共同しアスベスト被害に関するマンガ制作のプロジェクトを立ち上げ、大学院も含めた、共同授業の実施などを経て、平成 24 年に『石の綿 マンガで読むアスベスト問題』（かもがわ出版）を公刊した（永尾俊彦『国家と石綿』現代書館 324 頁参照）。授業は、この間、平成 20 年度後期から 22 年度にかけ、文部科学省大学院教育改革支援プログラム「古典力と対話力を核とする人文学教育—学域横断的教育システムに基づくフェュージョンプログラムの開発」と連動して錬成され、現在に至っている。

平成 24 年から 27 年度は、震災後のアスベストリスクに関連する活動を授業で行った。この間、神戸大学「東北大学等との連携による震災復興支援・災害科学研究推進活動サポート経費」を受け、関連する NPO と連携して被災地の宮城県石巻市、女川町などで調査を行い、震災時のアスベストリスクに関する、啓発ブックレット『マンガで読む 震災とアスベスト』を作成、これを利用したリスク・コミュニケーション活動を大学院生が行った。ブックレットの制作は地方紙で報道され、その反響を受けて、平成 26 年度は神戸、東京、岩手の NPO、立命館大学、京都精華大学、神戸新聞、岩手日報と連携し、盛岡市でリスク・コミュニケーション活動（講演会、パネル展示）を行った。さらに、27 年度は、より効果的なリスク・コミュニケーション活動を目指し、「倫理創成論」の一環として NPO、徳島大学等と協力し、「震災とアスベスト」に関するカードゲーム「クロスロード」を制作し、防災活動のモデル校に指定されている、徳島県下の中学校で試行し、28 年度にこれまでの成果に立ったアウトリーチ活動を東京大学および東京、山形の NPO と協力して行い、([4]を参照) 京都精華大学大学院マンガ研究科と協力し、『マンガで読む 震災とアスベスト』英語版 (<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/90003876.pdf>) を完成した。

「倫理創成論研究」は、平成 19 年度に学内外の講師が安全やリスク論に関する講義を行ったことから始まった。パリ第 7 大学フランス人講師による産業病の社会学講義、若手教員の共同研究の成果「共生の人文学」の講義、「知識基盤社会における倫理創成の現在と課題」のフォーラム、東日本大震災以後は、災害復興、原発事故やエネルギー問題を念頭にした講義などを行い、29 年度は、研究倫理およびロボットの倫理学の専門家も交え、生命医療、情報、環境、リスクの倫理学を講じた。

回	日程	授業内容
1	10/2	イントロダクション 茶谷直人
2	10/16	インフォームド・コンセントと自律 茶谷直人
3	10/23	インフォームド・コンセントと自律 茶谷直人
4	10/30	先端医療技術の倫理 中真生
5	11/6	先端医療技術の倫理 中真生
6	11/13	「情報倫理学 1」 加藤憲治
7	11/20	「情報倫理学 2」 加藤憲治
8	11/27	ロボットの心と倫理 小山虎 (非常勤)
9	12/4	研究倫理 菅原裕輝 (非常勤)
10	12/11	研究倫理 菅原裕輝 (非常勤)
11	12/18	科学技術と環境倫理 松田毅
12	12/25	科学技術と環境倫理 松田毅
13	1/15	科学技術と環境倫理 松田毅
14	1/22	科学技術と環境倫理 松田毅
15	1/29	自動運転車に責任はあるか? 小山虎 (非常勤)

また、核兵器廃絶運動や放射能問題に関わってきたメンバーは、その活動の教育への還元として、平成 23 年度から広島でのアクティブ・ラーニング「Discover Hiroshima」(2泊3日)を企画・実施している。広島平和記念資料館などを訪れた後、現地の大学生や NGO 関係者らとともに、核問題を中心とした「戦争と平和」をめぐる諸問題について討議し発表し合う問題発見型プログラムの試みは、参加者からとても高い評価を得ており、単位取得できるグローバル人文学科目として実施されてきている。

#### [4] 研究活動とその成果、アウトリーチの現状

プロジェクト立ち上げ以降、自治体や神戸の国連機関などと連携し、「防災文化」に関する公開シンポジウム、NPO と協力したアスベスト問題関連などの企画を行ってきた。倫理創成研究会での研究成果の公開と討議に加え、震災時のアスベスト飛散から身を守るための防塵マスクの普及活動とあわせてリスク・コミュニケーションを行う「マスクプロジェクト」(大島英利『アスベスト 広がる被害』(岩波新書 199 頁参照)を通じたアウトリーチ活動を行っている。啓発ビデオ制作、震災時のアスベスト健康リスクに関する、市民向けアンケート調査(3万枚配布、2600ほどの回答、地元NPO、立命館大学に協力)、中皮腫患者の看護ケアを研究・実践している聖路加国際大学の長松康子准教授と協働し、イギリス専門医を招聘した「中皮腫緩和ケア」ワークショップ・講演会(患者の多い尼崎市で開催)、International Ban Asbestos Secretariat の Laurie Kazan-Allen 氏(科学研究費基盤研究(B) 16H05579 による招聘)による、世界のアスベスト問題の現状に関する講演(東京工業大学での第5回石綿問題総合対策研究会)などを行ってきた。

ブックレット『マンガで読む 震災とアスベスト』は、マスクメーカーの協力もあり増刷を重ね、計13,000冊を印刷した。岩手、宮城、福島沿岸部の公立図書館、被災地の希望者、医療関係者などに配布後、本年度は東海地震・南海トラフ地震による津波被害が想定される徳島、高知、和歌山、静岡の沿岸部および淡路島の学校、公立図書館、自治体関係者と希望者に送付してきた。新聞報道後、和歌山県環境政策局の依頼で県下の学校と保健所、和歌山市、田辺市、新宮市の県環境管理部門主催の「震災時の廃棄物処理セミナー」で配布された。愛知県庁資源循環推進課の市町村担当者向けセミナーでも使用された。ブックレットは、精華大学関係者が中文版とハングル版を完成させ、インターネットで配信されている。

#### ・倫理創成研究会

平成17年に始まった研究会は、研究分野や大学の枠を超え、学生、大学院生の教育と教員の研究を刺激し、動機づけてきた。市民に開放しアウトリーチの役割も果たしてきた。近年、開催回数が減っているが、29年度の開催は、以下のとおりである。過去の研究会の詳細は、ホームページを参照されたい。<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/ethics/about.html>

#### 第67回倫理創成研究会

「哲学・倫理学とフィールドワークを考える」

日時：2018年3月16日(金) 15:00-18:00

場所：神戸大学人文学研究科(B棟1階小ホール)

主催：倫理創成プロジェクト

発表者：李 明哲「ミクロな歴史から見た「在日コリアン」～集住地域フィールドワークと、一世・

二世への聞き取り調査を通して～」(在日コリアン青年連合 KEY)

奥堀 亜紀子「どのように死と関わったか」という視点から見た

2011年3月11日 — 「住む」ことを通して(日本学術振興会特別研究員・大阪大学)

司会：松田 毅(神戸大学人文学研究科)

#### [5] 『21世紀倫理創成研究』*Journal of Innovative Ethics* 第11号の刊行

平成14年度から5号が公刊された『倫理創成論講座、ニューズレター』に代わり、平成19年度の人文学研究科改組時に、倫理創成プロジェクトの研究紀要として、院生を含む若手研究者、教員の投稿論文を中心に掲載する雑誌を刊行し始めた。本誌は、神戸大学学術成果リポジトリ Kernel (<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/kernel/seika/NCID=AA12350231.html>)でも公開している。第11号も平成29年度末に刊行した。論文は公募しており、これまで関係教員以外にも他部局、他大学および海外(アメリカ、ドイツ、フランス、香港、ボスニア、チリ、イギリス)の研究者・専門家を始め、助教、ポスドク、院生そして研究者以外からも投稿があり、審査の上、毎号数編を掲載している。10号と11号では、特に、下記の「メタ科学技術研究ワークショップ」およびの内容を紹介

介している。平成 21 年 4 月に始まったリポジトリ Kernel のアクセス統計では本雑誌へのアクセスは、累計で平成 30 年 1 月末に約 3.7 万件あった (10 号まで掲載)。同性婚の意味、スポーツ倫理学、クイア・ポリティクス、労働における排除論、被爆者における「生と死」の問題、東日本大震災と心の「復興」、環境リスク論などに関する論文へのアクセスが上位を占め、多いものは、7000 件を超えている。

## **[6] 「メタ科学技術研究プロジェクト：方法・倫理・政策の総合的研究」の推進**

平成 28 年 4 月発足の神戸大学先端融合研究環、人文・社会科学系先端融合研究領域のプロジェクトとして、本プロジェクト関係の教員に加え、人文学研究科、法学研究科、経済学研究科、国際文化学研究科、人間発達環境学研究科の教員を加え、「メタ科学技術研究プロジェクト：方法・倫理・政策の総合的研究」を 28 年 10 月より開始した。このプロジェクトは、知識基盤社会の土台となる、科学技術を焦点に、探究方法と価値規範、政治経済の相互に関連する不可欠の三つの観点、広義の「科学方法論」「科学技術倫理」「科学技術政治経済学」を統合し、科学技術に関する、人文社会科学の共同研究のスタイルを開発・確立することを志している。

これと連動し、28 年度の「メタ科学技術研究ワークショップ」(WMST) の研究参加者の共同討議を基盤にして、29 年度に、学内教員、外部の研究者、NPO の活動家などを交えて計画した外部資金の申請を行い、そのうち、日本学術振興会の課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業に採択された。10 月から「領域開拓プログラム」の「生命・環境技術の社会実装に関する先端融合研究—21 世紀型参加のビジョンと試行」(29 年 10 月から 32 年 9 月まで) を行っている。

28 年度の WMST では、密接に関連する諸課題が、科学技術と専門知に関する、我が国の歴史的な背景に由来し、特に、その現在地を示している点を踏まえ、市民と科学技術ないしその専門知との緊張関係、経済活動に対する環境的諸制約、利害関係者のための人文社会科学の社会的な役割などが課題として認識されたが、これを踏まえ、29 年度は、以下のようなワークショップを行った。

第 7 回 平成 29 年 5 月 26 日

星信彦・農学研究科教授「農業分野におけるライフサイエンスの状況と社会的課題」

第 8 回 平成 29 年 6 月 16 日

石井哲也・北海道大学安全衛生本部教授「ゲノム編集 (「ミトコンドリア置換」も含む)、生細胞系列の遺伝的改変の現状と社会的・倫理的問題について」

第 9 回 平成 29 年 6 月 30 日

高村ゆかり・名古屋大学環境学研究科教授「パリ協定 その意義とインパクト」

第 10 回 平成 29 年 7 月 20 日

大澤輝夫・海事科学研究科准教授「洋上風力発電開発の動向と風況研究の最前線」

第 11 回 平成 29 年 8 月 3 日 ウルフ・オクスフォード大学ブラバトニック公共政策大学院教授『「正しい政策」がないならどうすべきか』(勁草書房 2016 年) 合評会

第 12 回 平成 29 年 10 月 26 日

木村浩・特定非営利活動法人パブリック・アウトリーチ研究企画部・研究統括「次世代エネルギーを考える—誰がどう決める問題なのか—」

第 13 回 平成 29 年 11 月 9 日

香川知晶・山梨大学医学部名誉教授「生命倫理の倫理性—生命に関する文理融合研究のために」

第 14 回 平成 29 年 11 月 16 日

柳下正治・環境政策対話研究所「政策形成対話の原点を確認する—環境政策と参加」

第 15 回 平成 29 年 12 月 7 日

平川秀幸・大阪大学 CO デザインセンター教授「欧州における「責任ある研究・イノベーション(RRI)」の政策および研究の動向」

第 16 回 平成 29 年 12 月 14 日

石井哲也・北海道大学安全衛生本部教授「ゲノム編集を問う：ヒト生殖細胞系列を中心に」

第17回 平成30年1月25日

ウルフ・オクスフォード大学ブラバトニック公共政策大学院教授聘国際シンポ

基調講演：ジョナサン・ウルフ 'Risk and the Regulation of New Technology'

特定質問：塚原東吾・国際文化科学研究科教授、原口剛・人文学研究科准教授

第18回 平成30年1月27日

ウルフ・オクスフォード大学ブラバトニック公共政策大学院教授聘ワークショップ：

「公共政策を焦点とした人文社会科学分野の融合研究の可能性」

神戸大学の報告者（報告順）

中真生・人文学研究科准教授：Alternatives to terminating the life of a baby or a fetus: From "Baby Post" to pregnancy conflict counseling”

板持研吾・法学研究科准教授：Posthumously Conceived Children and Succession from Perspective of Law

柳川隆・経済学研究科教授：Risk, Uncertainty and Regulation of Electric Power Market

伊藤真之・人間発達環境学研究科教授：Some attempts to promote public engagement in science and technology policy in Japan 質疑応答しウルフ教授からコメントを得た。

（神戸大学先端融合研究環人文・社会科学系融合研究領域ワークショップ経費助成費による。）

第19回 平成30年3月21日

「アスベスト問題から考える先端融合研究の可能性」 提題者

村山武彦・東京工業大学・環境・社会理工学院教授

長松康子・聖路加国際大学・看護学部・准教授

古谷杉郎・石綿対策全国連事務局長・A-BAN（Asian Ban Asbestos Network）コーディネーター

上記のワークショップの報告内容に関しては、第5回から第16回までの論文ないし要旨・要約を『倫理創成研究』第11号に掲載している、関連の資料、共同討議の記録を順次、「メタ科学技術研究プロジェクト：方法・倫理・政策の総合的研究」のサイト（<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/mst/index.html>）に掲載ないし掲載準備中である。

今年度のプロジェクトの運営にあたり、上記予算以外に、先端融合研究環プロジェクトの関連支援経費を受けた。この場を借りて感謝したい。

## [7] 今後の課題

平成19年度後期からの文部科学省の資金を受けた現代GPによるESDサブコース、平成20年度後期からの大学院教育改革支援プログラムの実施などで活動が飛躍的に増加した時期を経て、ここ数年、活動は全体として落ち着いた状況にあったが、「メタ科学技術研究プロジェクト」を通して新しい段階に入った。ただ、今後の5年から10年を考えると、新しい担い手と発想も必要であると認識している。この課題についても、プロジェクトの遂行を通じて、対応していきたい。

## II-4. 日本文化社会インスティテュート

### [1] 目的

日本文化社会インスティテュートは、日本語日本文化教育プログラム、KOJSP、グローバル人材育成などの関連事業を総括するため、2014年4月に発足した。日本文化、社会に関する教育・研究および日本における人文学の教育・方法を、国際交流を通じて深化・発展させることを目的としている。

### [2] 活動内容

「頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム」(25～27年度)の成果を中心とした論文集である *New Steps in Japanese Studies* が、2017年6月、ヴェネチア大学出版局より刊行された。本論集のオンライン版は、下記サイトにおいて閲覧可能である。  
<http://edizionicafoscari.unive.it/libri/978-88-6969-153-9/>

本年度の主たる活動及び関連活動の詳細は、以下のとおりであるが、前年度まで、*New Steps in Japanese Studies* の名のものに重ねて来たワークショップシリーズは、11月に開催された第10回を最後に一区切りとし、新たに、*New Perspectives in Japanese Studies* の名の研究会シリーズを開始した。いずれの取り組みにおいても、国内外から迎えた提題者を中心に活発な議論がなされ、日本研究における領域横断的研究が探究された。

#### 1) *New Steps in Japanese Studies / Part X*

「比較思想」連続ワークショップ

日時：2017年6月22-29日(木)17:00～／

場所：神戸大学文学部A棟422共同談話室

[Session-I] Aesthetics/Philosophy Education (美学／哲学教育)

Lecture (1) Itsuki HAYASHI (Adjunct Assistant Professor, Columbia Univ.)

“What’s so Tragic about Tragic Beauty? : Whitehead and Japanese Aesthetics”

(「悲劇的な美」の何が、それほど悲劇的なのかーホワイトヘッドと日本の美学ー)

Lecture (2) Thibaud TROCHU (Researcher, Centre Alexandre Koyré, France)

“Sartre, Derrida and Deleuze Teaching at High School: Philosophy Education Now”

(高校教師としてのサルトル、デリダ、ドゥルーズー哲学教育の今ー)

[Session-II] William James / Literature (ジェイムズ／意識の流れ／文学)

Lecture (1) Thibaud TROCHU

“William James et les marges de la conscience: Trajectoires savantes entre l’Amérique et l’Europe”

(ウィリアム・ジェイムズと“意識の縁暈”——ヨーロッパとアメリカのあいだの学的軌跡) [\*Lecture in French and English with summaries in Japanese]

Lecture (2) Nobuo KAZASHI: “William James in Modern Japan:

“Stream of Consciousness” and Sōseki’s “Theory of Literature”

(近代日本におけるジェイムズ受容ー「意識の流れ」と漱石の『文学論』)

#### 2) 国際シンポジウム : *New Perspectives in Japanese Studies / Part I*

日時：2017年8月5日(土)-6日(日)

場所：神戸大学文学部B棟132教室

主 催：日本語教育・日本研究を中心とした実践型グローバル人材育成事業

基調講演者：Prof. Bjarke Frellesvig (University of Oxford)／Prof. Bonaventura Ruperti (University of Venice)／Prof. Jörg B. Quenzer (University of Hamburg)

### 3) 国際ワークショップ：New Perspectives in Japanese Studies / Part II

日 時：2017年11月18日-19日(日)

場 所：神戸大学ブリュッセル・オフィス

参加者：神戸大学からは増本浩子研究科長ほか大学院生を含む5名。欧州5大学からは、ビヤーク・フレレスヴィック教授(オックスフォード大学)、ヨルク・クヴェンツァー教授(ハンブルク大学)、アンドレアス・レーゲルスベルガー教授(トリリア大学)ほか7名。

4) また、2018年2月5日、ハワイ大学東西センターに開催された第二回HOKU(神戸大学ホノルル・オフィス)シンポジウムにおいては、午後の部において、*Japanese Literature & Thought Crossing the Oceans: To Construct "Trans-border Japanese Studies"*(「海を渡る日本文学・思想—境界横断的日本研究構築のために」)のタイトルでワークショップを行った。発表者は、Prof. Jin Y. Park (American Univ.)と嘉指信雄、討論者は、ハワイ大学のProf. Masato IshidaとProf. Denise Konan、及び山本秀行。環太平洋地域の研究者とともに行った学際的・境界横断的日本研究の試みとして、きわめて有意義なワークショップとなった。

### [3] 今後の活動

今までに構築された、主にオックスフォード大学、ヴェネチア大学、ハンブルク大学などの日本研究者との連携を中軸としつつ、新たに、ベオグラード大学などの東欧圏やハワイ大学などの環太平洋地域の研究者も加えたネットワークを発展させ、学際的・境界横断的日本研究を展開させることを目指す。また、一昨年4月より開始された、全学的教育プログラムである「現代日本プログラム」や、神戸大学「アジア総合学術研究センター」における国際的日本研究プロジェクトなどとも連携しながら、さまざまな教育研究プログラムやシンポジウムを企画・実行する予定である。また、今秋、日本にて開催予定の「東アジア日本研究者協議会・第3回国際会議」においても共同パネルでの発表に取り組む予定である。

## II-5. ESD コース (持続可能な開発のための教育コース)

### [1] ESD サブコースの実施

平成19年度に現代GP「環境教育」の部門で、発達科学部および経済学部と連携して採択された「アクション・リサーチ型ESDの開発と推進」のプログラムとしての神戸大学ESD(「持続可能な発展のための教育」)サブコースは、平成20年4月に開始した。その目標は、アクション・リサーチの手法で学生が地域から学ぶこと、「持続可能な社会」への人文学的アプローチを試みること、他分野や実社会の様々な人々との交流を通じて、環境の複雑性を体で感じ、知的共同作業を経験することの三点にまとめられる。

このサブコースは、学内の複数部局が連携し、1年生の「ESD基礎」から4年生までの授業科目を開設してきた。当初、3学部であったが、平成23年度に農学部、平成24年度に国際文化学部と工学部、平成25年度には医学部保健学科が参加し、それに伴うカリキュラム改訂を行った。また、平成22年度からは学内にESD推進検討委員会(WG)が作られ、関係学部選出の委員によって構成されていたが、27年度より委員会は共通教育の専門委員会となった。29年度には全学部が

関連授業科目を開講する「全学体制」となった。これにより、規則に定められた 14 単位以上を修得したものに対して与えられていた「神戸大学ESDコース修了認定証」も神戸大学長名で発行されることになった。

※「ESD」は、環境・人権・福祉・国際理解・健康などの「持続可能な社会づくり」に関わる諸問題を総合的に捉えるとともに、現場の様々なステークホルダーと連携し、多様な課題解決に様々な観点から参加できる人材の育成を目指すプログラムである。神戸大学では貧困・平和・正義・人権・倫理・健康問題などの幅広い観点を組み込んだ教育カリキュラムを作ってきた。各学部で学外組織とも連携してアクション・リサーチとフィールドワークの機会を用意して、学生が自治体や企業・NPO など地域の様々なフィールドに出て現場の人々とともに課題解決に取り組む活動を支援する。

## [2] ESD サブコースの実施状況

文学部では平成 29 年度は、ESD 関連の全学共通科目の担当および哲学・社会学・地理学専修が共同して、以下の授業を行った。

### 平成 28 年度 文学部 ESD コース科目 授業一覧

科目名	学期・時限	担当専修（教員）	備考（読替など）
ESD 論 A と B	(後期)水・5	5 学部合同	1 年生対象
環境人文学講義 I	(前期)月・2	哲学・社会学・地理学など	2 年生以上
環境人文学講義 II	(前期)集中	松本太（地理学非常勤）	自然地理学
ESD 演習 I	(前期)集中	哲学（松田）	環境 NPO 実践論と共同
ESD 演習 II	(後期)水・2	地理学（藤田）	地理学演習 II

各科目の授業内容は以下のとおりである。

#### ①ESD 基礎 A（持続可能な社会づくり 1）、ESD 論 A, B（持続可能な社会づくり 2）

これらの授業では、輻輳的な社会問題（環境・資源・食糧・経済・人権・労働・安全・医療等々、多様な社会的課題）から持続可能な社会づくりを考える。多様な講義とフィールドワークを通して、実践・理論の実際を知り、自ら考え他者と共同して行動する態度を学ぶとともに、自らの専門との関係性を考え、大学教育への新たな動機づけを得ることを目指す。

### 平成 29 年度「ESD 基礎 A」各回の授業内容

#### ESD 基礎 A:

回	日程	授業内容
1	6/14	ガイダンス 松岡・清野・鴨谷（人間発達環境学研究科）
2	6/21	ESD が生まれてきた歴史的背景 清野（人間発達環境学研究科）
3	6/28	経済と持続可能性 石川雅紀（経済学部）
4	7/5	環境と社会運動 松田毅（文学部）
5	7/12	ESD を創出する仕組み 1 松岡・清野・鴨谷（人間発達環境学研究科）
6	7/19	ESD を創出する仕組み 2 松岡・清野・鴨谷（人間発達環境学研究科）
7	7/26	ESD とフィールドワーク 松岡・清野（人間発達環境学研究科）
8	8/2	リフレクション 松岡・清野・鴨谷（人間発達環境学研究科）

**ESD 論 A:**

回	日程	授業内容
1	10/4	ESD の枠組みと授業の進め方 松岡・清野 (人間発達環境学研究科)
2	10/11	SD の多様な課題③科学と ESD 伊藤真之 (国際人間科学部)
3	10/18	SD の多様な課題①経済とサステナビリティ 佐藤真行 (国際人間科学部)
4	10/25	SD の多様な課題④地域保健と持続可能な開発 小野怜 (医学部保健学科)
5	11/1	SD の多様な課題②社会環境とESD 原口剛 (文学部)
6	11/8	SD の多様な課題⑤人権・平和と持続可能な開発 ロニー・アレキサンダー (国際協力研究科)
7・8	11/15	ESD創成ワークショップ 松岡・清野・鴨谷 (人間発達環境学研究科)

**(参考: ESD 論 B)**

回	日程	授業内容
1	12/6	ガイダンス グループ学習ガイダンス(グループづくり) 松岡・清野・鴨谷 (人間発達環境学研究科)
2	12/13	フィールドワーク準備ワークショップ 松岡・清野・鴨谷 (人間発達環境学研究科)
3	12/20	フィールドワーク関連講義: 篠山農業体験 片山寛則 (農学部)
4~6		☆篠山農業体験 (2月3日) ☆南あわじ市権堀プロジェクト (12月16日) ☆ESDスタディーツアープログラムから選択 ☆邑久光明園ボランティア・スタディーツアー (1月19日夜~1月21日)
7	1/31	フィールドワーク関連講義 (邑久光明園) 松岡広路 (人間発達環境学研究科)
8	2/7	グループ学習+総合リフレクション 松岡・清野・鴨谷 (人間発達環境学研究科)

② 環境人文学講義 I

この講義では、ESD を専門科目とする哲学、社会学、地理学の各専修、本学の他学部や他大学、民間の ESD 実践者から講師を選び、それぞれの専門や社会活動の観点から ESD の講義を行う。今年度は、「環境と市民社会」の観点から「エネルギー問題」、「貧困」などの具体的問題解決と市民参加を視野に、現場を知る専門家、NPO の活動者も外部講師として招聘し、講義を行った。

**平成 28 年度「環境人文学講義 I」各回の授業内容**

回	日程	授業内容
1	4/10	「導入」 原口剛 (地理学)
2	4/17	「原発問題再考」 白鳥義彦 (社会学)
3	4/24	「『環境』は誰のものか?: 「生活環境主義」と「水戦争」」 佐々木祐 (社会学)
4	5/1	「ヴィジュアル・コミュニケーションをとおした気候変動問題」 油井清光 (社会学)
5	5/8	「エネルギーの倫理学」 松田毅 (哲学)
6	5/22	「エネルギーの地産地消の試み」 伊東真吾 (NPO 非常勤)
7	5/29	「アスベスト問題とクロスロード」 松田毅 (哲学)
8	6/5	WS 中間総括 松田担当
9	6/12	「人の死に際をめぐる生命倫理的考察」 茶谷直人 (哲学)
10	6/19	「釜ヶ崎とはどんなまちか? 1」 原口剛 (地理学)

11	6/26	「釜ヶ崎とはどんなまちか？ 2」 原口剛（地理学）
12	7/3	「貧困と向き合う」 中桐康介（NPO 非常勤）
13	7/10	「貧困と向き合う」 中桐康介（NPO 非常勤）
14	7/24	「環境と生殖」 中真生（哲学）

### ③ 環境人文学講義Ⅱ

この講義は、松本講師が自然地理学の観点から自然災害と環境問題をキーワードに、気候や水文、地形によって形成される自然環境およびこれと関わる人間活動に注目し、地域をフィールドに、様々な事例を取り上げた。自然地理学の基本的知識を習得して現象のメカニズムを理解し、今後の問題解決の方向性について考察する力を養った。

### ④ ESD 演習Ⅰ

今年度は、前年度に続き、環境 NPO 実践論（経済学部石川雅紀教員、非常勤講師として、（一社）環境政策対話研究所・柳下正治、特定非営利活動法人パブリック・アウトリーチ・木村浩、特定非営利活動法人「地域の未来・志援センター」萩原喜之）と合同で熟議型意思決定に関する集中授業を行った。テーマは、2011 年の福島東電原子力発電所の深刻な事故を受け、国民の意見が分かれている次世代エネルギーの問題であった。この問題に詳しく、熟議の手法を実践している専門家と市民対象のワークショップに習熟した NPO の活動家を講師として招へいし、情報提供と円滑な運営に努めた。最終的に 23 名が、4 日間最後まで参加した。

#### 平成 28 年度「ESD 演習Ⅰ」各回の授業内容

回	日程	授業内容
1	8/17	全体オリエンテーション
2	8/17	エネルギー問題に関する講義（政策、特徴、気候変動）
3	8/17	グループ作業「質問づくり」と専門家との Q&A セッション
4	8/18	講義：未来社会像と視点
5	8/18	アンケートの実施と類似価値観グループの編成
6	8/18	グループ討議：未来社会におけるエネルギー選択
7	8/18	エネルギー・シミュレーションの実施結果の振り返りなど
8	9/6	グループ討議（類似価値観）と異価値観グループの編成
9	9/6	グループ討議（異価値観グループ）
10	9/6	グループ討議（異価値観グループ）（最終）
11	9/6	発表（グループ代表による）と講評
12	9/7	個人による熟慮 プレゼン準備
13	9/7	グループ討議
14	9/7	個人による 2050 年のエネルギー選択のとりまとめ
15	9/7	個人発表と全体講評

授業は、近未来の電源/エネルギー構成について、受講生が自分の意見を持てることを意図する。学生の意見変容を評価するアンケートを実施したほか、授業方法の改善に資するコミュニケーションペーパーの記入もしてもらった。最終の個人発表時にも、グループのコメントなどのフィードバックを行った。これまで 2 年間の結果と反省を踏まえて、30 年度も合同で集中授業を行う。

## ⑤ ESD 演習Ⅱ

本授業は、実際に街や村を歩くことで、フィールドワークに対する理解を深め、「持続可能な開発」の観点から考察する際に、現地で観察することの重要性を体得することを目標とする。今年度も引き続き、統一テーマとして「災害」を掲げ、主に土日を使って、随時、地理学の観点を重視した巡検 (excursion) を行う。この授業の参加者はすべての回に参加しなくてはならないし、事前にレジュメを用意し、担当地でプレゼンを行うものであり、ハードワークではあるが、実際に現場を視察し、その場で考え、討論を行うことには大きな意義があると考え。シラバスでは以上のように謳ったが、受講希望者は残念ながら現われなかった。担当が 2013 年度に始まって以来、昨年度に引き続き 2 度目である。

報告者の専門である地理学にとって「持続可能な開発」は重要な視点であり、今年度も、昨年度までの本授業で着実に収めてきた成果を活用し、実質的な後継の授業展開を狙った。地理学は、19 世紀における近代地理学としての確立・発展以来、「環境」に対する考察を深め、人間生活との調和を図ろうとしてきた。特に「災害」は、環境に対する過剰な改変によって引き起こされる一面もあり、「持続可能な開発」に関して目配せしようとする場合、有効なテーマと考えられることを踏まえており、地理学専修 2 年生対象の「地理学実習Ⅱ」を活用した。

回	日程	授業内容
1~3	10/5 10/12 10/19	第 1 回 授業の趣旨の徹底・確認と今後の日程調整 第 2 回 百年記念会館で開催されている展示「誓子と海—神戸開港 150 年に寄せて」に関する説明。各自のコメントを求めた。さらにレポートを課した。 第 3 回 附属図書館社会科学系図書館の展示「近代神戸の航路をたどる—開港 150 年を迎えて—」について解説の上、それに関するレポートを課した。
4~6	10/26 11/16 11/18	第 4 回 地理学で海外調査、現地観察の意義について藤田から説明。 第 5 回 中国における ESD に関する以下の論文を受講生に報告してもらい、それを巡って議論した。郭 明「ESD の視点を取り入れた中国の高校地理教科書の分析—人民教育出版社の必修教科書を中心に—」『新地理』63-2、2015 第 6 回 第 227 回神戸大学 RCUSS オープンゼミナールに参加して、後日にレポートを提出。①「地域に残された災害資料を活用した自主防災活動—災害の記録と記憶の継承事例」松下 正和 神戸大学地域連携推進室特命准教授、②「食中毒の予防法」 大路 剛 神戸大学都市安全研究センター准教授
7~10	11/30 12/7 12/9	第 7・8 回 地理学実習Ⅱの発表準備 (テーマ、各自の希望を調整して、決定+発表準備) 第 9・10 回 実地における踏査と説明 (テーマ: 神戸市内と尼崎市の災害と公害)、後日にレポートを課した。①都賀川の洪水被害、②川西航空機の戦災とその後、③尼崎の公害 (アスベスト)
11~14	1/11 1/18 1/21	第 11・12 回 地理学実習Ⅱの発表準備 (テーマ、各自の希望を調整して、決定+発表準備) 第 13・14 回 実地における踏査と説明 (テーマ: 尼崎市における水質改善への試みと地震碑)、後日にレポートを課した。

### [3] 評価と課題

神戸大学 ESD サブコースは 29 年度に 10 年目を迎えた。関連科目は文学部の場合、哲学、社会学、地理学の三専修の卒業関連科目であり、受講者数は一定水準を保っている。演習は、専門や学部が異なる学生がフィールドワークを行い、問題に現場で向き合う人々に出会い、考え、討議を重ね、自分の意見を説得的に伝える努力や工夫から、取り組むべき課題を見出すことを目標とする。現場での経験が、学生の糧となり、成長を促すことが、学生の言動の変化からも感じ取れる。また、コースの授業群は、関連分野の幅広い知識の獲得、豊かな経験の蓄積、専門性を深める端緒といった面での役割を果たしている。今後も、この取組を継続し、神戸大学の教育制度全体のなかで学部教育や大学院の教育研究と有機的に繋げ、維持・発展させることが重要であると認識している。

2011 年の東日本大震災、福島第一原発事故の余波がいぜんあり、関連授業を受講した学生の反応からも、学生たちが「持続可能な社会の構築」に少なからず関心を寄せている実態がうかがえる。29 年度に取り上げたテーマやトピックスも、エネルギー問題や貧困のように、現代社会の動向を反映するものとなった。今後も、大学の教育研究と社会を人文学の見地から架橋する地道な取組を積極的に推進し、その裾野を広げてゆきたい。

運営面では、29 年度も大学院博士課程後期課程の学生を関連研究の RA として雇用することができ、助力を仰いだ。コースの運営には経費と人材を要するので、一定の予算措置が欠かせない。他方、学内では当該コースに参加する学部が増え続け、関係教員の継続的な努力もあり、平成 29 年度から全学化することとなったことは評価されてしかるべきかと思う。

全学的には、コース発足以来の核となっていた教員が定年退職し、抜けていく一方で、文学部では中堅の教員のなかにかこうしたスタイルの教育研究を担う者が出てきている。これをさらにどのように維持発展し、文学部の学部教育として個性化、充実させていくかが今後の課題となるだろう。

### Ⅲ. 社会貢献

#### Ⅲ-1. 公開講座

文学部・人文学研究科では、地域の方を対象に毎年度公開講座を実施している。平成29年度には、「詩と謡」をテーマとして、次のとおり実施した。

#### 平成29年度公開講座 「詩と謡」

概要	太古より人は声を発し、うたを謡い、詩を詠じてきました。しかし、印刷文化が発展するなかで、私たちはことばに宿る「声」の要素（オラリティ）よりも、書かれた文字（テキスト）を重視するようになってきました。文字に向き合うことの多い文学部の学びにおいても、ことばの聴覚性、身体性が意識されることは少なくなってきたといえるでしょう。しかし昨年、ボブ・ディランがノーベル文学賞を受賞したことをきっかけに、謡の文学性について改めて注目が集まっています。そこで今年度は、文学、歴史学、言語学の立場から、文字に書かれ視覚を通して認識される詩と、音声として発せられ聴覚を通して認識される謡との関係性に目を配りつつ、詩とは何か、謡とは何かを改めて問い直し、それらの成り立ち、さらに人の思考とのつながりなどについて考えてみたいと思います。
開講期間	平成29年9月23日（土）・9月30日（土）午後1時30分～午後4時50分
時間数	6時間（1回1時間半の講義を合計4回）
場所	神戸大学瀧川記念学術交流会館大会議室
受講対象者	一般市民、学生
募集人数	100名
受講料	無料

なお、平成24年度から平成29年度までの公開講座のテーマと概要は次のとおりである。

#### 平成24～29年度公開講座テーマ

	テーマ	概要
平成24年度	「学びの流儀—教育制度の西・東—」	グローバル化や情報化が急激に進む中、学習や教育のありかたも大きく変化しつつあります。神戸大学文学部では、今年十月から「神戸オックスフォード日本学プログラム」が始まります。このプログラムは、神戸大学とイギリスのオックスフォード大学の間で結ばれた大学間協定に基づき実施されるもので、オックスフォード大学東洋学部日本学専攻の二年生十二名が、神戸大学文学部で日本語や日本研究を一年間集中的に学習することになります。また、オックスフォード大学ハートフォードカレッジと文学部の間での交換留学生制度も合わせて開始されます。 今年の公開講座は、このような画期的な国際的教育プログラムの開始を記念して、学習や教育のあり方を改めて考え直すため、ヨーロッパとアジアの特徴的な「学びの流儀」のいくつかを取り上げてみたいと思います。 それぞれ哲学、社会学、中国史、アラブ史を専門とする四名の教員が担当いたしますが、二週とも、講師の間での意見交換も含めた質疑応答の時間を十分にとる「フォーラム」形式で行ってみたいと思います。奮ってご参加ください。
平成25年度	「人と「こころ」の文学」	本年度の公開講座は、人文学から切っても切り離せない「こころ」が人とどうかかわるかと言う問題を取り上げます。倫理学、社会学、イギリス文学、西洋史学を専門とする四名の教員が担当し、それぞれの専門の視点から「人」と「こころ」の関わりについて、講義を行います。
平成26年度	「翻訳」の文学	本年度の公開講座は、「『翻訳』の文学」をテーマに開講いたします。人文学研究にとって「翻訳」という営みは非常に重要な意味を持ってきましたし、今後も不可欠な営みであり続けるでしょう。ただ、日本の人文学研究が外国の人文学研究をモデルにし、外国の文化を「翻訳」し輸入してきたものにすぎないならば、そろそろ「翻訳」を卒業してもよい

年度		のかかもしれません。しかし、テーマとなっている「翻訳」は単に横書のもの（欧文）を縦書（日本語）に変換するという作業を意味しません。そうではなく、「翻訳」とは変換不可能なものを自覚しつつ再創造するという営みにほかなりません。本講座では、哲学、西洋史学、ドイツ文学、美術史学を専門とするそれぞれの立場から、「翻訳」という営みの意義について語ってもらいます。
平成27年度	「境界を作る・越える」	今年度の公開講座は、「境界を作る・越える」というテーマといたしました。「境界を作る」という行為は、地理的なものであれ、人間集団に関するものであれ、人間の文化的、社会的営みの最たるものと言えるでしょう。しかし、同時にそれは、人やモノ、情報が、「境界」を越えて易々と移動するという、決定的事実の裏返しでもあります。国境を越えた人・モノ・情報の移動が活発に行われ、グローバル化が叫ばれる一方、国境を強く意識するような、ナショナリズム的行動が立ち現れている昨今の情勢などは、まさにそうしたことの具体的な現れと言えるのかも知れません。こうした現象を私たちは、どのように理解し、受け止めていけばよいのでしょうか。本講座では、こうした「境界」をめぐる諸問題に対して、国文学、地理学、社会学、西洋史学、それぞれの立場から光を投げかけ、具体的な事例に即して考えて行きたいと思えます。
平成28年度	「人文学と自然科学——学知探求の歴史と現在」	ゲーテ作『ファウスト』の主人公、世界を根源まで窮めんとするファウスト博士は、悲劇の幕開け直後、こう嘆きます。「ああ、こうして哲学も、法学も、医学も、忌々しいことには神学までも、胸を焦がし隅から隅まで研究してきた。そのあげくの果てが、ご覧のとおり阿呆なままの私だ。」ここに描かれているように神学を頂点とする四学部の学問体系が中世ヨーロッパの大学システムの根本をなしていました。「人文学」と「自然科学」の区別が生まれたのは近代。世界史的に見れば新しい区分です。それ以降、個々の学問領域が画定されていくなかで、人文学の各分野では自然科学とのさまざまな付き合い方が学知探求の方法論として整備されてきました。そこには、自然科学的世界観への建設的批判、自然科学の言説を成り立たせている論理の研究、自然科学の展開の背景をなす科学史の精査、あるいは自然科学的手法を用いた人文知の探求など、それぞれのディシプリンに応じた多様な関係性が見出されます。本講座では、こうした「人文学と自然科学」の関係をめぐる歴史と現在について、哲学、芸術学、地理学、心理学、それぞれの立場から光を投げかけ、具体的な事例に即して考えたいと思えます。

平成29年度には、上記に加えて、次の(1)(2)を文学部公開講座（人文学研究科地域連携センター主催）として実施した。

(1)「まちづくり地域歴史遺産活用講座」（平成29年10月14日・15日）

(2)「まちづくり地域歴史遺産活用講座オプションプログラム 古文書解読初級講座」（平成29年10月31日・11月・14日・21日・28日）

(1)は、地域歴史遺産の保全・活用を通しての町づくり・村おこしに関心を持つ市民の要望に応えるものである。(2)は、(1)の講座の受講生を対象に、くずし字を読み解く教養を定着させ、地域歴史遺産の保全・活用の実践力を高める目的をもって実施された。なおこれらは、平成22年～24年度特別研究「地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備」事業を引き継ぐものであり、(1)については平成22年度から、(2)については平成24年度から継続して実施されているものである（第Ⅱ部Ⅱ-2 地域連携センターの81頁の記事も併せて参照）。

### Ⅲ-2. 高大連携事業

文学部・人文学研究科では、高大連携事業として出前授業、模擬授業等を行っている。平成29年度に実施された出前授業、模擬授業等の概要は次のとおりである。

#### 平成29年度実施の出前授業・模擬授業等

高校名等	実施日	事業内容	詳細
兵庫県立長田高等学校	2017/5/18	その他	特別講義
神戸大学附属中等教育学校	2017/5/23	出前授業	神戸大学 DAY
夢ナビライブ 2017	2017/6/17	出前授業	
神戸大学高大連携特別講義 (公開授業)	2017/7/27	模擬授業	
東洋大学附属姫路高等学校	2017/7/28	出前授業	
大阪府立北千里高等学校	2017/9/20	出前授業	
開明高等学校	2017/10/18	授業見学	人文学基礎・英米文学
〃	〃	授業見学	人文学基礎・美術史学
〃	〃	授業見学	ドイツ文学特殊講義
〃	〃	授業見学	芸術学特殊講義
〃	〃	施設見学	学部紹介・人文科学図書館見学
鳥取城北高等学校	2017/10/20	模擬授業	
〃	〃	施設見学	人文科学図書館見学
兵庫県立加古川西高等学校	2017/10/24	授業見学	人文学基礎・言語学
〃	〃	施設見学	学部紹介・人文科学図書館見学
兵庫県立星陵高等学校	2017/10/27	授業見学	人文学基礎・日本史学
〃	〃	その他	学部紹介
兵庫県立兵庫高等学校	2017/11/9	授業見学	アメリカ文学演習
〃	〃	授業見学	国文学特殊講義
〃	〃	授業見学	美術史特殊講義
〃	〃	その他	学部紹介
和歌山信愛高等学校	2017/11/10	模擬授業	
兵庫県立長田高等学校	2017/11/10	出前授業	
関西大倉高等学校	2017/11/15	出前授業	
神戸海星女子学院高等学校	2017/11/16	出前授業	
神戸龍谷高等学校	2017/11/22	出前授業	
西宮市立西宮高等学校	2017/12/5	出前授業	
兵庫県立御影高等学校	2017/12/18	出前授業	
大阪府立富田林高等学校	2017/12/21	出前授業	
和歌山県立桐蔭高等学校	2018/3/16	出前授業	
兵庫県立長田高等学校	2018/3/22	その他	指導助言
兵庫県立御影高等学校	2017年度 前期	その他	教員免許資格科目「地歴科教育論D」を 兵庫県立御影高等学校と連携して実施。

※出前授業：高校等へ本学教員を派遣し、授業を行うもの

模擬授業：「大学体験」として高校生への訪問を受け入れ、高校生向けの授業を行うもの

授業見学：大学で実施される通常授業を高校生が見学するもの

施設見学：研究室見学を含む

その他：上記以外のもの

上掲の表の最下段、兵庫県立御影高校との連携プロジェクトは、平成19年度から継続的に実施され

ている事業である。このプロジェクトでは、神戸大学文学部が高等学校地理歴史科教員免許取得希望者のために開講している「地歴科教育論」の一環として、兵庫県立御影高校総合人文コースの生徒たちがグループに分かれて「地域」をテーマとする課題研究（探究活動）に参加し、これを支援する取り組み（実習）を行っている。この取り組みは、国立大学の学部（大学院）と県立高校との個別のかつ継続的な連携としては、全国的に見ても貴重な実践例であり、大学生（院生）と大学教員が高校生の学習を支援・指導し、高校教員も教員をめざす大学生を指導するという、相互にメリットがある取り組みとして継続されてきた。

## 第3部

### I. 外部評価

#### I-1. 外部評価委員会

日 時：2018年6月10日（日）14:00～17:00

時：場所：人文学研究科A棟学生ホール

外部評価委員：佐々木徹（京都大学・文学研究科教授）

人文学研究科：奥村弘（文学部長・人文学研究科長・地域連携センター）、増本浩子（2017年度文学部長・人文学研究科長）、鈴木義和（副研究科長）、白鳥義彦（副研究科長）、市澤哲（2017年度副研究科長）、宮下規久朗（評価委員長）、岸本秀樹（2017年度評価委員長）、松田浩則（大学院委員）、長坂一郎（2017年度大学院委員）、濱田麻矢（教務委員・海港都市研究センター）、田中真一（2017年度教務委員）、村井恭子（学生委員）、高田京比子（2017年度学生委員）、松田毅（倫理創成プロジェクト）、綾部光雄（事務長）、阪本祐二（教務学生係長）

## 1-2. 神戸大学文学部・大学院人文学研究科 外部評価報告書

佐々木徹（京都大学・文学研究科教授）

全体に、充実した内容を伴った精緻な報告書と言える。詳細で丁寧な資料作成がなされており、膨大な労力が自己点検評価に費やされていることが容易に窺える。まず、その努力に対して敬意を表したい。

### 〔教育〕

#### 学部

少人数教育にウェイトを置いた方針は、人文学の本質を反映するものであり、高く評価したい。

平成24年の創始以来、オックスフォード大学東洋学部との「神戸オックスフォード日本学プログラム」は注目に値する成果を上げていると言える。このようなプログラムが機能するためには教育体制のみならず、留学生の日常的な生活のサポートも充実させなければならないので相当な骨折りを余儀なくされるが、教員・事務員両サイドから十全な手当てがなされていることがわかり、感銘を受けた。可能な限りにおいて双方向性を目指すなど、この価値あるプログラムの益々の充実を祈りたい。

#### 大学院

指導教員が連携して指導に当たるための「学修カルテ」は有効な工夫であるように思われる。

ティーチング・アシスタントを有効に活用する方策がとられている点も目についた。

ハラスメント対策にも注意が行き届いている。

博士の学位論文を規定年限内に書くための指導も充実している。

学部、大学院、ともに、「授業評価アンケート」を見る限り、学生の満足する教育が行われているようであり、このことは学部、大学院における教育方針が誤っていないことを示しているであろう。

### 〔研究〕

教員プロフィールの年次報告書から判断すると、教員は着実に優れた研究業績を蓄積している。神戸大学出版会が設立されたと聞かすが、この事業は学術業績の公表をより活発なものにするために貢献するであろう。

### 〔社会貢献〕

海港都市研究センターや、地域連携センターなど、土地柄を生かしたユニークかつ有意義な活動が精力的に行われている。